

## 第六章 洛陽

中和二（八八二）年秋の未明。

ほのかな明かりが生じる。

「少し休みますかな」

韋蘭のそのひと言で、韋莊の体は支えを失う。腰から崩れ、尻餅をつく。冷たい露が染みてくる。己の荒い息が耳に入る。

足がよくここまでもった。無我夢中だった。一步でも遠くへと、闇の中、休むなど考えられなかった。

膝先がこつんと打たれる。脇に立つ蘭が瓢箪を手渡してくる。息を落ち着かせ、口に含む。すぐに咳き込む。

蘭が笑う。

「まるで酔ですからな。一応は酒というものですが。まあ、こんなものでもないよりはましですかな」

むせるのがおさまって、もうひと口飲む。渴き切った喉に貼り付いた最初よりはすんなりと流れ下る。ごくりと喉が鳴り、ふっと見上げる。明るくなったと感じたのは錯覚だったか。真黒な夜空。輝く星は瞬きもしない。

「いましばらく休みますか。追ってくる者もなさそうですしな」

蘭は何も見えない左右の闇に気を配り、隣に腰を下ろす。

やかましいほどの虫の声。いままで全く気づかずになっていた。先へ先へと急ぐばかりだった。

激しい疲労を覚える。抱き寄せる膝の間に頭が落ちる。瞼も落ち、耳の中で、虫の音と己の鼓動が響き合う。

しばしまどろみ、背を揺すられ、体がびくんと縮み、明るさが本物になっている。

「では、いきますかな」

蘭が立っている。

「もうかい」

「ゆっくりはしていただけませんか」

「わかった」

そうは言うが体は動かない。膝を抱いたまま、やっと顔を上げ、

「もうひと口、飲んでいただきますかな」

差し出された瓢箪を手にする。焼けるような酸っぱさが胸に広がり、幾分か頭がはつきりする。

「ここはどこか」

蘭の腕につかまり、ようやく立ち上がる。空にまだ二三の星が残る。眠っていたのはわずかな時間だったようだ。

「星を頼りに走り、しかとはわかりませんが、我が韋一族にとっての故郷から、恐らくはさほど遠くではありませんまい」

「杜陵のあたりか」

「坂もだいぶ上りましたからな」

「長安の外であるのは確かか」

「疑っているのですかな」

「もしもまだ都の内だったらと思うだけだ」

韋荘はわずかに身を震わせる。蘭が笑う。

「心配しすぎですな。いいですか、城壁の下をくぐり抜け、道を走り、原を突っ切り、坂を上って、夜中の間ずっと息を切らして歩きに歩き、それでもまだ俺たちが都の内にいるのだったら、よほど質の悪い狐にでも騙されておるのですな。同じところをぐるぐる回って、ぐいと呑んだ瓢箪の中身は、実は馬の小便ってことでしょうか」

「馬の小便とはこうも酸っぱいものか。都の外だとは信じられぬ気がする」

「杜陵には悪い狐がいると、楊爺が、そんな話をしていましたな。この草深さ、狐が潜み、俺たちを笑っていてもおかしくはありませんかな。あれだけお狐さまを大切にしてきた俺たちだ、まさかひどい化かしようはせんでしょう

う。余程の義理知らずではありませんかな」

韋莊の腹の底がぼっと熱くなる。酔のような酒のせいではない。無性に楊爺に会いたくなる。もしかして会えるのかも知れない。いままではそう思うことも全くできずにいた。

「長安の外に、我らばかりが出られたのが不思議でならない。そうは思わないかい」

「その気持ち、わからなくはありませんが、ともかく、いまは先へと歩きましょう。ここで見つかって、都の内に引きずり戻されてはかありませんからな。狐に騙される方がまだましですな」

蘭が肩を叩く。固まっていた韋莊の足が少し動き出す。

ここが長安の中であるはずがない。延々と坂を上り続けてきた。それでもまだ都の外だとの実感はない。

「これからどうするのかい」

先に立つ蘭の袖を引く。足が重く、従弟のように歩けない。

「そうですね。逃げる、まずはそれだけでしようかな」

蘭は韋荘の腕を引き、ぐいと前に立たせる。

「どこに逃げるのかい」

蘭に後ろから押される。

「しばらくはこの向きで。どうにかなりそうとわかれば、東へと転じますかな」

「東か」

それは虢州の莊園の方角だ。

「気に入りませんか。では、西に向かいますかな。東呉くん、西周くんのよう」

「西か」

「お上に忠節を捧げる気なら、成都を目指すのでも、俺は一向に構わないのですか」

「そうは思っていない」

「では真直ぐいきますかな」

「東であれ、西であれ、選べるのが不思議でならない」

「都の外は広いですから。東でも西でも好きに選んでいただきましょう」

「出てからのことなど考えていなかった。考えたところで仕方がなかったから」

「兄貴はとかく気が弱っていましたな」

「東呉くん、西周くんのような信念はない。恥ずかしいことだ」

「まずは我が身。次が身内。大義を先にするのは、悪いとまでは言わずとも、さほど結構とも思われませんな」

「それはどうかな」

「いずれにしても、しばらくは南にいきましょう。長安に連れ戻されるのは絶対に避けたいですからな」

「それはそうだ」

韋莊はまた背中を押される。疲れ切った足が痛み、息がすぐに荒くなる。

長安の城壁の外に出たいとの一心はあった。その先は考えていなかった。どうせあり得ないことだったからだ。

昨夜、ついに口が開き、手が外に出た。仲間とともに掘り続けてきた穴が城壁の外に通じた。わずかな荷を取りに小屋に戻り、闇の訪れを待つて、外に飛び出した。それぞれに思う方角に散った。東呉くんと西周くんは南西を選び、共にいこうと声をかけてくれた。「すまない」と答え、蘭と南東に走った。咄嗟には、二人の誘いに従えなかった。では、熟慮する時間があつたらどうだったのか。

成都には皇帝がいる。唐の再興のために身を捧げるのなら、成都に向かうべきだ。共に貢挙を目指していた二人と同じ方角にどうして走らなかったのか。かの南山での決意からすれば皇帝のもとへと走るのが正しい。咄嗟の判断こそが実は己の本心なのか。

「どうなっておりますよかな」

道が少しばかり緩やかになってきたところで蘭が言う。



「何がだい」

「莊園がですな。伍七に聞いて以来、何もわかりませんからな」

長安の街で伍七に会ってから二年になる。

「見ぬ方がまだしもよかったと、後悔せねばならぬ氣もする。昔を知る者が、いまの都に帰ればきつとそう思うように」

「兄貴は悪い方へと氣をまわすのが好きですな」

「都でさえああた。虢州ばかりが例外とはならぬだろう」

「都は都、外は外。こうして俺たちは幸運にも都を出られたのですから、もう都のことは忘れましょうや。先はまた先のこと。どうです、外を吹く風は格別ではありませんか。この佳き風に、何事も任せていけばよいではありませんか」

蘭は前に出て、両腕をゆったり大きく広げ、天地間の氣を胸へと収め、長々と嘯く。

「そなたは相変わらずだな」

この従弟のこの調子に幾度となく助けられた。これからもそうだろう。蘭なしではいまここに生きてゐる己はない。

ただ一時期だけ、蘭を支えねばならぬときもあった。遠い昔のようだ。あのとき蘭があのようにでなかつたならば、逆に己が駄目になっていた。蘭を支えねばとの思いがあつて、かろうじて踏みとどまっていた。

韋荘も大きく息を吸う。朝露に濡れた草の匂いが胸に広がる。

あたりにははっきりと朝の明るさになった。

上りがまたきつくなる。息が切れ、首が垂れ、これよりは歩けぬと思うところをこらえてなお上り、その幾度かの繰り返しで、ふっと足が楽になつて長い坂が終わる。

腰を伸ばし、見上げる。

「これが空というものか」

両腕を突き上げる。どこまでも高く澄み上がる空だ。日が間もなく昇るのだらう、空の四半分が赤く染まっている。

「生まれて初めて空を見ているかのようですな」

「そうだ、そのような気がする。空とはこうも美しいものだったのか」

「昔から空はこうでしたが」

「都の空はこうではなかった」

「ここが都の外だと、兄貴も了解できるようになりましたかな。狐に騙されているのでなければですが」

「この美しい朝に、誰が騙されるものか」

「振り返っていただければ、都の外だとの思いはもつと確かとなりましたよ」  
蘭は韋荘の肩を軽く後ろへと引く。

向き直ると、ここまで上ってきた草の斜面。それが波打つ丘となって遠くへと連なり、その先は荒涼とした灰色の大地。蘭が腕を伸ばす彼方に、一つの暗黒の塊がある。

「あれですな」

「あれか」

「そうですな」

「あれなのか」

かつての輝く華の都。いまはそこだけが黒く沈んでいる。都はあのようになっていたのか。

いまさら驚くことではない。己はその中にいた。その日々を思うと、ここに立っているとの実感が薄れる。この己は本当に都の外にいるのか。もしかすると、暗黒の内にも身を置いているのではないのか。

膝がわなわなと震え出す。それを抑えると、我知らずに、うっと呻き声が漏れる。両手で己の頬を叩く。胸を叩く。地面を踏み鳴らす。

「兄貴どうしましたかな。喜びに気でも触れましたかな」

「そうかも知れぬ。気が触れでもしなければ、ここにこの身があるはずがない」

「やはり狐ですか。馬の小便を飲んで正気に戻っていただけましよかな」  
蘭の差し出す瓢箪からぐいと喉に流し込む。頭にしみる酢の味に、

「これで正氣に戻ればよし。長安にいた間中こそ、気が触れていたようだ。そうでなければ、あのような日々を過ごせるはずがない」

とりわけこの春からがそうだった。己の心は虚ろだった。ようやく魂が戻ってこようとしている。

「これがまさしく馬の小便、正氣に戻って見たら、全ては元通りと、二年前に帰れたら、どれほどよいですか」

「あそこであったことを思い出せるかい」

「騙されていた間のことは、夢幻と、忘れますかな」

「あれはないものと、あの日々からしてそう思っていたかった」

「あのとき、俺はそうしていたのでしよう。気が触れて、全てをないものとした」

蘭はかすかに笑い、酔のような酒を飲む。

「そなたに先を越され、私は正氣でいなければならなかった」

「兄貴には面倒をかけましたな」

「いつも助けられているばかり。一度くらいは逆もあるう」

「いや、これからだって、ちよくちよく頼みますかな」

「もう十分だ」

蘭は瓢箪を振り、

「空ですな。願うべきは、お狐さまに旨い酒を吞ませてもらってですな、再び泰平の世に戻ったと、現実にはありもしない栄華を謳歌して、その楽しい思いのまま、馬の小便にあたって死ぬことですか」

「よほど馬の小便が好きなのうだ」

「どんな味か、一度くらいは賞味してもよろしいかと」

二人は笑う。

草の斜面ににわかにもるい光が射してくる。それは遠方へと滑り降り、大地が一斉に白くまばゆく輝く。日が昇ったのだ。暗黒の長安へも朝日が及んでいく。

「長安も朝ですな」

「またあの恐ろしい一日がこれから始まるのか」

韋莊の顔がまたこわばる。

己の長安の日々は昨日で終わった。大勢の人々が、いまも昨日に続く今日をあそこで迎えている。あつてはならぬはずの日をまた一つ重ねる。ぽっかりと開いた穴によって、我らの積み重ねは終焉を迎えた。あそこにおいて、昨日の続きを厭うのなら、正気を失うか、生命を失うか、どちらかを選ぶしかない。蘭は一時期正気を失い、次に己も失った。弟の莠とその家族、それに楊臆は生命を失う方を選ばされ、阿枉もまたそうになった。生きて外に出られたのは二人だ。

一年半前の初夏に、官軍が長安に入った状況がおぼろげながらもわかるようになったのは、しばらく後になって、さまざまな噂を耳にしてからだつた。

黄巢は官軍との正面切つての戦いを避けて都を脱出した。韋莊と蘭が平康坊に向かい始めたころに、官軍の一部が都の城門に到達し、守る者のいない

城内へとなだれ込んだ。兵士たちはこれ幸いと、見境のない略奪、虐殺に走った。城を屠るのは戦の常である。官軍は六軍に分かれ、指揮はばらばら、よい得物を争って同士討ちとなった。阿枉がお狐さまの祠から出た夕暮れ時には、宮城が修羅場と化していた。六軍の將軍の二人が死ぬ事態となり、未明までに全軍が長安城外に引き上げた。

韋荘たちは祠の脇で夜をじっと過ごし、夜明け前、気丈にも阿枉が細い火をおこして米を煮た。ほぼ丸一日を何も食わずにいたのに、粥は喉を下らず、二口ばかりで箸を置いた。蘭は倉の壁によりかかって膝を抱えたまま、いくら声をかけても身動き一つしなかった。

日が昇ると、周囲から、かすかながらも、人々が動く気配が感じられた。韋荘は阿枉とともに家の中に入った。楊臆は奥へ通じる扉の前で、莠の息子はその後ろで、陳婆やはさらに奥で、それぞれ殺されていた。莠の妻と娘は、奥の部屋で互いに喉を突き合っていた。

阿枉に腕を引かれて外に出ると、蘭は同じ格好でうずくまったままでいた。



昼ごろになって、町に特に変わった様子はなく、亡骸をこのままにもしておけないと、韋莊は勇気を奮って、阿枉とともに、まずは、碁盤の上どころが、莠の首を阿枉と井戸端で洗った。莠の硬直した亡骸を床に横たわらせ首とつながれた。順にそのようなことをするうちに夜になり、朝の残りの粥を食べようとしたが、なかなか喉を通らなかつた。一日じつとしていた蘭がいつの間にか消えた。

倉で阿枉と夜を明かすと、翌朝早く、太遅先生が蘭を連れてきた。蘭は口から涎を垂らしてへらへら笑っていた。太遅先生の話はさらに異様だった。夜が明けてふと見ると、妾の遺骸にびったり寄り添うように蘭が横になっていた。

太遅先生がしきりに鍋を覗くので、阿枉が米を煮た。蘭は何も言わずに粥を食べ、壊れた自分の部屋へとのっそり入っていき、そのまま出てこなくなつた。

その日の朝のうちは静かで、太遅先生とともに両家の亡骸の始末をしてい

ると、昼ごろから小雨が振り出してきて、三人の気持ちは挫かれた。兵士の一団がいきなりどやどやと通りに現れ、三人は倉に身を隠した。「黄王さまがお帰りになった。唐に協力した者は容赦なく厳罰に処す。正直な民は安心せよ」と、呼ばわった。太遅先生は、のこのこ出ていき、安邑坊は唐の兵士によつて滅茶苦茶に荒らされ、生き残ったのはごくわずか、それも我々が黄王さまに従順にお仕えしていたからだ、兵士に訴えた。その証拠にと、太遅先生は自身の屋敷や、向かいの官人、それに韋莊の家までも見せ、三軒で無事だったのはたった四人だけであることを強調した。蘭の店では、壁に掛かる額を指差し、それが皮日休から贈られた書であると説明した。指揮官らしき兵は皮日休の名を知っていて、蘭が正気を失っている様子に同情してくれた。

どうしてまた黄巢が戻ってきたのか事情はわからなかったが、一昨日のようなことはもうおこらないだろうとほっとした。これでは官軍と賊軍とがまるで逆ではないかと、唐朝に対する憤りが湧き出してきそうになった。弟たちがなぜ官軍に殺されねばならなかったのか、それは考えまいとした。

太遲先生の機転で、ひとまず安心していられることになった。三人は仕事を続け、棺の用意まではできないので、商売用の櫃の中に亡骸を仮におさめた。雨が激しくなつて、なかなかの大仕事だった。蘭は何も手を出さず、夜の食事のときだけのそつとやつてきた。

翌日の昼ごろ雨脚が弱まると、町が騒がしくなつた。「唐に協力した者は容赦なく嚴罰に処す」と兵士が言つていたことが、このときから想像を絶するやり方で始まつた。

後にわかつたところでは、官軍が宮城で同士討ちを始めたと聞いて、黄巢は猛然と舞い戻つてきた。金銀財宝に多数の女を好きなかだけ奪つた官軍は、手にしたものを早く持つて帰りたいだけで、戦う気はもはや失せていた。重い荷を負い、女を満載した車を曳く官軍は、黄巢軍の格好の餌食となつた。黄巢は宮殿に帰還し、そこが無残な姿に変わつているのを見て激怒した。

官軍に少しでも協力した者を全て殺し、都を清めよと、嚴命した。「洗城」が行われた。血で長安を洗い清める恐るべき儀式である。長安の水路に血が溢

れた。

幸運にも、洗城の必要がないほど官軍によって破壊された安邑坊は、とくに変わることもなくすんだ。

もう一つ運がよかったのは、蘭が買い込んで床下に溜め込んでおいた食糧が略奪されずに残っていたことだ。それで太遅先生とともに食いつなぐうちに、夏の盛りに至り、ある日、太遅先生は何を思ったのか、若返りの薬を黄大王さまに売り込んで大儲けしてやると言い出し、調合を始めた。何日もの間煮詰め、できあがったものを試しにと舐めると、泡を噴いて倒れた。阿枉は蘭を引つ張ってきて、痙攣する先生を見せた。蘭はげらげら笑い、脈をとって、「これは遅すぎましたな」と、また笑った。にわかには真顔になり、「兄貴、俺の薬箱を持ってきてくれませんか」と言った。部屋にころがる薬箱を取ってくる、太遅先生はすでに事切れていた。「さすが、先生は日頃の技をあくまでも極めようと、薬の盛り違いで見事に死なれた。俺も先生に負けぬよう、風任せを極めてからこそ死ぬべきですな」と、太遅先生の目を閉じ

てやった。

蘭は元に戻った。数日すると、皮日休のもとに出向き、東市で商いをする許可状を得てきた。黄巢は洗城後、都の再建に取り掛かり、東西の市を再開させた。市では厳しい価格統制が敷かれ、品物もいくらからは流通し出した。しかし、必要とするものが公に定められた価格で買えることはまずなかった。蘭は、誰もいなくなった武大人の店を自分の商売の拠点とし、そこに残っていた絹や手持ちの書画骨董の類を売りつつ、米やさらには塩にも手を出した。それはかなり危うい商売で、従弟に控えるよう言うべきだったが、蘭が回復すると、韋荘の方がおかしくなってしまった。従弟に頼る気持ちが生じたのと、何よりも平康坊にいったのがいけなかった。

平康坊は安邑坊や東市以上にひどく、町の半ばは崩れ、半ばは焼けた。異様な臭気が満ち、官軍にやられたのか、洗城によるものか、どちらともつかぬ死骸が放置されていた。仙水楼があつたとおぼしきあたりにたどり着くと、迎えてくれたのは無数の蠅だった。近づく人影に、渦巻く黒雲となって立ち

昇った。呆然と帰る途中で出会った人に問うと、平康坊の妓女はことごとく官軍に攫われたと聞かされた。銀犁もその一人であったのかと思うと、韋莊の頭はぼんやりとし、その日から、阿枉が修復したお狐さまの祠に祈ることしかできなくなつた。どうにか生きながらえていた東呉さんと西周くんが訪ねてきてくれても、ろくに話もできなかつた。心配する二人に、阿枉は氣をきかせて米をわけ与えた。

蘭のあこぎな商売のお蔭で、食糧事情が切迫するなかでも、他の人々に比べればましな暮らしができて、どうにか夏を越した。秋になり、今年の収穫物が都に入ってくればひと息つけるのではと期待されたが、裏で取引される米穀はますます高騰し、一斗三十緡になつたのが最後、それからはいくら金を積んでも手に入らなくなつた。蘭の商売は頓挫し、追い討ちをかけるように、黄巢の朝廷に異変が生じ、皮日休たちが処刑された。皮日休のような読書人と、流賊上がりの武将とはもともとそりが合わなかつた。黄巢は政権の引き締めを図るため、知識人の肅清を断行した。

蘭は後ろ盾を失い、黄巢政権に対してほのかに抱くこともあった期待も消えた。皮日休に連座するのを恐れて東市の店を引き払った。蘭の商売を憎む誰かだったのだろう、安邑坊の店に大量の穀物が隠匿されていると密告する者があつて、三人は店から逃げなければならなくなった。

長安は広大である。最盛期にはひと口に百万戸と言われたが、それだけでも都の隅々までを埋めるには足らず、皇城から離れた南端の坊には人家のない野原が広がっていた。とりわけ洗城を経て人口が激減し、南の地域で人の気配が絶え、黄巢兵士の目を逃れる人々の潜伏する場となった。韋荘たちは、野に穴を掘って隠れ住む逃亡者の仲間に加わり、黄巢を初めから憎んでいた東呉くん、西周くんも逃げ込んできた。

冬になると、不足した米の代わりに人の肉が売られ、肥えた人間には百緡の値がつき、黄巢の兵士は長安周辺の村へ人狩りに繰り出していると噂された。野原に潜伏する人々は、互いに乏しいものを融通し合つてかぼそい命をつなぎ、そこに悲惨な病が襲った。高熱を発し、続いて激しい下痢と嘔吐、

もともと体が弱っていた人々はばたばたと死んだ。隠れ小屋にいた、韋荘、蘭、阿枉、東呉くん、西周くんの五人の内、最初に韋荘が、続いて東呉くん、西周くんが倒れた。蘭は危険を冒して安邑坊の店に戻り、壁の間に隠しておいた薬を取ってきて三人に吞ませた。阿枉の懸命の看病もあつて、東呉くん、西周くんの若い二人は快方に向かった。韋荘はいつまでも熱が下がらず、このまま死ぬのだろうと、朦朧とする意識の中、一篇の詩を詠じた。

与君同臥疾 君たちと同じ病に伏して

独我漸弥留 私だけはまだ治らない。

弟妹不知処 わが兄弟はどうしているのか

兵戈殊未休 この戦乱の終わらぬときに。

胸中疑晋豎 胸は張り裂けそう

耳下鬪殷牛 死の忍び寄るのが耳に聞こえる。

縦有秦医在 たとえどのような名医がいても終わりだ

懐郷亦淚流 故郷を思つて涙を流すだけ。



己ばかりが治らぬのは、一家を破滅させた身の報いであろうか。死ぬ覚悟を決めると、東呉くんも西周くんも、この詩に泣き、励ましてくれた。たとえ病から治っても、その先は苦しい日々があるだけ、死んでしまった方が楽であると思えた。

蘭が煎じてくれた薬を呑み、深い眠りに落ちた。夢で、韋荘は子どもに戻り、楊爺の背に負われ、狐潭の畔を巡った。お狐さまの祠に達すると、「もう大丈夫でございましょう」と楊爺が言った。途端に、祭の日になり、阿枉を乗せた伍七の小舟が漕ぎ寄せてきた。阿枉を守ってやらねばと思った。

目が覚めると、熱は引いていた。今度は阿枉が倒れた。火が出るような熱さだった。この阿枉を死なせてはならないと、それまでに阿枉がしてくれたことを韋荘がした。激しい下痢と嘔吐のたびに、脇について体を支え、汚れたものを洗った。最も遅れて発病した阿枉の症状は最も重く、蘭の薬も効かず、血を吐いた。兄や伍七に必ず会えるからと、手を握って韋荘は励ました。蘭は店に戻り、お狐さまの祠に入れてあった金の包みを取ってきた。神策軍

の兵士となった兄が置いていったものだ。阿枉はそれを抱くと、細い泣き声を上げ、兄と伍七の名を呼び、お狐さまに二人の無事を祈り、そして死んだ。

小屋の近くに穴を掘って阿枉を葬った。わずかばかりの食物を得た日には、こんもりと盛り上がった土の上に阿枉の分も供えた。春になっても、病で弱った韋荘の体の回復は遅れ、ある朝、小屋に一人残って、地面に伸び出してきた草をぼんやり眺めていると、阿枉の墓に置いた椀が不意にゆらりと動いた。にゆうつと手が出た。「あっ」と思うより早く、姿を見せた老婆が、椀の中身を口に流し込んだ。衣服がぼろぼろなのはお互い様だが、それにしても夜叉かと思えるほどに醜悪な姿に、思わず凝視すると、肩に妙なものが括りつけられていた。嘴が太い鳥、鸚鵡の死骸であるらしかった。先方もこちらを見つめ返して、「あっ」と声を上げ、ぱったりと地面に手をつき、いきなり泣き出した。その声でわかった、仙水楼の崔婆だった。地面を叩いて激しく泣き、しばらくしてようやくおさまったのを潮に、どこでどうしていたのかと尋ねれば、それは聞かないでいた方がまだしもよかった話であった。

「まあ、まあ、何でございましょう。結局のところ、結局のところ、銀ちゃんとあのお方を不幸にし、この婆めをこのざまにし、この鸚鵡を殺したのは、結局のところ、結局のところ、誰のせいであつたのでございましょうか」

早口で叫ぶように言った。脇に寄つて宥めると、崔婆はきよとんと呆けた顔になり、

「まあ、まあ、旦那さまでございますか。早速お支度を」

そこらをうろうろしてから、ぺったり地面に座り、ぼそぼそ話し出し、よくよく聞くと、それは黄巢が都から脱出した夜のことであるらしかった。

それはおよそ次のようなことだった。遣手婆さんから聞いていた通り、銀犁に惚れ込んだ黄巢の將軍がいた。凜々しい若武者で、その夜「都を出ることになったから一緒にいこう」と、銀犁を迎えにきた。積まれた銀を見て、崔婆も同行しようと思つたが、銀犁は拒絶した。將軍は力づくでも口では言ったものの、惚れた女に手荒なこともできず、崔婆と交互に説得する間に、出発の刻限に迫られ、激しい苦悶の末に、諦めて出ていった。崔婆は

怒って銀犁を厳しく叱責した。翌日、官軍が平康坊に乱入した。

話がそこに及ぶと、崔婆は醜く顔を歪め、

「もうもう、話しても、話しても、結局のところ、結局のところ、どうにもならないことでございます」

地を手で撫ぜまわし、腹ばいでくるくる回り、ふっと起き上がると、妙に平坦な声に変って、仙水楼にも兵士がきて、どの扉も閉めて入れまいと抵抗したが、虚しく撃ち破られ、「相思、相思」と鳴く鸚鵡は籠ごと踏み潰され、若い女たちはむくつけき男の肩に乗せられたと言い、鸚鵡の死骸を見つめて、気味悪く笑った。

「それで、あれは、どうしたんだい」

「それでも何も、死骸が残ったのは、死骸だけでも残ったのは、この鳥だけでございます。妓楼が何軒も建てられるほどの高価なこの鳥もこんなになつて、相思、相思とも言わず、銀ちゃんは、ただ最後に、ただ最後に、『あの方にひどいことをした報いです』と、言ったのでございますとも」

その銀犁の言葉を聞き返すと、

「何でございますか、何を言っていたとお尋ねになるのですか。それは、この鳥に、お聞きになってくださいまし」

崔婆は鳥の頭を叩いた。

そして、壊された妓楼の残骸の上にしゃがんでみると、若い将軍がきて、「銀犁を取り戻してくる」と、言い置いて走り去ったと、言った。

「何でございましょう、結局のところは、結局のところは、あのお方も亡くなってしまうわねたのでしよう。それは誰のせいであつたのでしようか」

鸚鵡とともに袖乞いをする身の上を哀れっぽく語り出した。

韋荘は小屋に入り、埋めたおいた銀の粒を掘り出し、

「いろいろ世話になった礼だ」

と、渡した。崔婆は懐にねじ込み、鸚鵡のような声で礼を言い、ふらふらと立ち去った。

後で戻ってきた蘭に話すと、

「崔婆の奴、よい金蔓ができたよ、ちよくちよくせびりにきましようかな」  
崔婆の話が事実であるか疑わしいように蘭は言った。崔婆はそれきり二度と現れなかった。

崔婆の毒気にあたったのか、その日から韋莊は頭がまたぼんやりしてしまつた。そうでなかったならば、己を責めて責め抜くことになつていただろう。春の終わりに隠れ場所をさらに南に移し、穴を掘り始めた。

昇りくる朝日が明るく照らす丘の上に立ち、春以来初めて己の意識がはつきりとしてきたと、韋莊は感じる。いままでは、あの彼方の長安において、己でいて己でなかった。己の身におこっていることが、全て他人事のようにだつた。そうでなければ、生きていられなかったのだ。

晴れ上がった秋空。その下で長安だけは黒く沈んだまま。己はその黒い側から、光の満ちている側に出て、いまここにいる。

目に涙が溢れ出てくる。安堵であろうか、悲しみであろうか、自責の念か。「昨日まではあそこにいたのですな」

「今日も同じ日々を続ける大勢の人々があそこにはいる」

「我らばかりはここにいますのですな」

「そなたのお蔭だ。そなたがいなければ、とつくに死んでいた」

「いや俺は無力でしたな。腹立たしい限りに無力でした。皆を死なせ、かうじて兄貴一人を連れ出せたただけだ。こうも無力であるとは」

蘭は地面を踏み鳴らす。

「私こそ無力。それ以上に愚かだ。唐土の民を救うなどと大きく言いながら、何もできないだけでなく、過ちによって皆を死なせた。そうであるのに、私ばかりがここに立っている。どうしてなのか。誰に詫びたらいいのか」

「詫びたところでどうにもなりませんでしょうな」

「その通りだ。私の非をいまさらどうにもできない」

「考えるべきは、これからどうするのか。唐土の民を救う志がいまもあるのなら、皇帝の元に走るのがよくはありませんかな。成都には、曲がりなりにも唐朝を再興しようとの思いを抱く者が集まっておりますからな」

「曲りなりにもか」

弟たちは官軍によって惨殺された。その後の洗城も恐るべきものであったが、官軍がくるまでは長安はまだしも平穩だった。曲りなりでも、唐朝への忠義心はまだあるのか。西周くん、東呉くんと同道しなかったのは、それがないからなのか。

「かつて杜甫は、同じように賊の配下から逃れると、迷うことなく皇帝の元に馳せ参じましたな」

「西にいくべきと、そなたは思うのかい」

「俺は、兄貴が貢挙に受かるまでその手伝いをする約束をした。兄貴が皇帝の元に行って、いつか行われる貢挙を受けたいと言うのなら、喜んでくつついていくまでですな」

「貢挙など、もう終わった夢だ」

「では、虢州ですか」

「都には苦しむ人々がいる。幸運にも外に出られた者が、ただ己の身を安ん



「じるために帰郷してよいものか」

「では、成都ですか」

「そうしようとは思えない」

「ではどうしますかな」

「わからない。考えてもいなかった」

「それでもよろしいでしょう。今日一日は南に向かい、西か東か、明日また考えれば」

「明日考えても、西には、やはり、いかぬだろう」

「ならば、帰るのですな」

「虢州には帰りたい。叔父上、叔母上がいかにされているのか知りたい」

「だったら迷うことはありません」

「しかし、帰ってよいのか。帰って、皆にどう言うのだ、この長安であったことを。二人しか帰ってこられなかったことをどう話せばよいのか」

「ありのままに言えばよいではありませんか」

「そうしかないだろう。で、帰って、それから先はどうしたらよいのか」

「その先など、帰ってからでよいではありませんか。あちらにはあちらの風が吹いておりましょう」

「貢奉を受けるために虢州の莊園を出た。それを果たせずには虢州に戻って、この身をどうしたらよいのか、わからなくなってしまうだろう。かつてそなたと最初の旅に出る前にそうであったように」

「考え過ぎですな」

「まだ、都に外に出たことが、本当にはわかっていないようだ」

「俺もですな。ともあれ、この幸運は生かさねば勿体ないでしょうな」

「何に生かすのか」

「わかりませんな」

韋莊は胸を叩き、

「せめて、まずは、ここにあるものを、外に出しておきたい気がしてきた」

「ほう、何がそこにあるのですかな」

「わからない。この胸を引き裂けば見えもしかろうか。何かがあるのだろうか。取り出せるものなのかもわからないのだが」

「奇妙なことをおっしゃいますな」

「おかしいことだ。自分で言っていて、何だかわからない」

「兄貴も俺も、そのうちに少しずつまともになっていきましよう。莊園に帰れば、よい知恵も出ましようかな」

「そうかも知れぬ」

「では、適当なところまで行って東に向かいましよう」

「そうするか」

そう答え、吸い込む息に、湿った草の匂いが雑じる。懐かしい思いが湧き上がってくる。

これは莊園の香りと同じだ。都にはなかったものだ。南山に至る坂が朝露に濡れると、このような匂いがした。

熱病でうなされていたときの夢。死ぬに違いないと覚悟を決めたとき、楊

爺が救いにきてくれた。こうして長安から抜け出せたのは、いつもお狐さまに祈ってくれている楊爺の心が通じたものであるのだろう。

望郷の念に火がつく。

狐潭を見たい。大きくもない池に宇宙が籠っていると感じた狐潭。釣魚台に立って、楊爺とともに釣り糸を垂れたい。疲れたこの体も心も、楊爺が隣にいてくれれば、たちまち元に戻るだろう。

莊園に帰って、見ぬ方がまだしもよかったと後悔せねばならぬ気もすると、さつきは言った。そのようには思うまい。長安どころか、唐土の全てが廢墟となっても、虢州の莊園だけはそうはならない、あそこは常に変更ってはない。楊爺がいるのだから変わるはずがない。

「先を急ぎますかな。せつかくここまできて、詰まらぬ目に遭い、虢州にいけなくなつては悔しいですからな」

「いこう」

韋莊は蘭の手を取る。

「それにしても、兄貴はひどい格好ですな。これは、見られたものではありません」

「そなたこそ、髪は土にまみれ、顔は真黒、どこが鼻だか髭だか、わかったものでない」

「貢挙に落第した失意の余りに、妓女に狂った痴れ者から、淫らな匂いの染み込んだ手巾を受け取った長安のお乞食さまも、これほどの格好はしておりませんでしたな」

「そんな昔を言うでない」

「この二人、追っ手の目を厭うまでもなく、白日のものは、みつともなくて歩けませんな」

「せめて顔だけでも洗いたいものだ。肌がさっぱりすれば、吹く風の向きもはっきりと感じられ、正しく風任せにもなれるというものだ」

「それは俺の言うことですな」

黒く沈む長安に背を向け、前方に連なる丘へと歩み出す。朝日に朝露が輝

き、秋の爽やかな風が軟らかに吹き始める。

「この場で殺されたのでしようかな」

韋莊がつまずいた場所から、がちやがちやと蘭が引き摺り出す。

「それは何だい」

韋莊は尻について足首を擦る。捻りはしたが、これくらいなら歩くのに支障はなさそうだ。

「鎧ですな。胸のあたりの部分ですかな」

「草に隠れて見えなかった。鎧の主はどうしたのだろうか」

「狼に食われたか、朽ち果てたか、どうだったでしょうかな。黄巢がきたときの戦だったとしたら、もうすぐ二年。捜せば、そこらに骨くらいありましようかな」

「黄巢が潼関に迫りつつあると聞こえてきたのは、遥か遠い昔の事のような

気がしないかい」

「いろいろありましたからな」

「あり過ぎた。阿枉の兄を見送って以来、何もかも変ってしまった」

「この鎧を着ていたのは、実は阿枉の兄かも知れませんか」

「まさか」

「まあ見てください。この飾りがついたところなど、なかなか上等な代物。

煌びやかに出陣していった神策軍のものであって不思議はありますまい」

こびりついた泥を落とすと金の輝きが現れる。

「これに足をとられたのも何かの因縁か」

装具ばかりは立派であった神策軍を思い出し、韋莊は立ち上がる。足首の感触を確かめつつ、近くの木にからまる蔓を引き、その先から花の房をもぎ取り、鎧に載せる。

「手向けの酒とてここにはないが」

阿枉の兄であると決まってはいるが、憐れにも斃れた一人の兵士に合掌

する。

二人が立つのは禁阬（きんこう）。潼関の左に通じる昔からの抜け道である。普段は塞がれて通れないのだが、潼関には賊がいると聞き、この道を選び、今朝の暗いうちから、谷を埋める灌木やら草やらを払いつつ進んできた。韋蘭が携えてきた一本の短剣が、木にからまる蔓を切る道具であり、二人の身を守る唯一の武器でもある。

木の股に載せておいたその剣を手にし、

「では、続きといきますかな。幸い誰もいない様子、ここらを抜ければ、後は難所もありますまい」

「この兵士のように斃れるのは御免だ。早く抜け出よう」

「兄貴も欲が出てきましたな」

「帰り着きたいだけの、ごくささやかな欲だ」

「必死にならねばそれも叶わぬこと。ささやかとはとても言えませんな」

長安からここまで、よくぞこられたものだ。人を狩るとの噂は事実無根で



はなく、どこの村も廃墟と化していた。生き残った人々は山中に逃れ、稀に出会うのは痩せこけた老人だけだった。一昨日の夜、廃屋に一人住む老翁が恵んでくれた草の根を煮た妙な汁が最後の食事だ。木の実を摘んで飢えをこまかしてきた。

しばらく進み、蘭と交替して短剣を握り蔓を切り払う。体が弱っていて、すぐに息が切れ、腕がなまる。

蘭が代わってまた前に立ってくれる。

木々の間の空を見ればもう昼に近い。二年前に戦いがあったらしいこの谷も、草木に深く覆われている。枝を払う音が響く他は、鳥の声が交じるくらい。かつて安祿山の乱に際して「国破れて山河あり」と杜甫が歌ったのは、このようなことであったのか。国家が崩壊しても、自然は何事もなかったように人の営みの跡を覆い尽くしていく。むしろ以前よりも生き生きしてさえている。

家に帰ろうとのささやかな願いをあたかも阻むかのように、自然は枝を伸

ばし蔓をからめ草を繁らせている。潼関より東に出れば、ここまでは異なっているかも知れない。元のままと言うこともあろうか。都で出会った伍七は、莊園は変らぬと言っていた。いまでもそうであってほしい。

莊園にたどり着くまで、この疲れ切った体をどうにかしてもたさねばならない。あの鎧の主のようにここで斃れたくない。

蘭の息が上がってきている。

「さあ、代わろう」

前に出ようとするのを蘭が制止する。

「あれは、もしかして、誰かきますかな」

蘭は耳に手をあてがう。何か音がしているような気がしなくてもない。岩のころがる斜面が迫りきて、谷のこの先で狭まっていて、見通しがきかない。鳥か獣か、ただの風か。

蘭は韋荘の腕を掴み、

「兄貴、上にいこう。君子危うきに近寄らずですから」

崖を這って登る。突き出た岩を越え、斜めに生える木の幹の後ろ側、ころあいの場所に身を潜める。

ぜいぜいと苦しい息が整ってくる、音が確かなものとして聞こえる。枝を払い、草を踏んで、人がこちらへと近づいてくる。

「たぶん一人でしょう」

蘭は握り拳ほどの石を掴む。

「どうするのだい」

「食い物を拝借する誘惑に兄貴は克てますかな」

「盗賊の真似をする気かい」

「真似ではなく、本物の盗賊。兄貴も俺も、髭は伸び放題、着るものはぼろぼろ。どこから見ても山賊ですな」

「こんなに痩せた、こんなに弱そうな山賊がどこにいる。一人でくるのなら、それこそ肝の据わった盗賊ではないのかい。かえって酷い目に遭わされる。おとなしくやりすごそう」

「まあ、用心のために、兄貴も石を」

身構えていると、低く人の声がする。

蘭は中腰になって下を覗き見る。

「笠を被っていますな。坊さんでしよっかな」

「僧形の盗賊かも知れぬぞ」

蘭の裾を引く。

よく通る声だ。経文を唱えているようだ。

下の男が、

「そこにどなたかおられましようか」

蘭の裾をさらにぐいと引いて身を隠そうとする。蘭はかえって立ち上がり、

「兄貴、見てくれ」

韋荘の腋を引つ張り上げようとする。仕方なしに見ると、錫杖を手に、笠を斜めに、こちらを見上げる長身の僧がいる。

「兄貴、わかりますかな」

じつと目を凝らす。

蘭は身を翻し、斜面を勢いよく滑り降りる。韋荘も、もしやと思うと、

「仏蕃上人さま、どうしてこれに」

谷の底に降り立った蘭と向き合って、

「これはまことに奇遇」

ぐいと上げた笠よりあの魁偉な顔が現れ出る。

しばし三人は言葉もなく、ようやく口を開けば、互いに尋ねたいことは多々ある。

二人が長安を脱出してきたと言えば、仏蕃はこれより長安に入ると言う。

二人は驚愕し、都の恐るべき状況を語る。

「さればこそ参るのです。愚僧の此の度の役目、長安に参ること。ここでお会いし、都の様子を伺えましたのも、この役を果たすためでありましょう。そう考えてもよいはず。違いまししょうか」

仏蕃は大きな眼を向ける。南山のときより眼光は鋭さを増す。それを見て、

決意は変えられまいと思いつつも、

「長安の門は厳しく守られ、賊の仲間の他は、誰一人として、出ることも入ることもできません。我らは何ヶ月もかかって地に穴を掘り、ようやく抜け出たばかりです」

「この痩せこけた僧が一人が入ったところで、黄巢には何らの害にもなりません」

「一人が入れば一人分の食べ物が減りましような。人が人を食うありさまですから」

「幾日食わずとも、愚僧は一向に構いません。この干からびた体でも食いたがる者がいれば、それもまたよいでしょう」

仏蕃は穏やかに微笑む。

「あの都を見てきた者として、お止めせずにはいられません。首尾良くお入りになれましたも、お命をお捨てになるのと同じです。あの都では、よほど幸運な者だけが生きられるのです」

「そう伺えばなおさら参らねばなりません。いま生きていても死の淵に落ちるばかり、すでに無数の人々が亡くなっているのなら、それを救うのが愚僧の役目であります」

そのように言う仏蕃を止めるのは返って非礼と韋莊は口を閉じる。

蘭は、いつもの調子で、

「長安には数え切れぬほどの仏寺があります。その坊主連中が人々を救おうと何かしたでしょうか。黄巢が入ってきてから、縁故のある者を匿い、隠し持つ食べ物分けたりと、それは誰もがすること。かく言うこの俺も坊主どもと同じ、己の身を守るに汲々として、言い訳のようになやすくできる施しをした。誰しもそのようなものですか」

「他の沙門がどのような振る舞いをするか、愚僧の知るところではありません。愚僧は愚僧の為すところを為すままです」

錫杖をつき、そうでなくても高い背を仏蕃は真直ぐに伸ばす。

南山において、一瞬ではあったが、仏蕃の前に我が身を投げ出しそうにな

った。あのときにもしもそうしていたならば、この三年間は全く異なるものになっていただろう。あり得ぬことながら、仏蕃に取り残されたような気持ち

「仏門もいろいろなのでしょうか。儒家もいろいろですからな」

韋荘は恭しく揖し、

「前にもお尋ねしたことはありませんが、民を救うとはいかなることなのか、いま一度お教え願えませんでしょうか」

仏蕃は錫杖を掲げ、静かに短く経文を唱える。

「恥ずかしながら、この愚僧、救いとは何であるのか、いまだに知っておりません」

「民を救うために都に向かわれると、いまおっしゃったではありませんでしょうか」

「その通りです。申しました」

「では、長安では、いかなることをなさるのでしょうか」



「金剛經の御札を配ります」

「それが救いとなりましようか」

「それが救いでないとしたら、他にどのような救いがありましたら」

もしも長安にいる間に仏蕃に会い、札を受けていたら、救いと思えたかどうか。

「私には一向にわかりません」

「愚僧にもわかりません」

今度は蘭が言う。

「わからぬとは、どういうことでしょうか」

「救いとは何であるのか愚僧は知っておりません。ですから、正直にわからぬと申すしかありません。御仏の救いはございましょう。その証が金剛經です。金剛經があるのなら、御仏の救いも確かにあるのです」

「救いがあるとして、それを得るといかなることになるのでしょうか」

「それも愚僧の知るところではありません。救いがあると信じるならば、救

いがいかなるものか、救いを得ていかなるのか、そのようなことに心を煩わせる必要はありませんでしょう。違いましょうか」

「信じたくはあります。しかし、現に長安で過ごしました悲惨な歲月、あれを見ましては救いなどどこにもないとも思えます」

「では、より端的に申し上げます。そもそも救いがあるということも信じなくてよろしいのです。それでも救われるのです」

韋蘭がひゅうと口を鳴らす。

「それはおもしろいですな。信じるのが大切、その一念さえあればよろしいと、確かお上人さまはおっしゃっておられたように記憶しております。信じなくても構わぬとは、それでいかなることになるでしょうかな」

「愚僧に限らず、信じるとは誰にも難しいこと。その難事を、都で恐ろしい目に遭っている最中の民に、御仏が求めるとは思えません。堅固な信心を持つのが最も困難なときにこそ、最も救いが必要とされるのではないでしょうか。違いましょうか」

「なるほど」

蘭は腕を組んで考える。

「ならば信じなくてもよろしいのでしょうか」

と、韋荘が尋ねる。

「左様です。金剛經を唱えればそれでよろしいのです」

「信じないままに金剛經を唱えるのは、御仏の教えに反するものではありませんでしょうか」

「信じていても、信じていなくても、同じです。御仏の救いは初めから必ずあるのですから」

仏蕃に従うとあのときに決めていれば、いまごろは仏蕃の堅固な心のほんのかけらくらいを身の内に持ち得たのだろうか。あるいは、いまからでも。

蘭が首を振り、懐中から袋に入った笛を取り出し、

「この頭では、理解できぬようですな」

額のあたりをこつこつと叩く。

「それでよろしいのです。考えておわかりになるものではありません。金剛経を唱えることで、自ずと知れて参りましょう」

「わからぬままに考えるとすな、御仏の救いが初めから必ずあるものならば、金剛経を唱える必要もなく、お上人さまからお札を頂戴する必要もないと、そうはなりませんでしょうか」

「おっしゃる通りです」

「そうなら、お上人さまが身の危険を冒してまで、長安にいかれる必要はさらさらない。長安の人々も救われると決まっていますからな。あのような目に遭っている人々にどのような救いが用意されているのか、俺にはまだ一向にわかっておりませんが」

「愚僧が参っても変わるところはありません。救いは初めからあります。ただ、長安の民は、愚僧がここで申していることを知らずにいます。聞かずにいるのと、聞くのと、どちらがよろしいでしょうか。愚僧に長安にいく役割があるとするれば、ただそれだけでしょう」

蘭は笛の袋で今度は顎のあたりを叩き、

「この愚かな頭には、黄巢を追い払って、都を元の平穩に戻すのが民にとつては最も有り難いように思えますな。そうではないのですかな」

仏蕃は仏蕃の道を真直ぐに歩いている。南山において仏蕃に身を投げ出さず、己は別の決心を示した。仏蕃と同じ道は歩めない。だが、南山での決意はいまここでどのような意味を持つのか。ここで仏蕃に出会ったのはいかなる巡り合わせなのか。

韋莊は尋ねる。

「お上人さまは天竺でお生まれになったと聞いております。天竺がどのようなところなのか、私は一向に存じませんが、このように乱れに乱れてきた唐土よりは、よろしい国でありましょう。唐土にも民がおるように、天竺にも民がおりましょう。唐土の民を救うのも、天竺の民を救うのも、そこに差異はございませんでしょう。この乱れた唐土を離れ、故郷の天竺の民を救いにお帰りになろうとはされないのでしょうか」

「唐土か天竺か、そのように選ぶことは愚僧にはできません。先師と出会うたときに、唐土にくる役割を愚僧は担い、いまは長安に参る役目を持つております。天竺の民を救うのが愚僧の役割ではいまはなくとも、いつしかその役が回ってくるのならば、愚僧は天竺に帰りましょう。それだけのことです」

「役割があるとはいかにして知られるのでしょうか」

「愚僧にはわかりません。役割があるとすでに知れたならば、それがいかにして知れたのかと問うても意味はありませんまい」

韋荘は頭を下げる。

「いろいろとお教え下さり有り難うございます」

仏蕃の前に身を投げ出すことはここでもない。仏蕃の道を己の道とすることはできない。

蘭はこつこつと叩いていた笛をしまい、

「我ら度し難き衆生は、いましばらく現世において苦しまねばならぬようですな。いまお会いしたばかりで、すぐに西と東に別れる、これも二世の御仏

の定めでありましょうか。お上人さまを待つ者が長安にはおり、我らを待つ者が虢州にはおる。互いに先を急ぐとしますかな」

「やはり行き先は莊園でありましたか」

仏蕃の顔がやや曇る。

「私どもは長らく都に閉じ込められ、外の様子が全くわかりません。お上人さまは東からこられ、虢州のあたりもお通りになられたのでございましょう。どのような様子だったでしょうか」

仏蕃の錫杖を突き、

「此の度は莊園には参らずにきました」

「途中の道はいかなることに」

仏蕃は二人の顔を順に見て、

「御自身の目で御覧になるのが何よりも確かなこと。違いましょうか」

仏蕃の言葉は不安にさせる。莊園で体と心を休めるとの願いがもしも叶わぬものであったならどうなるのか。

仏蕃は金剛經の一節を静かに唱える。

「いつしかお会いできるときもまたありましよう」

仏蕃は衣を振るって立ち去る。

いまなら追うこともできようか。己はいかなる道をいくのか。仏蕃のよう

な歩むべき一本の真直ぐな道はないのか。南山での決意は挫折した。

蘭に促され、ここまで仏蕃が切り開いてきた細い筋へと歩み出す。

己は何がしたいのか。いまはただ帰りたいたいの一心があるだけだ。

**潼関**から東側に出ると、二年半前の夏に上京したときと大きく異なり、官道沿いに満足に立っている家はない。それでも、道ゆく人をちらほら見かけるのが西側とは違ふところで、官道から離ればさほど変らぬような村もある。そのようなところでなら、立派に食べ物と言い得るものも恵んでもらえる。昨夜は、豆の粉を捏ねた団子と、木の根のような野菜と、半分腐った肉



の小片の入った湯たくさんの粗末な汁を馳走になり、都の南に潜んで以来、初めて旨いと心の底から思えた。

その家で、白昼に官道を歩いても大丈夫だと聞き、今朝は回り道することなしにきて、ゆるやかな曲がりの先、とうとう目印の三本柳が見えてくる。

ここしばらくの晴天が続きで柳の葉はかさかさ乾き、秋の終わり、かなりが抜け落ちている。柳が変らずにここに立っているのなら、莊園も同じであるうか。

「合格しない身で、またこの下をくぐるのか」

蘭とともにこの前この下を通ったとき、今度こそはここに合格して戻ってくると思った。道を東にとり気ままな旅に出てしまおうかと思いましたが、不合格になるのを恐れたりはしてはいなかった。

「止むを得んでしような、試験がなかったのですから」

貢奉に落ちて帰ってきたのは二十年の昔。柳の下をくぐるとそのときの苦しさが蘇ってくる。

「何もできぬのか」

無力なのはあのとときと同じ、いやそれ以上である。

「命を保って帰ってこられた。この柳も命を保っていた。結構なことではありませんか」

「どう言えばよいのか」

「何を言うのですかな。貢奉に受からなかったことですか」

二十年前は、不合格となった己の顔を、莊園の人々の前にどうさらせばよいのかわからなかった。

「都であつたことをだ」

「言わずにおきましようかな」

「叔母上、叔父上に隠す訳にはいかない」

「でしょうな」

「私のせいだと全てを告げるしかあるまい。それはわかっているのだが、さて、どう言えばよいのか」

「兄貴のせいではない。俺がいけなかったのですな」

「ありのままを言えば、私のせいであるのが明らかになる」

「そうですかな」

「それでよい。ただ、藹に、莠が死んだと言うのは辛い」

「兄貴たち三人兄弟は仲が良かったですからな。元はと言えば、莠くんを都に連れていった俺がいけないのですな」

「私が莠を死なせたのだ」

「藹くんはそのようには思いますまい」

「いや、明らかなことだ。それに、純はどう受け止めるだろうか。後を頼むとあれには言い、こんな有様で帰ってくるとは」

「父親としては気まずいところもありますかな」

「あれにはわかってもらえぬだろう。それでどうだと言うのでもないのだが」

「父親の気持ちは俺にはわかりませんな」

「この柳の下にくるまでは、このようなことは考えもしなかった」

「着いてからのことは、そのときでよいではありませんかな」

「それでもあるうが、少なくとも、あのことは言わぬと決めておかねばならないだろう」

「楊銀たちのことですか」

「そなたも気になるだろう」

「臆でさえ父や兄を殺すと大騒ぎでしたからな。楊爺が聞いたら、どうなりましょうか」

「恥じて、莊園を出ていくだろう」

「莊園で誰よりも会いたいのには楊爺だ。」

「楊爺を苦しめないために、あの二人も他の者と一緒に死んだとしておきま  
すかな」

「そうだろうな」

「嘘は言いたくないが、今回だけはそうしよう。」

「それはそうと決めてですな、官軍に襲われたと言ってよいのですかな。少々

やっかいなことになりはしませんかな」

「お上を恨んでいると疑われようか。それで成都にもいかなかったと、取りようによってはそうも見えようか」

「実際のところ、そのような気分が全くなかった訳ではありませんしな」

「黄巢の洗城がなければ、我らの思いも違っていただろう」

「長安にいた者でなければ、わらぬことですな」

「ともかく、大まかなことだけ私から叔母上、叔父上に話そう。後は、それにうまく合わせてくれればいい。そうしてくれないかい」

「口数の多すぎる俺のこと、うっかりしたことを言わぬよう、注意しないとイケませんな」

己の非を糊塗しようとはまでは思わない。ありのままにいつかは告げることがあるとしても、こんな兄であり、こんな父であったのかと、弟や息子を失望させたくない気持ちは否定できない。

思えば、近い人々を失望させてばかりだった。少なくとも、父は早くに

死んだので、失望させずにすんだようだ。その父は妻の期待に応えられずにいつも暗い顔をしていたと聞く。己こそは母の期待に応えねばと貢奉の勉強に励んだが、その母は長くは生きず、合格の報せを聞かせられなかった。妻の期待が重荷になったのは父と同じで、夫婦は互いに裏切り合うに至った。娘にも息子にも、幼いころから失望を味合させた。彩霞は莊園を出ていった。自ら出ていくのを希望したのだが、実際には、母親に似たあの目を嫌った父が追い出したようなものだ。父が家族を破綻させたのに、純はけなげにも父の後を継ごうとしてくれた。

三本柳の下を、人々を失望させる報せを携えて、今回もこうしてくぐる。

「では、いこうか」

官道から右に折れる。

離れてから見返ると、秋晴れの明るい日差しを受ける三本柳は、なかなか立派である。二十年前に比べ、柳は太く大きくなった。己はより卑小になったのかも知れない。

頬を叩き、心を沈ませる想念を追い払い、

「せつかく帰ってきたのだ、少しはましな顔になっておこうか。きっと暗く引きつったような顔をしているだろう」

「そうですね、ここ二年ばかり、緩むときはありませんでしたからな。兄貴も俺も、恐ろしく硬い表情が貼り付いてしまい、叔母上たちに会っても、誰なのかわかってもらえぬでしょうかな」

「そこまでひどくはあるまい」

「ここらでちよいと緩めておきましょうかな」

「どうするのだい」

「声を出して笑ってみますかな。可笑しくなくても、笑えばすな、顔は緩みましよう」

蘭は腹を抱え、高らかに笑ってみせる。空々しいようだが、真似をする。互いに相手の笑い声を長らく聞いていなかった。二人して笑い、少し気持ちがあほぐれる。何はともあれ、生きて帰るのを素直に喜び合えばよいではない

か。

林の縁を巡り、その先に畑が広がってくるところで、顔がすぐにまたこわばる。伸び放題になった雑草に秋枯れの時が迫っている。秋の収穫がここであつたとは思えない。放棄された農地を、ここにくるまでの間、至るところで見えてきた。特段目新しいものではない。

ここはこうでも、まだ荘園ではない。荘園は、この道の先の先で川を渡り、さらに丘を越えた向こうだ。ここと違って、荘園は元のままであるのだろう。そこで、久し振りに手足を伸ばし、今夜はゆっくりと休めるに違いない。

荒れた畑地がずっと続く。少々の起伏を上り下りすると、傾き始めた陽射しに、白く光る川が見えてくる。対岸に四阿がある。かつてそこに合歡の木があり、弟が迎えてくれた。今日は弟はいない。それは当然だ。今日帰ってくるとは、さすがの藁も予想はしていないだろう。

橋が落ちている。木の杭が点々と残る。

「大水が出れば橋は壊れる。直す暇がまだないだけだ」



韋莊は強いてつぶやく。

「橋などなくても、渡るに困りはしませんな」

蘭の言う通り、浅瀬を捜せば渡るのは難しくない。二人して着物の裾をか  
らげて水に入る。結構冷たい。川の中ほどで、蘭は足をごしごしこすり出す。

「ひどい垢ですな。いくらでも出てくる」

韋莊も洗ってみる。垢の下に隠れていた白い肌が見えてくる。

「この汚いなりでは、どこのお食事さんかと、叔母上は顔を顰めましょうな」  
蘭は対岸に上がると、着物を放り、素っ裸になる。

「おいおい、寒いだろう」

「足だけでは、もう満足できません」

蘭は川に入り直して全身を洗う。それが気持ちよさそうに見え、韋莊も思  
い切って同じようにする。

水の冷たさよりも、垢が落ちていく快感が勝る。とうとう髪までも洗って  
しまう。垢を落したせいではあるまいが、水に映る己の体が異様に細い。

二人は水より上がり、四阿の横で体を乾かす。遠くからは前のままと見えた四阿だが、屋根が崩れて落ちかかっている。二年の歳月が経ったとは言え、普通に風雨にさらされてこうなるとは思えない。

「厳しくなってきましたかな」

髪の水をしぼりながら、ここから先の道がずっと草で覆われているのを遠望する。

「むしろ外とは隔絶して、あそこだけが変わらずにあるのではないかい」

「そう願いたいものですな」

「とにかく、いけばわかることだ」

見ずにすませておけばよかったと思うようになるのではないか。長安を出た朝に、そのように考えた記憶が戻ってくる。

秋の終わりでも真昼の日光はそれなりに強く、体はじきに乾く。泥の中で捏ねたような着物を羽織り、

「では、いきますかな」

蘭の後について草を踏み分けて進む。

小高い丘を越える坂にさしかかる。左右から伸びる枝に道が塞がれている。蘭は何も言わずに小さな刀を出し、潼関で行ったように枝を払う。難儀したのは最初だけ、木の蔭の道は草も余り伸びておらず楽に歩ける。

下りに転じると桑畑だ。枝が天を突くばかりに伸び上がり、人の手が加えられていないのは明らかだ。

狐潭からの水路の脇に出る。変らぬ水の音にせめてもの希望を見出そうとするも、道はやはり草に覆われ、かつて慍に刺された林のあたりで、立ち止まる。体がぞくぞくさせる異様な気配がある。

「変ですな」

蘭もそれを感じている。足元から這い上がってくる冷気。官軍が入った夜、安邑坊に帰ってきたときの感覚に酷似する。

蘭の腕を取る。しかし、ここで引き返すことはできない。二人は身を襲う感覚について何も言わずに進む。

水路をまたぐ石の橋。二人は止まる。もはや気配だけではない。

鼻を突く臭い。蘭がとんと背中を押す。いく他はない。韋荘はうなずき、橋を渡る。

塞ぎたい目を取えて開いて前に向ける。道の左右に並んでいた一族の家。その全てが臭いでわかった通りになっている。見なければよかったと思うべき光景がある。

真黒な山。物音一つしない。一族の匂いは、この圧倒的な臭気、都で嗅ぎ慣れた焼け跡の匂いに変わっている。

道の中央の、瓦礫のまだしも少ないところを選んで歩く。一軒とて残っていない。

焼けた建物はたくさん見てきた。ここもそうだと思えば、歩いていける。広場に達し、向かいの石段へと目をやる。その上に聳えていた門はない。

高く草の茂る広場を突っ切る。叔母たちが住んでいた屋敷へと上る右側の石段が、焼け崩れた門の残骸で埋もれているのを見て、左の石段の下へと行

き先を転じる。こちら側にも門はない。それは後ろに倒れたのだろう。

蘭が先に立って階段を上る。四、五段目で、韋荘はかがむ。黒ずんだ木片がある。手に取ると、剥げてわずかな彩色が残る。

「こんなものが」

声が喉の奥にからまる。

蘭が振り返る。拾ったものを手を上げて示す。蘭は眉根を寄せて見つめ、ひきつったような笑みをつくる。

「どちらが上になっていましたかな」

「むろんこちらだ」

元の姿を知る者はそこに雀の絵を見て取れるだろう。

「どうして落ちていたのですかな。屋敷から持ち出したものの中にあつて、これは無価値だと、捨てたのでしょうか。確かに、こいつにはもう何の価値もありませんな。こうして帰ってきてても、掲げるべきところはないのですからな」

蘭は札を手にして汚れを払う。蘭が莊園にいるときは蛤の側、不在のときは雀の側を表にして部屋の前に吊り下げられていた雀蛤先生の札だ。

蘭は石段を上り、韋荘は、

「もう十分だ」

足を止め、目を閉じる。類似の光景を、長安でも、ここに至るまでの道でも、嫌と言っほど見てきた。それと同じことだ。しかし、ここは我が屋敷だ。

ここで下りようと、目を開き、振り返ると、背後に広場があり、その先に積み重なった黒い塊。

「こう言うことだったのか」

帰ってきたのはこれを見るためだったのか。ならば、帰ってくるのではなかった。

韋荘はうなだれ、石段を降りて、下に立つ。

ここで慍を杖で撃つたのだった。何のためにしたのか。莊園を繁栄させようと、非情の人になる努力をした。莊園がなくなれば、あれは何のためであ

ったのか。慍がただ憎くてやったのとどこが違うのか。血がほとばしる快感をむさぼるためにやったのか。

ここには三百人の暮らしがあった。一族の紐帯が耐え難く厭わしく思われたこともあった。祭の日には、一族であるが故に分かち合える喜びがあった。

妻がここに来た日、若いその女性を美しいと感じ、甘美な喜びに浸った。

その妻と似た目をもつ娘がここを出ていった日、少々苦くはあっても、間違いないく安堵感に秘かに浸ったのだった。

どうしてそのようなことをいまここで思い出すのか。

「泣かないのですかな」

蘭が後ろから声をかけてくる。

「そうだな。涙は出てきていないようだ」

莊園を失った。叔父も叔母も、一族の者がすっかりいなくなった。悲しくて泣くのが普通ではないか。

「不思議ですな」

「見慣れてしまったからか、このようなものに」

「何もかもこうも違ってしまうと、ここが俺たちのいたところだったとは、あまり思えませんか」

「そうだな。また一つ今日も廃墟を見た、それだけのことか」

「まあ、そういうことだったのですな」

「そのように思うとするか」

「他所事であれば、これは酷すぎましような」

「どうしたらこうにまでなるのか」

「なってしまうのでしような」

「都もここも、なぜこれほどまでになるのか」

「熱狂でしようかな。快感は、貪り始めたら止められないのでしような」

「破壊し殺すのが快感なのか」

「違いますかな」

「しかし、残るのは虚しさだけだろう」



「だから、また食べるのでしょうか」

「わからぬことだ。これを見て、泣かずにいてよいのか」

「よしとしないでどうするのですかな」

「どうにもならない。一族三百人の愛憎の全てが終焉した。それはそれでよしと思うべきか」

「そのような考え方もあるでしょうか。憎しみばかりは残っておるやも知れませんが」

「そうだろうか」

「都は憎悪ばかりが渦巻く場所と化し、こことてそうでないとは言えませんが。仏蕃上人は都で、まだまだ盛んに燃える憎悪の火を消せますでしょうか」

「恐ろしいことを言う」

「黙っていては、ここで立つのも容易ではありませんからな」

「強がりか」

「そのようなものでしょうかな」

蘭の声は口の中に消える。

韋荘は空を見上げる。

青い空に少しばかり雲が流れ始めている。

「今夜はどこに泊まろうか。長く続いた晴天も終わりのようだ」

「昨日に変わらぬ今日だったのですな。あれは言うまいなどと、三本柳の下で相談したのは全く不要でしたな。嘘や誤魔化しをしないですんだのはよきことながら、泊まる場所の心配を今日もせねばならなくなったですな」

蘭はわずかに笑う。

「全く無駄な相談だった」

韋荘も、少しもおかしくないが笑う。

空を渡る鳥を見送り、焼けた家並みに視線を戻す。

「敢えて希望を繋ぐのなら、狐潭の小屋ですか。あそこばかりは残っていたりしませんかな」

「一縷の望みを託すか」

もしも小屋があるのなら楊爺もと、望んで再び落胆するのも辛いと、それ以上は考えまいとする。

「ともあれ、ここにおいても仕方ありませんからな」

二人は焼けた家並みの間を再び歩く。莠や藨とともに一時期住んでいた家も跡形もない。

小橋を渡り、水路脇の道をたどる。足元から冷たいものが忍び上がってくる異様な感覚はもうない。全てがわかってしまったいま、予感に怯えることはない。

本来ここは懐かしい道だ。朝夕に皆がここを行き来していた。子どもも老人も、男も女も、馬も犬もここを通った。その姿がいまだってそこにあるかのような。この道を人が通らなくなっただけの月日が経つのか。あの破壊はいつ為されたのか。伍武の爺さんが酔いつぶれていた場所も、背後から飛び出してきた韋愠に刺された場所も、深く茂る草の下だ。

それでも、この匂いはまごうことなき荘園のもの。時折聞こえてくる鳥の  
声もいつもの通り。目をつぶっても歩けるこの慣れた道を、いつかのあの時  
と同じようにまた歩いているかのようでもある。ただし、前からも後ろから  
も誰もきたりはしない。

韋荘の足は次第に重く、少しずつ蘭に遅れる。道にはみだしてきた木立の  
枝に蘭の背が遮られて、一人だけになると、突如として、錐で突かれるよう  
な痛みが腹の底に生じる。身をよじるばかりの痛惜の念。

誰かここにいてほしい。

会いたい。誰かに会いたい。

心に浮かぶは、薛未亡人でも叔父で弟でもない。楊爺でもない。苦しいこ  
の心が求めるのは、あの扉の向こうに消えた銀犁。

何とも奇妙なことだ。なぜなのかといぶかしむ己が一方にいなから、銀犁  
を失った悲しさが激しく噴き出してきて、止めようがない。

銀犁に会いたい。いまのこの心を銀犁にわかつてもらいたい。

平康坊の焼け跡に立ったときにも、崔婆から話をきいたときにも、これほど銀犁に会いたいとは思わなかった。打ちのめされ、長く頭がぼんやりとした状態に陥った。これほどの痛みがなぜいまここにあるのか。

銀犁に会いたい。

傍らの木にすがって韋莊はしゃがみこむ。

何もかもが己の誤りから生じたことだ。そうであるのに、身勝手にも会いたいと願う。銀犁ならこの心をわかってくれると思う。

目を閉じ痛みこらえていると、両脇を蘭に抱えられる。

「どうしました」

腕の感触に、

「いや、ちょっと眩暈がしたただけだ。大丈夫だ」

韋莊は顔を上げ、蘭の力を借りて立ち上がる。またこの従弟に救ってもらった。

「辛いものを見てしまいましたからな」

それではないとは蘭にも言えない。

「よもやあそこまでとは」

「狐潭ばかりは変わらぬでしょうな。池の水を眺めれば、少しは慰めになりましようかな」

「そうかも知れぬ」

蘭に手を取られて、狐潭に通じる小径へと入る。ここも丈高く草が茂り、蜘蛛の巣が幾重にも張られている。二人は黙々と進む。

右に折れば南山への坂、直進すれば狐潭を堰止める堤に達する二叉路。「ちと妙な具合ですかな」

蘭が立ち止まる。

「どうしたんだい」

下ばかり見て歩いた韋荘が顔を上げる。銀犁の影はようやく遠のき、現実が目に入ってくる。

「これは、狐潭か、南山か、どちらかに人がいると言うことでしょうかな」

「ここの草は踏まれていようか」

「頻繁ではないにしても。で、どちらにいきますかな」

「真直ぐだろう」

狐潭にいく。

人がいるとすれば楊爺か。下手な望みは持つまいと思つたが、確かな証拠がある。

二人は足を速める。明らかにいままでの道と違う。

しかし、過剰な期待は持つて裏切られるのは怖い。それでも、莊園の者が全て死んでしまったとしても、楊爺なら生きていても少しもおかしくないと  
思う。楊爺は特別だ。

一気に堤の上に出る。狐潭の水面が眼前に広がる。

青く細長い狐潭がある。秋空を流れる白い雲が水に映る。いまはこの風光を愛でるときではない。それでも心はこれを美しいと感じ、体はここで止まるのを望む。

帰ってきた。ここに己は帰ってきた。この小さな池の中に天地がある。かつてそう感じさせた狐潭は、世の変転とは無関係に、ここにそのままにある。韋荘は嗚咽する。こらえていたものが噴き出る。

これを見るために己は帰ってきたのか。そうであつてもよい。何もなくてもこの狐潭がある。

声を立てて泣く。涙が髭からしたり落ちる。拭つても拭つても出てくる。弟の首が碁盤の上にごろがり落ちているのを見てから、これほど泣くのは初めだ。

もう号泣と言ってよい。声を限りに泣くうちに、心の内がほどけていく。次第に、声を出さずにすみ、涙がおさまり、息が整い、空の青を湛える水の色が再び目にはつきりと入ってくる。

「もうよいですか」

後ろで蘭が言う。

「ああ」



堤を下り、うねうねと曲がる池の道をたどる。

木立の向こうに、水辺に向かうお狐さまの祠が見えてくる。あそこで楊爺は日々に自分たちの無事を祈っていてくれていただろう。だからこうして帰ってこられたし、あの熱病からも立ち直れた。ここまでくれば、楊爺がいるとの期待を持ってよいはずと考えるが、祠の前で、韋荘は愕然と肩を落とす。祠の屋根が逆さまに地にころがり、扉が斜めに落ちかかり、薛未亡人が立派に造ったときは金色と朱色に輝いていたのが、黒く煤けている。

「これでは駄目ですか」

蘭に言われるまでもない。楊爺がいて、祠がこの状態であるはずがない。内側にあつたお狐さまの像も存在しない。

それでも、かつての楊爺のように祠を拝み、ここに帰ってきたと報告する。蘭が壊れた祠に首を突っ込み、

「兄貴、見てくれ」

お狐さまの像があつた台座に秋の花が供えてある。

「風に飛ばされて、うまい具合にここに載りますかな」

「楊爺がいるのか」

「それはどうですか」

楊爺の小屋にいつて確かめようと、振り返ると、狐潭の水に映る西日が入る。この岸辺に、阿枉を載せた伍七の小舟が漕ぎ寄せられたのだった。藪が花を渡して、伍七がそれを阿枉の髪に挿してやった。水はそのときはまだ。

祠の前から道が大きく曲がり、池の中央へと突き出して、ぐるっと向こう側に回り込む。狐潭の一番奥が見え、蘭がさっと前に出て、

「あれは」

韋荘にも何かが動いたと見え、

「楊爺か。いや、それにしても小さいか」

「狐でしょうか」

目を凝らしても、その姿はもうない。

楊爺の小屋はそこからすぐで、元のままではなく、地面にのめりこむように潰れている。

「ここもこうでしたな。しかし、あの花と、あの影。少なくとも誰かがいましような」

「莊園を破壊した奴等が住みついたのか」

「となると、兄貴の泣き声を聞かれたのはまずかったですかな」

「悪者どもが祠に花を供えるだろうか」

「それは変でしょうな。とすると、残るはあそこですかな」

「南山の叔父上の隠居所かい」

「それよりは楊胆の小屋。あそこは人の知らぬ場所。この俺も、定かには知らぬのですからな」

かつて楊爺の甥の楊胆が役人に追われて婿入り先から逃がれてきたとき、匿うために楊爺は谷戸の奥に隠れ家をつくった。韋莊もそのことは知っていても、小屋は見たことがなく、確かな場所も聞いていない。

狐潭の奥へと進んでみる。ここらも草が伸びていないのは、人が行き来している証拠であろう。

先ほど何かがちらりと見えたところに至る。もう少し進むと川の流れ込む口があつて、そこを渡って池を巡れば、釣魚台を経由してまた堤に戻る。川に沿って遡ると深い谷で、獣を狩るときの際は人が立ち入らない。

「楊爺は、小屋への入り口を巧妙に隠したのでしような」  
道を引き返しつつ入念に見て、

「ここでしょうかな」

木の股がつるつるになっているところを蘭が見つけ出す。

手をかけ、ぐいと身を引き上げ、

「なるほど」

ひよいと股の上に立ち、林の中を覗く。横から伸びてきている太い枝へと乗り移り、

「兄貴もきてくれませんか」

声を残して、枝の上をすすると歩んで入っていく。

韋荘も木の股に立つ。同時に、蘭は枝から向こうへと飛ぶ。

枝はつるつるで滑りやすく、蘭のようにすばやくは進めない。周りの小枝に掴まりながらようやく枝の根元に達し、向こうへと飛び降りる。土をえぐった一条の道が始まる。しばらく登る。蘭はとつくに先にいつて姿がない。道は横に張った大きな木の根の前で終わる。胸の高さで行く手を阻む根によじのぼる。上に立って振り返ると狐潭がちらりと見える。

根を踏み越え、そこからは下り。厚く積もった木の葉を踏む細い道がある。蘭が立って待っている。木立を隔てて眼下に小さな屋根がちらりと見える。

「ありましたな」

膝を抱えるようにして下る急な坂。その半ばまでくると、蘭の手が脛を抑える。蘭が顎で示す方角に、人影がある。

「楊爺だろうか」

韋荘がささやく。

「違いますな。あれは女でしような」

楊爺と思つたのは、そう期待していたからで、背丈が低いと見えもした。蘭がずるずると下るのに続き、人影の輪郭がもう少しはつきりしてくると、四角い楊爺の後姿とは明らかに違ふ。女なら楊胆の妻か。

声が聞こえる。女が子を抱いてあやしているらしい。やはり楊胆の妻だ。胆に子が生まれたと伍七が言っていた。

女はこちらの音に気づき、身を縮め、走り去ろうとする。

「俺だ。俺だ」

蘭が叫ぶ。

女は木の蔭に身を入れ、向き直る。女の顔が目に入り、韋荘は息を呑み、

動けなくなる。

蘭は女の前に立つ。

「無事だったのですな」

「叔父上も御無事で」

女は子を地面に立たせ、ゆつくりと会釈する。子は女の袖を掴む。

「その子は」

「楊胆の娘です」

「そうか。そなたの父も一緒だ」

蘭の言葉に、女の目が韋莊へと向けられる。その視線こそは娘の彩霞。

母に似たこの目を疎ましく感じていた。それでいまも動けなくなったのか。

しかし、かつてのその感覚は急速に輪郭を失い、韋莊は坂を下りて娘の前に立つ。

彩霞はまじろぎもせず父を見る。

「おまえだったのかい」

確かに娘の彩霞。どうしてここにいるのか。嫁に出して、会うのは何年ぶりか。

彩霞は何も言わない。黒くひからびたように痩せ、ぼさぼさに乱れた髪、変らないのが目だ。その視線から目を逸らし、

「無事だったのかい」

そう口にする、娘の姿がぼやけ始める。

「そなただけですか。他にも誰かいますかな」

蘭が言う。

「七人。私もこの子も入れてです」

彩霞は短く答える。母に似た声だ。

目元に触れると、己は涙を流している。なぜなのか。

「おまえは無事でいたのかい」

膝の力が抜ける。地面に両手をつき、涙は止まらない。

「さすがに感極まりましたかな。誰もいないと諦めておりましたから」

蘭の言う通りらしいが、韋荘はとまどう。銀犁を思つての痛み、狐潭を見

ての号泣、そしていまのこの状態。

「で、七人とは、誰と誰ですか」

「藹の叔父さまと叔母さま、綜ちゃんと淑娥ちゃん、楊胆、それにこの子と



私」

彩霞の声は平静である。

弟の家族は四人とも揃っている。韋莊は顔を少し上げる。彩霞の足がすぐ前にある。ぼろぼろの草履に、泥だらけの裸足。爪が真黒だ。

「他の者は」

喉の奥からかすれた声を絞り出す。

「私が知るのはこの七人です。ここから逃れ得た者が他にいても、私の知る  
ところではありません」

「逃れた者に、叔母上も親父どのも入ってはいないのでしょな」

「お二人はそれぞれに亡くなられました」

彩霞の声には何の感情も込められていないかのようだ。

「おまえはどうしてここにいるのかい」

娘を見上げる。彩霞は父を一瞥し、

「さぞ不可解であります。よりによってここにるのが最も似つかわし

くない私がおりますことが」

韋莊は首を垂れ、

「そうではない」

「同じ七人にしても、私ではない他の者であつてしかるべきでしょう。私もそのような思いますから」

「そのようなことは決してない。おまえがいてよかつたと思っている」

彩霞と目が合い、

「すまぬ」

韋莊は口中につぶやく。

膝を擦って進み、娘の足元に手をつき、

「この父を許してはくれまいか」

「どうなされたのです」

「彩霞はやはり静かに言う。

「許されるものではあるまい。いや、許さずともよい。おまえが無事でいて

くれたその一事でよい」

彩霞は何も答えず、韋荘は身を起こし、子どもの背に、

「名は何とこのかい」

答へはない。

韋荘は子の袖を軽く引き、

「そなた、名は何とこのかい」

と、もう一度聞く。子はゆっくりと向き直り、自分よりも低い位置にある

韋荘に、

「春琴です」

しっかりとした声だ。

「何歳になる」

「三歳です」

「そうか」

韋荘が微笑むと、春琴は首を少しばかり傾け、頬をほんのり赤くする。

「楊胆の子なのすな」

蘭はしゃがんで春琴の顔をのぞき、

「目のところが父親によく似ていますな」

と、頭を撫ぜ、立って彩霞に、都で伍七に会って聞いたと話す。

「楊爺にとつては孫のようなもの、さぞ可愛がっていたのでしような」

蘭は春琴を抱き上げ、

「見れば、楊爺にもどこか似ていますかな」

「この子には、楊爺の生まれ変わりだと、いつも申しております。楊爺に似て当然でしょう」

「それはどういう意味ですか」

「伍七からお聞きになりませんでしたか、この子に息を吹き込んだのが楊爺だったと」

「そんな話まではなかったですな。あのとき、伍七は伍七で、他のことで気持ちがいっぱいでしたからな」

この春琴が楊爺の生まれ変わりだと言うからには、楊爺はすでに死んでしまったのか。

「この子が生まれましたのは、黄巢の大軍が長安に向かつていったのよりも少し前。ひどい難産で、ようやく外に出てきたときは、からだが硬直し、息をしていますがませんでした。可哀想に、この子の母も息がなく、誰もが二重の不幸に打ちひしがれていたときに、楊爺はこの子を抱えてお狐さまの祠へと走り、『わしの命をやるから助けてやってくれ』と叫び、赤ん坊の口に息を吹き入れたのです。お狐さまに祈って同じことを三度繰り返し、この子は細い産声を上げました」

「お狐さまの力を借りて、この子を生かしたのですな。それで、楊爺はそのときに死んでしまったのですかな」

「いえ、あの日まで、元気で変わらずにいました」

「あの日は」

「残ったのが七人だけになった日です」

蘭は春琴をおろし、

「その日に何があったのか聞かせていただけませんか」

春琴は彩霞にしがみつく。

「私からお聞きになるよりは、叔母上の方がきつと順序立ててお話しされましょう」

「姐さんはあの小屋の中ですか」

姐さんとは藹の妻の陸氏だ。莠の妻の場合と同じで、蘭は陸氏に敬意を払う。

「叔母上も叔父上も畑に出ています。御案内しましょう」

彩霞は蘭の返事を待たずに、春琴を抱き上げて歩き出す。

蘭に軽く肩を叩かれ、韋荘は後に従う。

彩霞は許すとも許さぬとも言ってくれない。これまでのことを思えば、それもやむを得ないだろう。「ここにいるのが最も似つかわしくない」と彩霞は言った。銀犁にあれだけ痛切に会いたいと思ったが、彩霞に会うとは全く想

像しなかった。

小屋の横を回って、林の間の小道をゆくと、ぽっかりと畑地に出る。このような場所が狐潭と南山の間にはあるとは知らなかった。

陸氏と娘の淑娥、それに楊胆がいる。人の気配に最初に気づいたのは陸氏で、中腰に立って驚きの声を発する。両手を挙げ、駆け寄ろうとし、すぐに止まり、腕を回して後ろ向きになり、夫の名を大きな声で林の中へと叫ぶ。陸氏の動きに、韋莊は少々面食らう。韋莊が知っていた陸氏はごくおとなしい女性で、ただ芯の強さは、薛未亡人に見込まれるだけのものがあつた。このように声を張り上げるとは意外である。

藹の返事が林の中にある。懐かしくも常に変らぬ暢やかな声だ。

彩霞とともに蘭と韋莊は畑の中へと入っていく、陸氏が歩み寄ってくる。小さな淑娥はきよとんとした顔で見ている。誰がきたのか、まだよくわかっていないのだろう。楊胆は斜めに上体を曲げた姿勢で、韋莊が視線を向けると、膝をついて会釈する。

「よくまあ御無事で」

陸氏は韋荘と蘭の前に立ち、その目には早くも涙が浮かんできている。かつては丸くふくよかだった顔はげっそりとこけ、白かった肌が真黒に日焼けしている。

「姐さんたちもよく無事でありましたな。お互い、ひどいなりになりながらも、ともかくも生きていられたのですな」

蘭はぼろぼろの衣服をぼんぼんと叩く。

藹が走り出てくる。手に長芋を振り回し、兄の前に立ってわずかに笑みを浮かべるが、すぐにそれは消える。

「無事でいてくれたのか」

兄が言うと、弟は途方に暮れたような顔になり、それから深々と頭を下げ、「申し訳ありません」

「何を言うんだい。無事でよかったではないか。誰もいないかと思っていた」  
 韋荘は弟の手を取ろうとすると、身を引き、



「留守をお預かりしながら」

「途方もないことが起こったのだろう。我らにはどうにもならぬようなことが」

韋莊はもう一人の弟の莠を思い、いまは自分への言い訳のようであったと感じる。

「叔母上も、純くんも、楊爺も。それなのに、私たちだけが」

「誰が生き、誰がそうではなかったのは、恐らくは運であったと言うしかない」

弟を慰めつつ、これも己への言い訳のようでもある。

「よりによって私のところだけが」

第一家の四人に楊胆と彩霞と春琴。その七人だけ。ここで何があったのか。帰ってきたのは己と蘭の二人。長安で何があったのか、その責めを己は負う。弟から何を聞き、弟に何を言うのか。会えた喜びだけでは終わらない。

藹は、不意に長芋を握ったままであると気づいたのか、ぽんと放り投げる。

落ちたはずみで、ぼきりと折れる。相変わらず不器用な弟だ。

蘭が拾い上げ、

「これは立派ですな。藹くんが掘り出したとは。兄貴、見てください」  
折れたのをつないで突き出す。

「そなたの手でか。たいしたものだ」

藹ははにかんだように笑い、

「妻が教えてくれるのです」

「それはまた驚きですな。姐さんが長芋の掘り方をですか。陸のお家では、嫁に出す前にそのようなことも伝授されるのですかな」

陸氏はけらけらと笑い、

「恥ずかしながら、我が里は何分にも田舎、誰もが野良に出ねば暮らしが成り立ちません。嫁にいく先で何がありましたもと、父母より習わぬものは何もございませんでした。ただ長芋の掘り方は、小さいころに祖父より教わりましたもの。思い出してどうにかやってみているだけで、何をしましても、

楊爺より教わった楊胆に及ぶものではありません。こうして生きてこられたのも、あの楊胆がいてくれたからでございませぬ。我が夫一人では、長芋を掘るくらいはできません、あとは何もできません」

楊胆はと見ると、体を斜めに地面に座つてうつむいている。

「皆で力を合わせてきたという訳ですな。で、あと一人、綜くんがここにはいないようですな」

「綜は釣りに出ています。あれは始終、釣りばかり、困ったものでございませぬ」

「釣りをするようになったのですか。楊爺に教わったのですかな」

「妙に凝りまして、道具も自分でつくつては、池で試しております。他には何もせず、困ったものです」

一つのこと打ち込む莠や藺の性質を受け継ぎ、綜の場合はそれが釣りになったのだろうか。数えると綜は十歳だ。二年見ぬ間に、思いがけない成長をするのだろうか。

「好むものがあるのは結構。腕前を見たいものですか」

「もしや、池からこられるときに、あれを見かけはしませんでしたでしょうか」

「そうか、あのちらりと見えたのは、綜くんだったのですか」

「御覧になったのですか。いつまた賊がくるのかわかりませんので、重々気をつけるようにと申しているのに、釣りに夢中になっていたのでしょうか。帰りましたら叱ってやらねばなりません」

「いやいや、見たと言ってもほんの一瞬。俺は狐かと思っただくらい。すばやいものでしたな」

「そうです。蘭くんに言われねば全く気づきませんでした。後でその近くまでいきましたが、何の痕跡も残っていませんでした」

韋荘は綜をかばうように言う。余程人目を忍んで暮らしてきたのだろう。

「ここへは兄上と蘭にいさんのお二人でしょうか」

藹が言う。いよいよ話さねばならぬかと、心を決めるための間を置くと、

蘭が、

「兄貴とこの俺と、それにここににいる七人、合わせて九人が、我らが莊園の最後の生き残りとなったのですな」

さつらりと言う。

「で、莠にいさんは」

「莠くんはこの九人の中にはいない。つまりはすな、俺の失敗です。兄貴の大事な弟、藹くんにとっては大事な兄を、俺は大変な失敗をしたのですな」

「莠にいさんはどういうことになったのでしょうか」

「まことに申し訳ない。ひどい失敗です。俺が不甲斐なすぎた。あまりのことに、俺は腑抜けになり、死んだも同然になりました、この兄貴に助けてもらわなければ、ここにこうして帰ってこられなかったでしょうな。本当に申し訳ない」

蘭は何度も頭を下げる。韋莊はどうしたものかとまどう。三本柳の下で相談したのは不要だったと一度は考え、いまは、その相談と異なることを蘭

がしている。

「私がいけなかったのだ」

韋荘が言いかけるのを、蘭は遮り、

「違う、違う。悪いのはこの俺。この俺ですな。商売第一で、あんなことにしてしまった。藹くん、まことに申し訳ない」

藹の前にべったり伏せて頭を下げる。藹はうろたえつつ、

「何がありましたのか、兄上が言った通りに、運であつたのでしょうか」

弟の言葉が韋荘の胸にこたえる。己は言い訳のようにそう言ったのだ。自分の口から事実を言うべきであろうと思ひ、彩霞の視線を感じる。娘に許しを請ひ、それが得られるような父ではない。

蘭が手を打って、さもおかしそうに笑いながら立ち上がり、

「そうそう、まさに運ですな。覚えておりましたよ。いづだったか、廬山の愚笠子と名乗る妙な道士がやってきましたのを。叔母上に何だかんだと言ひ、口からでまかせとばかり思っておりましたが、あの愚笠子、実はちゃ

んと読んでいたのですな。韋家の名を後の世へと伝えるのは藹くんであると、愚笠子は言った。もののみごとくに当たっているではありませんか。藹くんのところは、姐さんも綜くんも淑娥ちゃんも、皆がぴんぴんしている。愚笠子はたいしたものではありませんか。いかさまと思った俺の目は、ひどい節穴でしたな」

愚笠子はそのようなことを言ったが、蘭が笑いころげるほどおかしい話ではない。愚笠子の予言は全て蘭が仕組んだことと韋荘は思っている。

蘭の笑いにとまどう人々の前に、長芋を振り回し、

「見れば見るほど立派ですな。兄貴、俺たちは結構なところに帰ってきたのですな。長芋なんぞ、ずっと食っておりませんな」

「空腹でございましょうか」

陸氏は蘭の振る舞いに合点がいかぬ様子ながらも尋ねる。

「いやいや、空腹などと言う言葉が、この世にあるとは、もうずっと忘れておりました。三日でも五日でも、なければ食わぬのが当たり前。空腹などと

は言っておられませんでしたからな」

「それほどまででございしましたか」

「昨日の夜は幸いと腹に入れるものを恵んでくれる人がいましてな、あれは旨かったですな。で、御心配は無用でありますが、聞きたいこと、話したいことは互いに山ほどありますよ。ここはどうですか、畑の真ん中に突っ立ったままでいるよりは、白湯の一杯でもすすりながら話をするといいことにしませんですか。日も傾いてきましたし、姐さん、どうですか」

それで皆は小屋へと向かう。

道に釣竿を持つ綜が立っている。

「悪い奴らだったらどうしようかと心配したけど、伯父さまたちだったんだ。

こいつはすこいや」

弾んだ声を出す甥に、

「大きくなりましたな」

蘭は軽く頭を叩く。



「ほら見て。こんなの初めて、すごいでしょう。きっとこれは伯父さまたちが帰ってきたお祝いだよ」

腰に括りつけた大きな魚籠を傾ける。

「やや、これは。こんなのが池にいたのですな。見たこともない大鯰」

堂々とした大鯰の顔に、淑娥が声を上げ、一同の気分ががらりと変わり、「こいつは大御馳走。俺がさばきましようかな」

と、小屋に着くなり、陸氏より包丁を借り、粽とともに外の水場に行く。韋荘は、

「中は大変に狭いのでございますが」

と、陸氏に案内されて入れば、籠を置いた土間と、粗末な敷物を広げた一間があるばかり。ここで七人が暮らしていたのが不思議に思われる。

膝を詰めて座し、窓に下がる竹筒に花が投げ入れてあるのに気づくと、楊胆とともに土間で火を焚く準備を始めた陸氏は、

「ここには何の飾りもございせんので、淑娥にそのあたりの花を摘ませて

おります」

「それでは、もしかすると、祠の花も淑娥ちゃんなのかい」

「ときどき花を持っていかせております」

「それは感心だ」

韋荘が淑娥を褒めると、

「この辺りの花なら何でも知っています」

二人の大人の出現にややどきまぎしていた淑娥が自慢気に胸を張り、池や林のどこにどのような花が咲くのか教えてくれる。

「そんなにどうやって知ったんだい」

「母に教わりました」

「いえ、楊爺に教わりましたのを、そのまま伝えているだけです」

「莊園のことなら楊爺は何でも知っていたものだ」

韋荘は嘆息まじりに言う、藹が申し訳なさそうに、

「それも皆なくなってしまうました」

「屋敷は見てきた。叔父上のところはどうかだったのかい」

「何も残っておりません。叔父上や兄上が大切にしてくられた書物も全て失われました」

「書物などはよい。そなたたちがいてくれたのが何よりだ」

「書物は焼けましても、兄上の詩なら全て覚えております。一首だって忘れていません」

弟はいまにも詩を吟じそうなそぶりを見せる。

かつての詩をここで聞きたいとは思わない。それにはどのような価値があったのか。焼けて消えたらそれでよいようなものだ。病中の一首を例外として、詩を作る気持ちにもならなかった。

「私の詩はともかくとして、他の書物も覚えているのだろうか」

「もちろんです」

「綜くんや淑娥ちゃんに聞かせているのかい」

「いえ、そのようなことは」

「綜くんは十歳、淑娥ちゃんは八歳になったのだろう。そろそろ勉学を教えてもよいのではないのかい」

陸氏が夫に代わって、

「お恥ずかしいことに、二人は御覧の通り他のことにかまけて、肝心のことを教えておりません。兄上が御指導いただければ、二人にとってこの上ない幸いです」

と、真顔で言うので、いらぬ事を口にしてしまったと、韋荘は後悔する。「まあ、そのうちには」

莠の二人の子が思い出される。あの二人に学問を教え、唐への忠節も説いた。その一方で、妓女に溺れ、甥姪の手本にならぬことをしていた。

「姐さん、鍋はありますか」

蘭が窓から顔を出す。

「納屋から、鍋と、それに少々の麦や蕪を出して持っていておくれ」

陸氏は楊胆に言う。

「藹くんの長芋も鯰と一緒に煮たら、一風変わった味になりましたよな」  
蘭は楽しそうである。

あの夜も鯰だった。貢挙が不合格となつて莊園に帰り、妻との諍いから弟たちの家に逃げ込むと、楊爺が鯰をぶらさげてきた。

その楊爺がここにはいない。病中の夢に、楊爺の背に負われて狐潭を巡つた。楊爺が死の淵から救い出してくれたと思つた。あのころは楊爺は達者だったのか。莊園に帰つてくれば、楊爺に会えると思つていた。それが一番の願いであつた。会うとは考えもしなかつた娘の彩霞がいる。どうしてなのか。

蘭が鍋を抱えて入ってくる。

「兄貴、立派な御馳走ができませんぞ」

ちょうど湯が沸いた土瓶を下ろし、鍋を火の上に据える。皆に湯が配られると、莊園であつたことを陸氏に尋ねる。

黄巢の手下がくるまでのことは伍七から聞いていた。叔父の韜の病はいよいよ重くなつて、黄巢が即位する直前に息を引き取つた。唐の世が終わる前

にと願っていた通りになった。韋家の故郷の杜陵の墓地に葬るべきところを、止むを得ず南山の肩に仮に埋葬した。

彩霞が帰ってきたのは葬儀の直前。裴家に嫁いで三年目に、彩霞は子を宿し、そのころより夫の奇矯な行動が目立つようになった。

陸氏は、ここで彩霞の方を向うが、彩霞は表情を変えない。出産を目前に、夫は首をくくって死んだ。生まれたのは男児であったが、彩霞はその子と引き剥がされ、石を投げられるようにして裴家を追われた。陸氏の話では、裴家で何があつたのかは判然としないが、韋荘は特に問うことをしない。

彩霞が釣魚台に立っていると楊爺に発見された。そのとき楊爺は生まれてまだひと月余りの春琴を抱いていた。春琴は彩霞に抱かれるとすぐに乳を吸った。彩霞は楊爺の小屋で暮らすことになり、楊胆はそこを出て、この隠れ小屋に再び住むようになった。

近隣に盗賊が横行し、長安の様子も、洛陽のことも聞こえてこなくなったが、莊園ではまださほど変らぬ暮らしが続いていた。若い男がほとんど連れ

ていかれてしまったことから、薛未亡人も楊爺も警戒を強めていた。

夏のある夜明け前だった、韋藹夫婦のもとを楊爺が訪れ、二人の子を連れてすぐに狐潭にきてほしいと言った。ただならぬ様子に、すぐに従うと、楊爺はそこからさらに彩霞と春琴も伴って皆を楊胆の小屋に連れた。「三日の間、一歩たりとも出ませんように」。訳を尋ねても楊爺は一切答えなかった。「おまえは皆さま方をしっかりと守るのだ」。楊胆に厳しく言うと楊爺は去った。時を置かずに、慌てた様子で楊爺が戻り、「お坊ちやまを忘れていた。おまえ、山にいき、ここに御案内しろ。決して他所には行ってはならぬ」と、楊胆と二人で出ていった。

「ここから先は胆から聞いたままです。何か間違いがあったら言うておくれ」  
土間の隅にしゃがむ胆は、

「くく」

と、聞こえぬくらい小さな声。

胆は南山への入り口で楊爺と別れ、韜の隠居所へと走った。韋荘の息子の

純がそこで老婆とともに暮らしていた。純は父の言い置きに忠実に従い、父の後継者たるべく、莊園の仕事と学業とに励んでいた。日の出前に隠居所を出て屋敷にいき、薛未亡人に挨拶するのが純の一日の始まりとなっていた。胆が隠居所に着いたのは、朝日が顔を出す直前で、純はおらず、老婆の姿もなかった。楊爺の言葉に背くのを恐れつつも、純を捜しに屋敷の方へと走った。途中で追いつけばと思いうちに、広場にまできてしまった。そこには大勢の人々が集まっていた。楊爺が血相を変えてすつとんできた。「お坊ちやまをお連れしろと言ったはずだ。どうしてここにきた」。胆は追い払われ、隠居所に取って返し、道々純の姿はどこにもなかった。さらに南山から狐潭へと探していくと、屋敷のあたりから尋常でない物音が聞こえてきた。胆は、屋敷にいけばまた楊爺に叱られると、池をひと回りしてから、もう一度隠居所に向かった。屋敷のあたりの騒ぎはますます大きく、空へと煙が立ち昇り始めた。ただならぬ状況を背に聞きつつ隠居所に急ぐと、そこに男たちの声がした。扉の前に老婆が倒れ、数人の賊が中から飛び出してきた。胆も腕に覚



えがない訳ではないが、そのときは素手、たちまち何箇所もの傷を負い、た  
まらず丘の斜面を転がって逃れた。血まみれになって気を失い、翌日の朝露  
に息を吹き返し、枝にすがって斜面をずり落ち、小屋の裏にどうにかして出  
て、陸氏たちの前に半死半生の姿を現した。

胆の体が始終斜めにかしげたようなのは、そのときの傷のせいだろうか。

陸氏たちは楊胆の傷を治療し、楊爺に言われた三日を待ってから、外に出  
て、莊園が破壊尽くされた様を見た。火がまだくすぶり、広場に多数の死骸  
がころがっていた。どれが誰の死骸であるかの判別が難しく、薛未亡人は身  
に付けていた品からそれらしいとわかったものの、楊爺は結局のところはっ  
きりとはわからなかった

「純さんが旧いお狐さまの祠の裏で変り果てた姿になっているのが見つかつたのは、しばらく後になってでした」

陸氏は深い吐息を漏らす。

「お狐さまも守ってはくれなかったのですな」

安邑坊では阿枉は祠にいて助かった。ここではそのようなことは起こらなかった。それでも、楊爺は別と思われ、

「はつきりしないのなら、楊爺のことだ、どこかに生きているのではないだろうか」

「しかし、楊爺が生きていて、お狐さまの祠をあのままにしておきましょうかな」

莊園から逃げた者もいるだろうが、楊爺がその中に入るはずがない。人々はしばしの沈黙に陥り、鍋がぐつぐつと言い始める。

蘭は笛の入った袋で顎を叩きつつ、

「ここの七人と純くんだけを、その日の朝に楊爺が選んだのですな。どのような意図だったのでしょうかな」

「楊爺は訳を何も言ってくれませんでした」

「これから何が起こるのか知っていたのでしょうかな。莊園が襲われるのを、誰かから聞いたのでしょうかな」

「わかりません。胆も知っていることは他にありません。そうなのでしょう」  
「へえ」

胆は小さく答えると身を起こし、鍋の下の火を見る。立ち昇る湯気に鯰の煮える匂いが混じり、小屋の中に広がる。

わからないながらも、楊爺が死んだのは事実と考えるしかあるまい。去年の夏、己が長安で熱病で倒れる半年も前のことだ。夢に楊爺が出てきて救ってくれたと思ったのだが、すでにこの世の人ではなかった。

それぞれの思いに沈んで皆が黙り、日が翳って小屋の内が暗くなる。

「胆、そろそろいけましようかな」

蘭がぬっと立って鍋の蓋をずらして中を覗き、

「よい具合に仕上がっていますぞ。これは綜くんのお手柄ですな。この匂い、もう待てませんな」

はずんだ声に、陸氏と彩霞も土間に下りてありあわせの器に盛って皆に配る。

鼻先に上る湯気に、かつて楊爺が獲った鯰が思い出され、胸がつかえる。  
あのとときは羨もいた。

「そなたたちは、その夏から七人でここで暮らしてきたのかい」  
藪に向かって言う。

「兄上がお帰りになるまでとはと」

「さぞ苦勞も多かったであろう」

喜怒哀樂の情をほとんど表にせず、人には愚鈍と言われた弟が、これまでに  
なくなたのもしく見える。

皆の前に汗が配られたのを見て、

「ではただこう、粽くんの大成果の鯰を」

蘭が真先に、髭が汚れるのも構わずに勢いよく食べる。

「こんな旨いものがこの世にはあつたのですな」

昨夜は豆の粉の団子汁を旨いと思つたものだが、これとは比べものにならない。  
鯰は狐潭の楊爺の味と思えばまた胸がつかえ、箸が止まる。

「良くぞ守ってくれた」

誰もいないと一度は覚悟したここに七人もの人間がいた。

「ここにいただけで、何もしておりません」

弟は言う。

「言うに言われぬ苦労があったのだろう」

「あの小さな畑で、魚の獲れる池があるにしても、七人が暮らすのは容易ではなかったでしょうな」

蘭の問に陸氏は、

「楊爺が蓄えておいてくれた麦などがございましたので、いままでのところは持ちこたえられました」

「これは貴重なものを頂いてしまったのですかな」

「特別な日でございますから」

皆の痩せ細った姿。かろうじて食べつないできたのだろう。

蘭は疾うに空になっていた椀を置き、

「残りは明日の分ですな」

「どうぞどうぞ、たと召し上がってください」

「いやいや、こんなにも旨いものを食って、腹はびっくりしております。これ以上は無理にでも入れられませんな」

蘭は土間に降りて椀に湯を注ぎ、ちびりちびりと飲みつつ、皆が食べるの眺める。

食事がすんでから、長安でのことを蘭はおもむろに話し出し、韋荘は黙って従弟に任せる。蘭は、黄巢の華やかな入城の様子を詳細に語り、悲惨な場面はあつさりとすませ、莠たちは、黄巢軍と官軍の乱戦に巻き込まれて死んだと告げ、そのときに蘭は荘とともに商売のために東市に出ていて莠たちを救えなかったと、藹に謝る。東市の屋根裏に潜んで状況はほぼ事実のままに語り、蘭の巧みな話ぶりに皆が引き込まれ、阿枉の死に至っては皆が泣く。楊銀たちのことは何も触れず、銀犁のことも言わない。隠していることがあるとは、誰にも感じさせない。

陸氏もあるいは蘭と同様のことをしたのではないかとの疑いが生じる。三本柳の下で、楊爺には銀たちのことを言うまいと決めた。蘭は胆に父や兄のことを聞かせまいとしている。陸氏に胆をかばいたい思いがあっても不思議でない。これまで胆がこの小屋にいてどれほど力になっていたことが、容易に想像がつく。

莊園に帰り、楊爺のもとで疲れた体と心を休めたいと願っていた。見ねばよかったことになるとの恐れもあったが、莊園に戻れば、自分たちは救われるとの思いの方が強かった。帰ってきた自分たちはこの七人を失望させてしまったのだろうか。窮状に陥っている莊園の人々を救うために、自分たちは帰っていくと考えたことは一度だつてなかった。

今日まで七人はどのような気持ちでいたのか。確かなあてもなしに、一年半にもわたって待ち続けるのは容易ではない。藹の特異な性格はそれを可能にしたかも知れないが、他の者、とりわけ彩霞はどのように思っていたのか。帰ってきた二人は何も携えてこなかった。無事であつたのを単純に喜んで

くれているだろうか。七人にとってよいことなのか。単純に言って、大人二人分だけ食糧の減りが早くなることだけは間違いない。

蘭は、城壁の下をくぐる穴掘りの話をしている。掘り出した土を、どうやって見つけられずに捨てるのか、それはさも楽しい工夫であったかのよう言う。蘭は不思議な男だ。何度となくこの従弟に救われた。どのような状況も、蘭がいてくれれば切り抜けられる。他の者も、いまここでそのような感じていることだろう。

それに引き換え己はどうか。荘園の主であり韋家の当主である。本来なら、ここにいる七人の者を、狭い小屋の食べ物もろくにない状態から救い出す責務を負う。それなのに、楊爺に頼ってもらおうと期待して帰ってきた。己も四十七歳。いつまでも楊爺に頼ろうとしてはいけなかった。楊爺のためにも貢奉に合格したかった。それはとうとう叶わないものとなった。楊爺が残してくれたこの七人をどうにかしなければならぬ。それが楊爺へのせめてもの恩返しだろう。そうは思っても、己に何ができるのか。



莊園の生き残りはこれだけだ。いや、七人もいたと喜ぶべきか。韋家がな  
お滅亡しないでいるのは、あるいはお狐さまのお導きであろうか。楊爺はど  
のような意図で、純とこの七人だけを選び、胆に託したのか。

胆は楊爺の後継ぎだ。いまの我らにとって胆はいなければならぬ。蘭も  
陸氏も深い配慮を払うのは当然だ。己に皆のためにできることがあるのか。  
蘭は長安城外に穴が達したと話す。夢中になって聞いていた綜と淑娥が手  
を打って喜ぶ。

穴は掘っていたが、長安から出られると本気では思っていなかった。それ  
ができたのだから、これからの困難も乗り越えられると思いたい。しかし、  
蘭がいたからできたので、楊爺に恩返しをしたいと思っても、己に何ができ  
るのか見当もつかない。

蘭は、丘の上で日の出を迎え、振り返って長安を見たときに、外に出られ  
た実感がやっと湧いてきたと語る。

そのときに、己の胸のうちにあるものを外に出したいと思った。あれはど

のような心持ちだったのか。

長安での日々はすでに遠く昔になりかけている。あそこの隠れ家に比べたら、この小さな小屋も、大袈裟ではなく王宮のようなものだ。長安での日々を、このまま忘却させてしまつてよいのだろうか。

小屋の内はすっかり暗くなり、蘭が話し続ける傍ら、ここに帰つてきたことに何らかの意味をもたせたいと、思案に沈む。

**危**惧した通りに、蘭と韋荘が帰つてきたことで小屋の蓄えのなくなるのが早まり、蘭は食糧調達と情報収集を兼ねて虢州の周辺を少しく歩きまわる。

韋家の莊園ほどではないにしても、どこも多かれ少なかれ荒らされ、まともな暮らしを続けているところはない。蘭に一宿一飯の恩義くらいなら恵んでくれても、食糧を分けてくれる余裕はどこもなく、巡り巡つて、かつて名うでの暴れん坊として近隣を震え上がらせていたある老人だけが、少々の米

を恵んでくれる。幾日間の助けにはなるが、冬を越す見通しは立たない。

その老人が気になることを言っていた。ここらでは由緒ある名家の一つが滅亡したことは老人も知っていて、一族同士が殺し合った末に、一人も残らぬ悲惨な最後であったと聞いたと言う。

「俺たちには見えぬところがあつたのですな。兄貴も俺も叔母上に気に入られていましたからな」

蘭は言う。

お狐さまの祭を盛んに行うようになってから万事うまくいっていると思つていた。上辺だけであつたのか。薛未亡人を嫌う者はかつて大勢いたし、楊爺だつて古参連中に疎まれていた。己も皆に好かれていた訳ではない。

「二人のぼんくら息子ですか」

蘭は薛未亡人の二人の息子を疑う。

「そこまで腹黒かつたのだろうか」

「二人の嫁が心を合わせれば、それなりの知恵が回りましようかな」

「あれも、互いに仲は悪いようだった」

二人の息子の嫁は、それぞれ薛未亡人の後釜を狙っていた。しかし、薛未亡人は陸氏を後継者に選んだ。二人が陸氏を憎んだであろうことは想像に難くなく、荘と蘭が長安から帰ってこないうちに、荘園が乗っ取ってしまおうと悪さを企んだのはあり得ない話ではない。

「利のために、いましかないと、過去のわだかまりを乗り越えたのでしょうかな。楊爺にそれを嗅ぎつけられ、屋敷を燃やす大騒動となったのか」

「よくわからぬ話だ」

「事実がどうであったのか、楊胆か姐さんが、何かしら知っているような気がしないでもないのですが、兄貴はどう思いますかな」

「そうだろうか」

陸氏はやはり胆をかばっているのか。その疑いを蘭に対しても口にはしないうが、蘭もわかっているのだろう。

「残った者同士で疑心暗鬼になってはいけませんな。ともかく、この荘園を

滅亡させたのが一族の間の怨恨だとすれば、それはまだ解消されていない恐れもありましような」

「また襲われるのかい」

「俺たちを憎んでおればそうするでしょうな。まあ、そのようなことがなくてもすな、ここにはもう食うものがなく、いつまでもいられません。洛陽にいくしかありませんでしょうな。向こうでは落ち着きを取り戻しつつあるとも聞きます。うまくすれば、洛陽の店で、俺を待っている者がいるかも知れませんしな」

黄巢が長安に向かっていった以降、洛陽の店とは音信不通だ。陸氏は、長安から帰る者がなければ、冬の本格的な寒さがくる前に莊園を出て陸氏の実家もいくことも考えていたらしいが、他家に頼るよりも、洛陽へと発つことにする。

十一月の末のある夜明け、薄暗い中、狐潭の上に霧が流れる。これが消えれば、晴れ上がった空に朝日が昇ってくる。これから三日、できれば五日は晴天であってほしい。洛陽に着くまで、せめて雨に濡れずにいきたい。蘭と二人なら、雨だろうが、泊まる場所を捜しあぐねようが、それも平気だ。今回は幼い子を伴い、しかも冬の寒さだ。

潰れた楊爺の小屋の脇に隠しておいた車を、廃材の下から引き出す。鍋や釜や衣類などを積み、いつでも出発できるよう用意しておいた。車は楊爺が使っていたのを胆が修繕したのだが、洛陽までの道のりに耐えられるか心もとない。

「では、そろそろいきますかな」

しばらく続いていた雨が止んだら出る心積りでいた。夜半過ぎに雨音が途絶えたのを潮に、最後の荷を拵え、胆の小屋を発った。綜は、釣竿を手に、最後の漁をしてくと先に出た。

蘭と胆が前の柄を取り、荘と藹が後ろから押す。ごとごとと車が動き始め

る。その上に荷物とともに春琴が乗り、脇に陸氏、彩霞、淑娥が歩む。霧の向こうに低く、細い月の輪郭がにじみ出す。いよいよ晴れてくる。この車一台分が、細く食べつないで十日分に満たない食糧も含めて莊園に残された全財産だ。薄い月明かりに、春琴の小さな輪郭が見える。

春琴にとって莊園の外に出る初めての旅だ。生まれてまだ二年、春琴は世間がどのようなものであるのか知らない。ほとんどの歳月を楊胆の小屋で、六人の者とだけ過ごしてきた。二人の大人が現れ、外の世界へと連れ出されることになった。それが春琴にとってよいとは限るまい。

叔父が見るのを拒否して死んだ世の中に、この子はどうして生まれ出てきたのか。生まれる時代は選べないにしても、春琴は母胎を出ると同時に不幸を背負わされた。母が死に、春琴とともに死んでいれば、己の不幸を知らずにすんだであろう。楊爺が息を吹き込んで生かしたのは、春琴に何か幸せがあると考えたからだろうか。

己と蘭が帰ってこなければ、行き先は洛陽ではなく、陸氏の家になってい

た。その方が春琴にも他の者にもよかったか。己が帰ってきたのは皆にとつて歓迎すべきことではなかったようだ。彩霞は無論のこと、綜も淑娥もそして春琴もどこかよそよそしい。

その原因は己にある。そもそも莊園を救うために帰ってきたのではない。蘭はよい、蘭ならできる。ここにもしも己がいなくて、蘭が皆を洛陽に連れていくのだったらよいのだ。たとえ不運に見舞われるにしても、人々はそれを運命として甘受するだろうし、蘭なら巧みに乗り越えていくだろう。

ある夕暮れ時だった。一人だけ遅くに小屋に戻ると、笑い声が漏れ聞こえた。戸外で耳を澄ますと、蘭が例によって面白おかしく話をし、彩霞の笑い声もした。父がいるときには、彩霞は笑わないばかりか、まず口もきかない。しばらく待って、楽しい話が終わって静かになってから、おもむろに声を掛けて戸を開けた。それでも中の雰囲気が変わった。

綜と淑娥が己に対して改まった態度をとるのはそれ相応の理由もなくはない。陸氏に頼まれて二人に学問を教えるようになった。伯父であり、師でも



ある韋莊に、蘭に対するのとは異なる態度をとるのはあり得ないことではない。

だがそれは瑣末なことだ。一番大きいのは、彩霞を己から隔てさせるものだ。狭い小屋で暮らしてきた日々が濃密な関係を生み、彩霞を大事と思う気持ちだが、彩霞と険しい関係にある人物を自ずと遠ざける。不器用な弟だけは、少年のころと同じように兄を見ていてくれる。

彩霞は許してくれていない。その理由は問うまでもない。

洛陽に着くまでに変えられるだろうか。洛陽においては新たな日々を始めた。

楊爺が生かしたこの春琴に、生まれてよかったと思わせたい。そのためには、ここに残った九人が一つになって、唐が滅びるかもしれない厳しい時期を切り抜けていく以外にない。一つになるのを妨げているのは己だ。まずはそれをどうにかしなければならぬ。

春琴の背から目を離し、振り返ると、潰れた楊爺の小屋がぼんやりと見え

ている。これを見るのも最後となるのか。いまは洛陽に希望を託しているが、向こうも駄目だったならばどうなるのか。もう一つの店がある揚州に行くのか。遠く流れて、虢州には帰ってこれられないのか。

足音が響き、綜が駆けくる。釣竿を背負い、車の脇をすり抜けて蘭の前に出て、

「ほら、釣れたよ、釣れたよ。これが最後の一匹だ」

竿の先の魚を振り回す。

「ほほう、こいつは立派な鮒ですな」

「ここでの釣りは終わりかもと、一生懸命に釣ったんだ。そしたら、こんな大きなのがかかった」

蘭は鮒を針からはずし、車の上の鍋に投げ入れる。

「今夜はこれが食べますな。綜くんのお手柄。狐潭の魚の食べ納めですな」

「もう帰ってはこれないの」

「どうですか。お上が都に帰るのと、我らがここに帰るのと、どちらが先

になりますか。誰にもわかりませんな」

「ここで釣りができないのは寂しいな」

「では、帰ってくるよと決めますか」

「ほんと」

「とは言うものの、俺まで帰れると思うのは高望みが過ぎますか。よくて、この中の一人が帰れるとしておくのが、分をわきまえた望みでしょうか」

「じゃあ、ぼくも高望みはしません」

綜は池の縁に立ち、

「ぼくが釣らなくなれば、この魚は誰にも獲られない。だから、みんな、安心してくれ。これまでたくさん釣ってごめんな。たくさん食べさせてもらって、ありがとう」

綜は大きく叫ぶ。

「楊爺に教わり、狐潭で鍛えたきみの腕前を、どうですか、これからは大河や大海で試してみるのですな。広い海に出て、鯨を釣り上げたら、さぞ愉

快でしようからな」

「叔父さんは海を見たことあるの」

「ああ、船にも乗りましたな。大海原を分けて広州にいきましたからな。海は広いですな。この池の何億倍、何兆倍ありますかな。ただ、残念だったのは、広州から大海を越えて南蛮の国々へと渡らなかつたこと、東に乗り出して蓬萊山のあたりにもいつてみたかつたのですが」

「蓬萊山ってどこにあるの」

「東の海の遙か彼方。船を出して何百日かかりますかな、幾億万里の先に、天の川も流れ込む巨大な谷がありましてな、その昔、五つの山がふかふかと浮かんでおつたらしいですな。高さはどれもが三万里、いずれにも仙人が住んでいて、海に浮いて潮のまにまに流れるのは不安でならないと、仙人たちはですな、天帝にどうかしてくれませんかと頼んだのですな。そこで天帝は十五匹の大亀を連れていきましたな、亀の頭に島を載せ、動かないですむようにしてやった。亀にとっては迷惑な話ですから、六万年我慢したら交替

できるようにし、十五匹で交互に五つの島を支えるようにした。仙人たちがやれやれと思っていると、竜伯と言う巨人がのっしのっしとやってきましてな、綜くんのように釣り糸を垂らして、六匹の亀をひよいと釣り上げた。肩に亀をかついで竜伯がいつてしまうと、五つの島のうち二つが支えを失って流れ、三つの島だけが残った。その一つが蓬莱山なのですな」

「ふうん。変な話だね」

「竜伯からすれば、高さ三万里の島を頭に載せる大亀も、簡単に釣り上げられるちっぽけなものでしかないのでしょうか。この狐潭も、俺たちには小さな池でも、そこから鮒を釣り上げたきみを、竜伯のような巨人だと見上げるちっぽけな連中が、そこらにいるのかも知れませんな」

「そんなことである」

「そのちっぽけな連中にもですな、皇帝とか名乗るいかさま師がいて、それを倒すだの守るだの大騒ぎになって、そのあげくの果てに、そこにあるそれこそ小さな小さな池のほとりに住む人間があてもない旅に出ようとしている

つてことも、あるかも知れませんが。するとその小さな小さな池にはもつともつとちっぽけな連中がいて」

「どこまでいっても終わらないね」

「竜伯だって、さらに大きな連中から見れば、ちっぽけな存在でしょうしな」

「ふうん、おもしろいなあ」

綜は楽しそうである。蘭といるときはこうだ。

あるとき、蘭が綜についてこんなことを言っていた。

「綜くんは、純くんの代わりをしなければならなくなるのかと、気に病んで  
いるようですね。愚笠子のいかさまな予言を話したのがいけなかったですか  
な」

韋家を後の世に伝えるのは藹であるとの愚笠子の予言が正しいのなら、綜  
が次の代を担うことになる。

「純くんは、綜くんに、ぼくが君だったらよかったのにと、言ったようです  
な」

とも蘭は言った。

綜は純より十四歳下だ。釣りに夢中になっていられる小さな従弟を、純が羨むことはあつただらう。長安に向かう日に純に後を託した。陸氏によれば、純は父の言いつけを健気に守り、折り目正しさは莊園の全ての者を感じさせたと言う。

綜を狐潭から切り離して外に連れていくのは、生きるためにはそれしかないとしても、それでよいとの確信はない。

綜だけではない。楊胆もだ。黙々と車を曳く胆の心の内は推し量れない。楊爺がいたころには、胆と直接に話すことはほとんどなかったから、定かにわかつていた訳ではないのだが、これほどまでに重苦しい雰囲気の男ではなかった。胆からは、無表情に「へい」と言う以外の言葉を聞かない。己が帰ってきたのも、こうして外の世界に連れて出るのも、胆にとっては迷惑なことであるのかも知れない。若く屈強な胆がいてくれなければ我々は困り、そうでなくても彩霞が我が子のように可愛がる春琴の父だ。皆が胆を大事に思

っている。胆と己の間には、やはり隔たりがある。己には胆に隠していることがあり、最初の日に疑ったように、陸氏には、胆をかばっている節がある。

洛陽に着くまでに、この隔たりも解消できないものか。原因は己にあるのだから、己次第だ。

蘭の合図で、車は祠の前で止まる。

淑娥が集めておいた最後の菊の花がお狐さまの像があつた台に載せられる。

楊爺がかつてしていたように、皆でお狐さまに祈る。

蘭はひしやげた祠の扉に雀蛤先生の札を掛ける。

「いつかこれを裏返しにすることがあるでしょうかな」

「帰ってくる気があるのかい。東に向かうのをよいことに、蓬萊山にまでいくつもりではないのかい」

韋荘は重い心をほぐそうと、わざと軽口をきく。

「蛤が雀に変わって旅に出ても、蓬萊山までは遠く、飛んでいけるとは思いませんが、兄貴がいつでもよいと言ふのなら、ひとつ真面目に考えてみますか



な。綜くんも連れて、鯨を釣り上げるとしますかな」

「本当ですか」

釣竿を振って綜が蘭を見上げる。

「そなたの母上が許すものならば」

陸氏は笑い、

「夢のようなことをおっしゃらず、まずは今日の分の道をしつかりと歩きましょう」

と、出発を促す。

「では、そうしますかな」

蘭が、押す者と曳く者を入れ替えようと言うのに従う。

阿枉を乗せた伍七の舟が漕ぎ寄せられた場所だ。あの日は祭。大勢の者がここにいた。いつかまたここでお狐さまの祭ができるのだろうか。あの賑わいを取り戻したい。その祭の同じ日に妻は莊園を出ていった。ここであったことは矛盾だらけだ。田疇を理想と仰いだこともあった。田疇は乱世に遭っ

て、節を守るため山に入り、その徳義を慕う人々が集まって村ができあがった。虢州の莊園をそのようにしたいと思ひ描いたが、莊園は無残にも廢墟となった。莊園があつたからこそいままでの己があつた。先祖の遺徳によつて生かせてもらった。虚しく滅ぼしたままでよいはずがない。己に何ができるのか。

莠たちが死んだのは己のせいだ。小さな幸せを守つてやりたいと思つた阿枉は死んだ。阿枉に助けられた己が生きている。愛していたはずの嫋嫋も銀犁も不幸にした。息子も死なせた。息子をどれほど傷つけてきたのか。弟を思う姉は、だから父を許さずにいるのか。

官軍の入つた夜、死んだ者のために、己が生きてよかつたと思えることをしなければならぬと、蘭に言つた。それは何であるのか。できるかできないかを別にすれば答えは単純だ。再び祭ができるまでに莊園を復活させること。平和な世に戻ればそれは可能とならう。だから、根本的には大唐の再興だ。都には依然として悲惨な日々を強いられている人々がいる。それを救い

出す。仏蕃は人々の救済のため単身都に向かっていった。己に何ができるのか。

水辺の道をたどるうちに霧が次第に晴れ、堤の上で振り返ると、狐潭が広々と見渡せる。

ここで号泣したのだった。莊園に帰った日、己の感情を制御できなかった。道で銀犁を思い、狐潭で号泣し、彩霞の前で手をついた。

狐潭は美しい。

一望秋山静

望み見る秋の山は静まり返り

簫条形跡疎

人の踏み入った跡は稀である。

方願沮溺耦

願うべきは古き二人の隠者のように

澹泊守田盧

田を守りつつ淡き日々を送ること。

韋応物の詩が思い起こされる。叔父が南山で歌ってくれたこの詩を、官軍に襲われた後の長安の夜でも思った。

この狐潭を出て己はどうするのか。ここに隠れ住んで一生を終えられたら、

それが一番よい。どうせ何もできぬのなら、この美しく静かな狐潭から離れずに、餓死した方がよいのではないか。春琴が母の母胎を出ずにいた方がまだしもと思えるのと同じように、滅びゆく唐のありさまなど見ないのが幸福なのではないか。叔父の墓の傍らで死ねばよい。

南山の肩の墓所において、叔父や叔母や楊爺を弔い、皆の前で、亡くなった人々を悼む立派な言葉を述べた。韋家の主にふさわしいものであったが、己自身の思いのほどばしりはなかった。己にできることがないのに、感情を解き放つのは危険すぎた。

南山には幾度か一人で登り、泣いた。かつての莊園を思い、銀犁を思い、嫋嫋を思った。

細長く奥へと連なる狐潭の水を、間もなく朝日が照らそうとしている。

「では、いきますかな。いつまで見ても切りがありませんからな」

狐潭を見ていたのは韋荘だけではなかった。離れ難い思いを誰もが抱いていたろう。蘭が区切りを付けた。否が応でもここを出ていかねばならないの

だ。

力のある胆と蘭が前になって堤を下る。

少事武皇帝 若いころには武皇帝に仕え

無頼恃恩私 その恩顧をたのんでの無頼漢。

叔父の声が耳によみがえる。これも韋応物の詩。二十年前に貢奉に落ちて帰ってきた日、叔父はこの詩を朗唱してくれた。

我が祖、韋応物は玄宗皇帝の全盛期に無頼の日々を送っていた。そこに突如として安祿山の大乱が勃発し、唐は存亡の危機に立った。韋応物は己の人生を見直し、初めて書物を開いた。

読書事已晩 書物を読むには遅すぎたが

把筆字題詩 筆を手にして詩を書く勉強だ。

韋応物は立派な官人になり、大詩人としての名も残した。

己もまた大乱に遭い、先祖のようになれるか、ここでどうか問われているに違いない。では何を為すのか。

定かではないが、いまようやく一つの考えが生まれようとしているかのようだ。

田疇になろうとしてみななかつた。当然だ。いまこのときに、最も身近にいる人々の心さえ掴めずにいる。ここに居る者たちから始めなければならぬ。己の思いを皆に率直に明かせずに何ができようか。

洛陽に到着するまでにすべきはそれだ。

どのようにすればそれが可能になるのか。まだ少しばかりの用意がいる。それは何であるのか。韋応物と己を繋ぐ一つのものが導いてくれると思いたい。詩だ。

熱病で苦しんで以来、詩は作ってこなかった。ここに帰って藹に言われるまで詩を忘れていた。丘の上で長安を顧みたときに、己の内にあるものを吐き出したいと思った。考えてみれば、韋応物の子孫である己であるのだから、それは必ずや詩の形を成すものだろう。

いまの己の思考にどのような脈絡があるのか、それもわからない。洛陽に

着くまでに明らかにしたい。

二度とここを登らないかも知れないとの思いを持って、堤からの坂を下っていく。

**晴**天は期待した通りには続いてくれず、今日は朝から厚い雲に覆われる。急げば今夜遅くにも洛陽に到達できるだろうと蘭は言うが、身軽な二人連れならともかく、子どもがいて、傷みの激しい道をいまにも壊れそうな車を押して、道ははかどらない。せめてもう一日降らずにいてほしいと祈るのだが、昼ごろになって、とうとう細かく雨が漂い始める。

「これはいけませんな」

暗く鎖された空。本格的な雨降りになるのは間違いない。これで一段と冷え込めば雪になる恐れもある。

せめて小降りのうちに急いでおきたいと気は焦っても、疲れた体でこれ以

上速くに進めるものではない。

出てきた風に雨が流され、襪襦切れ同然の衣類がじつとりと湿る。おのおの筵を被るが、手足が濡れるのを防げない。

雨粒が次第に大きくなり、道がぬかるみ出し、車の上に載る淑娥と春琴の顔が青褪めてくる。

上りの坂の手前で車を止め、息を継ぐ。

「このまま洛陽までは、いくらなんでも、無理でしょうな」

「今夜の泊まる場所を、そろそろ思案するか」

「ここらは見渡す限り何もなし。この坂は、確か、林を貫く長い登り。その先をだらだら下った遠くに人家がばらばらとあつたような。それも以前のままであればの話ですが」

「そこまでいってみるしかないか」

韋荘は溜息まじりに言う。

楊胆は車輪に付いた泥を黙って落としている。藹はいつの間にか一人遅れ



てしまった陸氏が追いついてくるのを心配そうに待っている。

「脇に入る道を見て参りました。あの手前から左に分かれる道の様子に、どこか見覚えがあります。もう二十年にもなりましようから、違っているのかも知れませんが、祖父が懇意にしていた和尚さまのお寺があったように思うのでございます」

小走りでやってきた陸氏がそう言い、他にあてもないことから、そこへいってみることにする。

うねうねと細い道、雨脚は強くなる一方で、案外長い道のりにいささか心もとなくなるが、陸氏は確信があるのか先頭をずんずん進み、深い木立に覆われた荒れた坂道へとさしかかる。楊胆が力の限り曳き、三人の大人に綜も加わって後ろから押す。暗い寂しいところを陸氏はためらわずに登っていく。土の抉れを水が勢いよく流れ下り、車輪をそこに落としてしまうとなかなかに難儀で、冷たい雨が降りしきるにもかかわらず、汗にまみれてようやく登り切る。

「あそこでございます」

林の中にのぞく伽藍の屋根を陸氏が指差す。そこからは下り、雨音の底に聞こえる川のせせらぎへと降りていく。

山門が倒れ、寺の中の道は立ち枯れた草に深く覆われる。

「ここで間違いないのでございますが」

「ともあれ屋根はありましたからな。雨が除けられれば上々」

車を残して境内へと踏み込んでいくと、先ほど見えた屋根は大きな本堂、ただし扉が全てはずれた荒れようで、声を掛けて返事はなく、首を突っ込んで、中は暗く黴臭い。ともかく入ってみて、被っていた筵の水を払う。

目が慣れてくると、本堂の荒廃ぶりが見えてくる。土台がむき出しで、柱と壁と屋根があるばかり。一番奥に、以前は仏像が安置されていたのだろうが、そこらだけにかろうじて床らしきものが残る。

「盗賊の棲家になっていなかったのは幸運。姐さんのお蔭で、立派な塀が確保できましたな」

車を取りに戻ってから、蘭と胆は、林中にまだ濡れていない枯れ枝でもなにかと捜しに出ていく。

石を拾い集めて床の近くに火を焚く場所を作る。旅のために用意しておいた乾胡餅（かんこへじ）が尽き、今夜は煮炊きをしなければ食べるものがない。屋根があるのは有難い。車より行竈（こうそう）や鍋を下ろし、濡れた裾をしばっている、蘭と胆が、腰の曲がった老僧を伴って戻ってくる。

老僧の話と陸氏の記憶が一致し、祖父の知っていた和尚本人であると知れる。

「亡き祖父に巡り会えた思いがいたします」

陸氏は老僧を拝む。

「奥深い、いまでは見る影もないこの寺へ、迷うことなくお嬢さまがお越しになられたのは、お祖父さまのお導きでありましょう」

老僧は不思議な縁に感嘆する。

このあたり一帯も賊に蹂躪され、一時期は誰もいなくなった。近頃洛陽も

落ち着きを取り戻しつつあると聞いて、老僧は戻ってきた。まだ賊を恐れ、人目につかぬ林の奥に潜んでいると言う。

「お祖父さまに御寄進いただきました数々のものもすっかり盗られ、御覽の通り何も残っておりません」

老僧は陸氏の亡き祖父のためにと、本堂の奥の床に座して短く読経する。

陸氏は涙ながらに、何のお礼もできぬことを言うのと、老僧は、本堂を自由に使うのを許してくれ、薪も食べ物も分けてくれると言う。

楊胆は老僧が約束してくれたものを受け取りにもう一往復し、火がおこると、本堂の内がほんのりと明るくなる。人々は火を囲み、木切れから木切れへと火が広がるにつれて、どの顔にも安堵の色が浮かぶようになる。

「今夜は姐さんのお蔭で救われましたな」

胆は行籠の下にも火をおこし、鍋を置く。老僧が恵んでくれたのは蕚と豆。それに莊園から運んできた麦を少々加える。

外の雨音はますます高く、扉の壊れた口から、時折強い風が吹き込んで、

炎が大きく揺れる。

蘭がふつと笑い、

「これはまさしく馮異（ふうい）が豆粥を奉るさまですか。さしずめ俺が馮異、兄貴が光武帝」

蘭は大袈裟な身振りで、武將が皇帝を拝する仕草をする。

「何をするんだい」

むろん己は光武帝に比べられるものではない。天下を定める英雄に程遠く、一晚の宿を確保する才覚もない。

「淑娥ちゃん、綜くんは、馮異の豆粥を知らんでしょうかな。藹くん、よかつたら、その部分を読んでいただけませんか」

韋藹は静かに朗誦する。

時天寒烈

時に寒さ厳しく

衆皆飢疲

一同は皆飢え疲れていた。

異上豆粥

馮異が自ら豆粥を煮てさしあげた。

明日旦

翌朝、

光武謂諸將曰 光武帝は武將たちに言った。

昨得公孫豆粥 昨日、馮異が豆粥を煮てくれ

飢寒俱解 飢えも寒さもなくなった。

後に漢王朝の再興を果たす光武帝は、このときは敵から必死に逃げるだけ、飢えと寒さに意気阻喪していた。馮異は近隣より豆を貰い受けて粥を煮、光武帝と付き従う武將に食べさせた。もしもここで挫けていたならば、皇帝の位に昇れなかったと、光武帝は幾度となくこの豆粥の味わいを回顧した。

蘭に促され、韋莊は、光武帝がいかにして一度は絶えた漢の皇統を繋いだかを話す。長安において、莠の子どもたちにも同じような話をした。黄巢に都を占拠されても、いつか必ず唐の平和な日々が戻ってくると、あどとき二人に言った。その二人はすでに生きておらず、ここで己はまたも口先だけで昔の英雄を語る。

そう思うと話す気力が薄れ、いい加減なところで終わらせる。

鍋の内のことと音が始める。

春琴がもぞもぞと動き、彩霞の袖を引き、何事かを言い出す。体が温まり、立ち始めた湯気の香りに、空腹を感じたのだろう。

春琴はいつも彩霞のそばにいる。実の父である楊胆と共にいるのを見たことがない。彩霞一人の娘のようでさえある。

堂の内は、春琴の声、鍋の煮える音、木の燃える音、それに、吹き込む風と外の雨の音だけになる。光武帝を持ち出したのは蘭であるのに、いつの間にか目を閉じて眠っているようだ。

己は四十七歳にして世に名を成すことを何もできていない。光武帝に比べようがなくても、己には己なりに為すことがあると思いたい。陸氏の祖父に所縁の寺にこられたのは良き徴と思ってみたい。長安から続く悪い日々もここで終わりとなり、洛陽には好い春が待っていようか。長く耐えてきた身を今度こそは休めても許されるのではなからうか。辛いのは己一人ではないと知っている。長安では多くの人が死に、まだ多くの人が苦しんでいる。仏蕃

は人々を救うために、いまごろは長安の街を歩き回っているのか。己ばかりが安らかな日々を希求してはいけない。

己は何をするのか。狐潭を出たとき、洛陽に着くまでにはと期限を区切った。明日もしも雨が上がるのなら、今日が最後の晩である。いまがそのときか。蘭が押し黙っているのは、いま為すべきことをせよと促しているのか。蘭には何も言っていない。それでもわかっているようか。己の心を明らかにするときにきている。

そもそも己は何をするためにこの世に生まれてきたのか。かつて南山において、その答えは、貢拳を受け、唐朝の再興に努め、民衆の小さな幸せを守ることであるとした。それは果たせなかった。つまりは己は何もできぬのか。そうではないと信じたい。

火を見つめる。

狐潭を出てここまでの道筋で、心の内に多数の詩句が浮かび上がり、前後の脈絡を持たぬままにそれぞれの詩句に彫琢が施されていった。その過程で



確かに己は韋応物の子孫であると感じることができた。熱病でうなされて以来初めて詩が一つのまとまりある形を成そうとしてきている。

「どうでしょう、そろそろでございましょうか」

ぽつりと言った胆の言葉が、思わず知らず己の思いを外に出してしまったもののように聞こえ、ぎくりとする。

蘭が身を起こし、蓋を少しばかりずらして覗き、

「豆ですからな、もうしばらく弱火で煮ますかな」

そうだ、もうしばらくだ。いまを逃してはなるまい。詩をここで完成させるのだ。

向かいに彩霞がいる。己の目の前から消し去るようにして嫁に出した娘。

その娘に再び近づけることがもしもあるとすれば、己の全てを告げ得たときの他はあるまい。許されるとは限らないが、それならそれで仕方ない。妻と子を苦しめてきた己が、一人残った娘の前で偽りを続けていてよいものではない。これまで皆に見せてきたのは偽りだった。かつて銀犁には何もかも告

げた。銀犁の前には真実の己がいた。娘の前にはそれを出せなかった。

長安であつたことを胸から吐き出す。そこから全てが始まる。ただし出せぬものが一つある。楊銀たちのことは言つてはならない。楊爺は胆に後を託した。胆は大切な男だ。胆を苦しめてはならない。彩霞と胆がお互いをどう思っているのか。彩霞のためにも言つてはならないだろう。

蘭が懐中より笛袋を取り出す。炎の前に笛をかざし、漆に反射されて鈍い光が堂内に揺れる。ぐずっていた春琴がそれに誘われてちよこちよここと寄る。蘭の手より笛を渡され、くるくると回す。

「笛を、春琴ちゃんはまだ見たことなかったですか。こうやって吹くと音が出ますな」

春琴は真似をしてあちこちの穴に口をつけてみるが、さっぱり鳴らない。蘭は笑い、

「そのうち教えてあげましょうかな」

立って笛を吹く。長安に官軍が入った夜に聞いて以来の蘭の笛の音だ。

吹くのはそのときの曲ではない。華やかな曲、かつて揚州の色街で聞いた。陽気に吹く蘭の笛につられて、春琴が体を動かす。外で激しく降る冷たい雨の音を忘れさせる。

その音の流れの中、心の内に詩ができあがっていく。

曲が終わると、蘭は鍋を火から少しばかり遠ざけ、

「いましばらくじっくりと蒸らしてやれば、芯まで煮えましような」

その鍋を見る皆の顔は和らぎ、雨の中を歩いていたときとまるで違う。

ここで言うべきかためらいが生じる。いまがそのときと思い、詩も完成したが、もしもここに己がいなければ、皆はもっと寛いだ雰囲気になっているのではないか。綜や淑娥は母や父に向かって楽しげにものを言うだろう。陸氏は元来は陽気な女性だ。彩霞も陸氏とならよく話す。彩霞が口を開けば、春琴はもっと活発に動き回る。都から二人が戻ってくるまで、小屋ではそのようにして七人の暮らしが続いていたはずだ。己はそれは崩してしまった。己がここで心を開けば、また変わっていくと考えたいが、そうはならないよ

うな気もしてくる。己の詩は、蘭の笛のように人の心を和らげるものではない。むしろその逆だろう。しかし、この時を失ってはいけない。

咳払いとともに、

「皆に聞いてもらいたいことがある」

と、口を開く。

皆の顔が早くも堅くなる。ここで止めてはいけない。

「大事なことを話したい。まず藹には、頼みたいことが二つある」  
弟が膝を進める。

「何なりとも、この私でできることでしたら」

弟はいつも変らない。それが何よりも救いだ。

「まず一つ目は、そなたは覚えていよう、杜甫の『北征』の詩、それを朗誦してほしい」

藹はしばし思索し、

「初めは、『皇帝二載の秋』で間違いありませんでしょうか」

「その通りだ」

最初を思い出せば、その後は、一字一句間違えない。

皇帝二載秋 皇帝二載の秋

閏八月初吉 閏八月の初吉。

杜子将北征 杜子 まさに北征して

蒼茫問家室 蒼茫として家室を問わんとする。

藹の声は常に美しい。意味はわからなくても、聞くだけで陶醉感のようなものに浸れる。蘭の笛とはまた異なる面持ちで、人々はこの長い詩を聞く。

煌煌太宗業 太宗皇帝のお仕事は煌煌と輝き

樹立甚宏達 樹立されたものは広大にして永遠に貫き通る。

『北征』の詩のこの終わりを、皇帝が逃げた二年前に、莠の息子と娘にも聞かせた。

藹が詠じた余韻がおさまるのを待つて韋荘は言う。

「至徳二載（七五七年）の秋、杜甫は安祿山が支配する長安より脱出し、皇帝の

もとへと走った。それから二二五年、中和二（八八二）年のこの秋、私は黄巢が支配する長安から脱け出た。言うまでもなく、私は杜甫に遥かに及ばない。それでも、都の災厄をこの目で見てきて、何も言わずにいるのは許されないと感じる。我が叔父上、蘭くんの父君は、我等が祖、応物の詩を終生愛された。応物は杜甫と同じ時代を生き、反乱に遭遇して発奮し、勉学を志し、詩の名家となった。私は応物の子孫として、杜甫と同様の体験をし、都の災禍を詩に歌う責務があると考えずにはいられない。藹への二つ目の願いは、いまから誦じる詩を覚えてほしいと言うことだ。『北征』の詩を朗誦してくれたように、私の詩もいつでも朗誦できるようにしてほしい。『北征』の詩のように立派な詩ではない。しかし、私は信じたのだ。この詩を携えて洛陽に入っていくことで、私のこれからの人生が変わり、長安の民の運命も変わると。いかに詩が拙くとも、そうでなければならぬ理由は後で言うつもりだ。では、藹よ、心して聞いてくれ

「かしこまりました」

藹は居住まいを正す。

「詩の題は『秦婦吟』である」

大きく息を吸い、藹よりも低い声で重々しく誦じ始める。外は雨が激しく降り続き、鍋から細かい湯気が立ち昇る。

中和癸卯春三月 中和三年の春三月

洛陽城外花如雪 雪のような花に包まれる洛陽城。

東西南北路人絶 東西南北の大路は静まり返り

緑楊悄悄香塵滅 緑の柳の葉がしつとりと垂れる。

路旁忽見如花人 ふっと現われる一片の花びらのような人影

独向緑楊陰下歇 柳の根元にぼつねんと息をつく。

鳳側鶯欲欹鬢脚斜 鳥が翼を無造作に広げたような乱れた髪

紅攢黛斂眉心折 紅や黛は所を失い、憂いが眉に刻まれる。

借問女郎何処来 「そなたはどこよりきたのか」

含嚔欲語声先咽 女は目を顰め、語るよりも先に咽び泣く。

回頭斂袂謝行人

首を振り、袂で拭い、がっくりと頭を垂れ

喪乱漂淪何堪説

「この喪乱漂淪をどう語ればよろしいのでしょうか。」

三年陷賊留秦地

三年このかた賊の手に落ちた都にいて

依稀記得秦中事

記憶を虚ろなものとしてきました。

君能為妾解金鞍

あなたさまが馬より降りてくださるのなら

妾亦与君停玉趾

思い出して、お話し申し上げましょう。」

詩の始まりは『北征』に似て同じではない。中和三年三月とは来年の春。

杜甫は己自身の旅をありのままに歌い、己は次の春に洛陽城に現れるであろう女に仮託して歌う。

その女は賊の手に落ちた長安から逃れてきたと言う。長安は古くは秦の国のあったところ、だから長安の女を「秦婦」と呼ぶ。

馬上の人に尋ねられた秦婦は次のように語り出す。

前年庚子臘月五

さきの年の十二月の五日のこと

正閉金籠教鸚鵡

金の籠の鸚鵡に言葉を教えつつ



斜開鸞鏡懶梳頭

鸞の絵の鏡を斜めに見て、気だるく髪を梳いており

間憑雕欄慵不語

雕の絵の欄に吊るされた鳥は物憂げにもの言ひませ

ん。

忽看門外起紅塵

突如として、門の外に紅色の塵が見え

已見街中●金鼓

戦さ太鼓が街中に鳴り響きました。

庚子の年とは広明元（八八〇）年。その年の十二月、黄巢は長安に入城した。鏡を開き、鸚鵡に言葉を教えるこの女は誰か。銀犁であろうか。

何事かと、秦婦のまわりで人々が騒ぐ。ある人が、官軍が潼関の守りを固めにいったのだから、賊がこうも早くくるはずがないと言う。そうであるに違いないと、皆は心を安めようとする。

しかし、秦婦たちはたちまち恐ろしい現実と向き合うことになる。

須臾主父乘奔至

慰めの言葉も終わらぬうちに夫が走り帰り

下馬入門癡似醉

馬を下り、門より入りくる姿は、まるで酔い痴れた

よう。

秦婦の夫は呻くように言う。

適逢紫蓋去蒙塵

道で見たのは、遠く去りゆくお上の御車

已見白旗来匝地

賊の白い旗が大地を覆って迫ってきている。

夫の言葉に家人は動転する。

扶羸携幼競相呼

老いと幼きとを、とにかくかき集め

上屋縁牆不知次

手当たり次第に、壁から屋根へと上らせました。

近くの家でも周章狼狽、ただただ右往左往するばかり。

南隣走入北隣蔵

南隣りの人は北隣りの蔵に駆け入り

東隣走向西隣避

東隣りの人は西隣りの家に逃げ込みました。

北隣諸婦咸相湊

北隣りの女たちがわあわあ泣き叫んでいると

戶外崩騰如走獸

戶外で、獣の群れがどつと走るような音。

轟轟崑崑乾坤動

どんどんごうごうと地をどよもし

万馬雷声従地湧

万の馬、雷のような声が大地より湧き立ったのです。

地上の異変に呼応して、天にも怪異が生じ、俄に暗雲に覆われ、血の色の星が飛び、妖光が明るく暗く空に交差する。その一刹那に長安の光景は一変する。

家家流血如泉沸

どの家からも血が泉のように沸騰し

处处冤声声動地

罪なき叫びの音が四方を揺り動かします。

舞伎歌姫尽暗捐

舞伎や歌姫はことごとく闇へと曳かれ

嬰兒稚女皆生棄

嬰兒や稚女は生きたまま棄てられます。

秦婦は地獄と化した長安をまずこのように歌ってから、近隣の出来事を語る。

東隣有女眉新画

東隣りには新婚間もない娘がいます

傾国傾城不知価

それはそれは敵う者のない美しきでした。

長戈擁得上戎車

長い戈を横たえた男がきて、その娘を戎の車に乗せ

回首香闈淚盈把

涙いっぱい顔がこちらへと向けられました。

旋抽金綫学縫旗

娘は賊の軍中で、金糸の刺繍をしていた手で軍旗を

纒上雕鞍教走馬  
有時馬上見良人  
不敢回眸空淚下  
西隣有女真仙子

一寸橫波剪秋水

妝成只對鏡中春

年幼不知門外事  
一夫跳躍上金階  
斜袒半肩欲相恥

縫わされ

馬にまたがることも教えられました。

あるとき馬の上から元の夫を見て

涙の下る目をそむけることさえできませんでした。

西隣りには仙界からきたかと思われるような娘がい  
まして

ちらりと目配せすれば、男がころりとまいるほどで  
した。

お化粧ができあがった鏡の中の我が顔にうつとりと  
して

門の外で何が起こっているか気づかずにおりました。  
金色の階段を男が跳んで昇ってきて

娘を斜めに担ぎ上げ、肩も顛わに、辱めようとしま  
した。

牽衣不肯出朱門  
紅粉香脂刀下死  
南隣有女不記姓  
昨日良媒新納聘  
瑠璃階上不聞行  
翡翠簾間空見影  
忽看庭際刀刃鳴  
身首支離在俄頃  
仰天掩面哭一聲  
女弟女兄同入井  
北隣少婦行相促  
旋拆雲鬢拭眉綠  
已聞擊托壞高門  
不覺攀縁上重屋

娘は衣を牽いて外に出されまいと抵抗し  
刃の下にその色香は失われてしまいました。  
南隣りの娘は、姓は忘れましたが  
前の日に仲人が良縁を結んだばかりでした。  
瑠璃を張った階上の部屋の  
翡翠を飾った簾の中にその娘の姿がありました。  
庭先で刀がざらりと光るや  
家の者の首がすばすばと体から離れていきました。  
娘は顔を覆って一声叫びますと  
姉と妹とともに井戸に身を投じました。  
北隣りの娘たちは行き惑い  
髪を崩し化粧を乱してぐるぐるまわるばかり。  
門を叩き壊す音が聞こえ  
どうにもならず屋根に攀じ登りました。

須臾四面火光来　たちまち四方は炎に囲まれ

欲下迴梯梯又摧　降りようとしても梯子は碎けてしまいました。

煙中大叫猶求救　煙の中に救いを求める叫び声がありました

梁上懸屍已作灰　梁に残ったのは灰となった屍体でした。

秦婦自身はかろうじて死を免れ、心ならずも賊に従った。そうしなければ生きられなかったからだ。

夜臥千重劍戟圍　夜は千重の劍戟の囲みの中に臥し

朝食一味人肝膾　朝には人の肝の刺身を食べさせられました。

賊はさんばら髪の垢まみれ、衣類を逆さまに着、異なる言語を口にしてと、賊の姿をことさらに醜悪なものとして秦婦は語る。

夜来探馬入皇城　ある夜、偵察に出ていた馬が皇城に戻ってきて

昨日官軍収赤水　官軍が赤水を収めたと報告しました。

赤水は長安から百里、賊たちは息を呑み、秦婦たちは蔭で喜び合った。妖徒たちは今日にも死ぬだろう、官軍が明日にも入ってくるだろうと、期待し

た。しかし、数日の間は何の知らせもなく、長安は何も変らない。そして判明したのは、官軍は敗れて長安から去っていったとの悲しい結果。

それからの長安は一段と悲惨さを増す。

四面從茲多厄束 災厄は四方より束になって押し寄せ

一斗黄金一升粟 一升の粟が一斗の黄金となりました。

尚讓厨中食木皮 宰相の尚讓の厨にも木の皮しかなく

黄巢机上剥人肉 黄巢の食卓に載るのは人の肉ばかり。

東南断絶無糧道 東南の道は断えて食糧はこず

溝壑漸平人漸少 生きる人の姿が減り、溝は屍で埋まって平らになり

ました。

六軍門外倚殭尸 六軍の門の外にも死骸が並び

七架営中填餓殍 近衛兵の営中も飢える者ばかりとなりました。

長安は死んだ者と飢える者だけとなった。

長安寂寂今何有 長安は寂寂として今は何があるのでしよう

廃市荒街麦苗秀 廃れた市に荒れた街、草が伸びるばかりです。  
 貴族の邸宅も皇帝の宮殿も荒廃し、

昔時繁盛皆埋没 かつての繁栄の全てが戦火に没し

挙目凄凉無故物 凄まじくも昔を思わせるものはどこにもありません。

内庫焼為錦繡灰 宮殿の庫は焼き尽くされて錦繡は灰となり

天街踏尽公卿骨 都大路で公卿の骨が踏まれているのです。

秦婦はこのような長安から脱出する。

来时暁出城東陌 ある暁に城の東の道に出ました

城外風煙如塞色 城の外の風煙は、辺境の塞のような色をしておりま

した。

路傍時見遊奕軍 路にはときに賊軍の姿を見

坡下寂無迎送客 町に着いても私を迎える人はいませんでした。

霸陵東望人煙絶 霸陵から東はどこにも人煙がなく

樹鏢驪山金翠滅 驪山の豪華な離宮は草木の下に埋もれておりました。



大道俱成棘子林

官道はどこも棘の林となり

行人夜宿牆匡月

旅ゆく者は月影のさす牆に寄るばかりでした。

明朝曉至三峰路

ある朝に三峰の高みより見ますと

百万人家無一戸

百万戸を誇った長安に一戸もないありさまでした。

破落田園但有●

周囲の田園はただ草が伸びるだけ

摧殘竹樹皆無主

竹と樹木の内に住む人の姿はどこにもありません。

秦婦は、途中、華山の神に、この災厄の所以を問う。神は答えない。神通力をもつていても神は人を助けようとしてくれず、山中に隠れて知らん顔である。秦婦は神ばかりか、東方の人も南方の人も、長安の人々を救いにいこうとしてくれないと恨む。

秦婦は潼関の東に出て、一人の老夫に出会う。老夫は天を仰いで哭し、わしの話を書いてくれと秦婦に言う。

歳種良田二百墾

かつては二百戸分の良き田畑があり

年輸戸税三千万

年に三千万の税をおさめておりました。

千間倉兮万糸箱

千間の倉には万の糸の詰まった箱があり

黄巢過後猶殘半

黄巢が過ぎ去った後でも半分は残っております。

自從洛下屯師旅

そこに、洛陽に大軍が駐屯しましてから

日夜巡兵入村塢

日夜、村から村を兵士が巡りまして、

匣中秋水拔青蛇

刀は秋の水のように冷たく、青蛇のように恐ろしく

旗上高風吹白虎

旗は強い風にうなる白虎のようでありました。

入門下馬若旋風

門先で兵士が馬を下り、旋風のように入り込んで

罄室傾囊如卷土

土を巻き上げる勢いで家の中をかきまわしました。

家財既尽骨肉離

家財はすべてなくなり家族はばらばらに

今日垂年一身苦

今はただ私一人がここで苦しむだけです。

この老夫の小屋を後にして、秦婦はこれよりどこにいくべきかと考える。

出門惟見乱梟鳴

門を出れば、ただ梟が不気味に鳴くだけ

更欲東奔何処所

さらに東にいくべきか、どこが良いのでしょうか。

道はどこも塞がり、江南の地は早くから黄巢に荒らされ風景さえ異なつて

いると聞き、秦婦は行き場を得ないまま、洛陽の城外に呆然と立ち尽くす。そして『秦婦吟』の結びである。それは、声を掛けて自分の嘆きを聞いてくれた人への訴えである。

願君挙棹東復東

あなたにお願いするのは、棹を挙げて東へ東へと向かい、

詠此長歌献相公

この長い歌を詠じ、お偉い方に献じて下さることで

秦婦が願うのは、この嘆きを耳にした者が長安の民を救おうと思ひ立ち、その力によつて黄巢が滅ぼされ、唐が再興され、再び平和な世となること。己はまさにそのためにこの詩を作ったのである。

静かに口を閉じる。

向かいにいる彩霞は深くうつむき、その表情は伺い知れない。

雨音だけが聞こえるしばしの沈黙の後に、蘭が口を開く。

「兄貴は兄貴、杜甫は杜甫なのですな」

「寢床の中にも書けると、そなたはこの詩も言うのかい」

「我が親父どのがこれを聞けば、兄貴はよい苦勞をしたと言うでしょうな」

「叔父上は、詩のためにはいまま少しの苦勞が必要とおっしゃって下さった。

まだまだであるのは、私自身がよく知っている。杜甫にも応物にも遠く及ばない。この詩も寢床の中に入れて書ける類のまやかしであることに変わりがない」

「立派なものと俺は思いましたが」

「そうです。兄上の詩は全て記憶しておりますが、いままでのあらゆるものより優れ、誰にも書けない詩であると思います」

と、弟が言う。

「これまでの詩はいずれも価値のないもの。この一篇のみを残して、全て忘れ去ってくれて構わない。唐の世にこの私が生きた証しとして覚えていてほしいのはこの詩一篇だけだ。だから、最初にあのように頼んだのだ」

「そうでありながら、兄貴は、なぜまやかしと言うのですかな」

「蘭くんは、答えずともわかっていよう」

「詩が事実を記録するものであるのなら、確かにまやかしてしような。詩とはそのようなものではないと、昔、兄貴とそんな話をしましたな」

「その話をしたとき、そなたは杜甫の『北征』を最高の詩として挙げてくれた。『北征』は一字の虚辞も混じえず、ただ杜甫自身を歌って、あらゆる詩を超えるものとなった。私の詩は『北征』と異なり、我が事を歌わず、虚構の秦婦に語らせたまやかしである。なぜそうしなければいいのか、その理由をこれから話そう。とりわけ、彩霞、そなたに聞いてもらいたい。私は莊園に帰って、まずそなたに詫びた。そなたがいまもって許してくれぬのを、父である私は、当然であると考えている。この父のありのままを知ってもらいたい。そのことの方が、そなたの許しを得るよりも大切であると思っています。私がいかなる者なのか、いかなることを為す者であるのかを皆に話したい」

彩霞は動かない。

目を閉じ、我が心をもう一度定め、

「では、庚子の年の臘月にまことにあったことを話そう」

阿枉の兄が兵士の身代わりとなつて受け取った金を店に持ってきたところから始め、阿枉が熱病で死んで、その墓に崔婆が現れて銀犁について語るまでを一気に話す。

「これが長安であつた実際のことだ。何か間違つたところがあつただらうか」  
「この通りでしたな」

蘭はそう答えてくれる。しかし、楊銀、肋父子のことには今日も触れない。それは決して言つてはならぬことである。

また、莠たちが殺されたのは、賊軍と官軍の乱戦の巻き添えになつてのことと、前に蘭が言つた通りにした。『秦婦吟』では、官軍が長安に入ったことさえ歌っていない。それは、秦婦が願う通りに、『秦婦吟』が多くの人に聞かれるのを意識してのことだ。弟たちは確かに官軍に殺された。それでもいま唐朝を恨む気持ちはない。長安での一時期は恨まぬものでもなかつたし、生きるために黄巢政権に近づき、黄巢が新たな世を切り開くかも知れぬと全く

期待しなかったものでもない。そうしたことは長安にいなかった者にはわかってもらえない。秦婦の願いを聞き届けて、黄巢を滅ぼしてくれるのは唐朝の人々だ。だから官軍を非難していると受け止められるようなことは言わないでおくのがよい。

銀犁のことは隠さずに真実を告げた。

「一人の妓女に心を奪われていた私は行動を誤った。それが莠たちを死なせてしまった一番の原因である。愚かな男だ。杜甫は一点の非もない人間だった。その真実の言葉は比類のない強い力を持った。愚かな私があるものも言っても何の力もなく、人の心は動かせない。だから秦婦の口を借りた。唐の平和な御世が甦るのを願う気持ちには杜甫と同じであつても、悲しいことに、私は我が言葉でそれを詩に歌えない。私自身ではなく、哀れな秦婦が発する言葉であるのなら、人々の胸にも届こうか。長安の民の嘆きを伝えたい。洛陽や他の地にいる人々に、都のことを知ってもらいたい。私のために『秦婦吟』を作ったのではない。いかにそれが拙くても、都の民を救い出すため、平和

な世を取り戻すために、人々に力を出してもらいたいと願って作った。寢床にあつても書けるまやかしの詩であつても、世のために、人のために役に立つてほしい。それが私の切実な願いだ」

言うべきことはこれで尽きたようだ。詩は完成し、己の胸の内にあつたものを出した。しかし、これだけでしかない。

虚脱感に襲われる。終えた後に残つた己はあまりにも小さい。杜甫にも韋応物にも遠く及ばないと言つたがまさにそうだ。

そうでありながらも、しかも娘に許されないのはやむを得ぬと了解しているながらも、しかしなお和解があり得るのではないかと望んでいる己がいる。それこそが卑小である証左だ。その自覚がありながら、敢えて口にする。

「彩霞、何かこの父に言つてはくれまいか」

彩霞はゆつくりと顔を上げる。母に似るとずっと思つてきた目がそこにある。

「父上は、この私に許しを請われました。私は父上からそのように請われる



身ではありません。娘に謝ったりなさらないでください。それよりも、母上についてお考えになっていただきとうございます。以前にも申しましたように、母上と私とは異なります。私ではなく、母上の思いをお考えになっていただきたいのです」

妻が出ていったあの日、彩霞は「母上と私は異なります」と言った。その言葉をこれまでよく考えずにいた。

娘の目に、常に妻の目を重ねていた。彩霞はそれを初めから知っていたのだ。

韋莊は嘆息し、

「わかった。そうしよう」

「純のこともです」

「そなたの言う通りだ。そなたの母のことも、純のことも、何もわかっていなかった。遅すぎたが、せめていまからでも考えるところでしょう」

長安において銀犁ばかりを思っていたことを恥じ、それを隠そうとしてき

た。それよりも前に、妻を苦しめ、彩霞を苦しめ、純を苦しめていたことの方が余程愚かであったのに、それは隠すよりも初めから皆に知られていた。そつと綜を見る。

長い話に倦み、重苦しさに気を滅入らせているのか、生氣のない表情で下を見ている。純の苦しみを綜には与えたくない。宰相を出した家の名の重みをこの子に負わせたくない。自由に釣り糸を垂れる身であってほしい。

では、己はどうしたらよいのか。結局、元の間に戻ってしまったのか。蘭が立ち、

「ちようどよくできあがったころですか」

鍋の蓋を取る。

湯気とともに、うまそうな香りが立ち昇る。

「さあさあ、食べますかな。うまくすれば明日はいよいよ洛陽。元気よく最後の道を歩き通す力を、この豆粥で蓄えるといたしますかな」

蘭の明るい声に人々は顔を上げて鍋を見る。蘭が韋家の主であれば人々は

間違ひなく幸せになれるだろう。己はここにおいても皆のためにならないのではないか。

悄然とする己を藹が見ている。その視線に微笑で応える。

韋家の主となるべく生まれてきた己には、ここにいる人々を守り、少しでも幸せにしていく責務がある。我が祖、韋応物の血の流れを引く己には、詩をもつて我が業とする自覚を持たねばならない。秦婦の嘆きを人々に伝え、唐の再興に努めねばならない。できるできないではない。

陸氏と彩霞が粥を椀によそい、蘭が楽しげに話しつつ皆に渡していく。

蘭には蘭の求めるものがあるはずだ。南山での約束から、己のそばにずっといてくれている。本来、蘭は蘭で思うがままに生きていた。いまは蘭がいなければ困るが、己に他の七人を引き受ける力があるのなら、蘭にはただちに好きにしてもらいたい。それこそ船で蓬萊島を目指してもらって良い。

今夜のこの温かい食べ物を楽しむを、蘭の為すがままに任せよう。

「洛陽に着けば、ここで雨に打たれたことも、いずれ懐かしい思い出として

語れるようになりましような」

光武帝のように大業を成さずとも、しみじみと回顧できるような時がいずれはくるのだろうか。己は無力で卑小であっても、唐土の民、無数の秦婦たち、そのような日が必ずきて、『秦婦吟』がいささかなりともそのことに役立ってくれると願いたい。

蘭より受け取った腕に立ち昇る湯気を見つつ、そのように考える。

### 洛陽の夕方。

唐の東の都も、彼方にたった一人、背を丸めて足早に遠ざかっていく男の姿があるばかり、年の暮れの冷たい風が音を立ててただっ広い通りを吹き抜けていく。

楊胆を連れればよかった。いまさらながら悔やまれる。腕に負った傷を慮って店に留め、藹と二人だけで出掛けた。

胆が怪我をしたのは十日余り前。蘭の用事で橋の南側にいき、腕を赤く染めて帰ってきた。悪漢に因縁をつけられたと言う。胆の担いでいた荷が目を付けられたらしい。左の二の腕に、さほど深くはないが、長さ二寸ばかりの刀傷があった。莊園が襲われたときのものに加えて、楊胆の体にまた傷が増えた。

今日がもしも橋を渡って南にいくのだったら、胆自身はもう治ったと言っていることだし、少々気の毒ではあっても、きつと連れたであろう。洛水を挟んで北と南では、いまの洛陽は様子がまるで違う。北側には人が戻ってきているが、南側は空き家ばかり、たまにいとすれば大方は勝手に住み込んだ盗賊、どこそこで女がかどわかされたとか、貴人が殺されたとか、そんな噂ばかりが聞かれる。

今朝は店と同じ北側で、さほど遠くもなく、昼時分には帰れるからと、藹と二人で十分と判断した。先方で予想外に長い時間を過ごし、すでに日は西に傾きつつある。暗くなってくれば、人通りのないこの寂しさは油断がなら

ない。藹は大きな荷を抱え、胆のことがあつただけに気がかりでならない。

「代わろうか」

遅れがちな弟に声をかけて立ち止まる。

「いえ、大丈夫です。今日は兄上は主人。私は供人。主人に荷を持たせる訳にはいきません」

半ば笑いながら藹は言う。この寒さだと言うのに、額に大粒の汗が浮かんでいる。

「兄弟で、主人も供人もあるまい」

荷に手をかける。

「いけません」

藹は渡そうとしない。

藹に難儀をかける荷も、中身は有難いことに、上等な衣類だ。訪問先で頂戴してきた。

心がせくが、弟のことを思うとこれより速くは歩けない。

「どうしてこのようなものまで下さったのだろうか」

贈り主は崔胤（さい いん）と言う、韋莊より十歳ばかり若い男だ。

「兄上の詩に感銘を受けられたのでしょうか」

「そうだろうか」

崔胤もそのようには言った。

使いがきたのは三日前。洛陽に到着して一月余りが経っていた。「主人は『秦婦吟』のお噂を耳にし、是非ともお目にかかりたいと申しております。御足労ではございますが、屋敷までお越し願えませんでしょうか。蘭が旧知の者に『秦婦吟』の話をし、それがどう回ってか耳に達したのだろうかと推測したものの、少なからず驚かされた。嬉しくもありすぐに承諾した。ただ垢にまみれたぼろぼろの衣服で訪ねていくのは気が引け、二日ばかりの猶予をもらった。楊爺の潰れた小屋に、かろうじて人前に着て出ていけそうな着物が一揃いだけあった。いつもはそれを蘭が着て出ていた。使者は「御都合のよろしいときで結構でございます」と了承してくれ、屋敷の所在を尋ねると、さ

も意外そうな顔で、「お越しいただければおわかりにならないことはありますまい」と妙に曖昧な答えをして帰った。

その日も出ていた蘭が戻ってくると、「崔どのの屋敷を知らぬ者が、まさかこの洛陽にいるとは、向こうさまもさぞびっくりしたでしょうな」と、大笑いした。それもそのはずで、崔胤とは、先々代の皇帝に宰相として仕えた崔慎由（さい しんゆう）の息子、その豪勢な屋敷を普通は知らぬはずがない。

唐代の名族と言えば、清河の崔氏、博陵の崔氏、范陽の盧氏、趙郡の李氏、隴西の李氏、滎陽の鄭氏、太原の王氏の五姓七族が最高と決まっている。このいずれかとは姻戚関係を結べたなら男子にとってこの上ない栄誉である。崔胤の家は南祖の崔氏と呼ばれる流れで、清河の崔氏、博陵の崔氏と同祖で、世々高位高官を輩出してきた名家中の名家である。杜陵の韋氏などは物の数にも入らない。父親の崔慎由ならもちろん韋荘もその名をよく知っている。崔慎由は亡くなって久しく、晩年の子である崔胤は若く、朝廷にまだ出仕していない。



その崔胤の生い立ちにまつわる奇妙な話を蘭が聞かせてくれた。父の崔慎由が浙西に巡察に出た折のこと、瓦棺寺で休息していると、ある術士がするすると近寄り、「間もなくの御男子御誕生。まことにおめでとございます」と祝辞を述べた。崔慎由は齢も齢だし、夫人や妾に妊娠の気があるとは聞いておらず、妙なことと感じたが、あるとき更衣を手伝ってくれた官妓に戯れたのを思い起こした。その官妓を召し出すと、確かに子を宿していたので、屋敷に引き取って出産させた。生まれた赤ん坊は腋の下に痣があり、文字のようにも見えた。かの術士を呼ぶと、これはかつて瓦棺寺で法華経を読み若くして死んだ僧の名であると言った。そのせいか、崔胤は七歳に至るまで肉を全く食べようとしなかった。この奇妙な性癖に困った父親は、終南山の高僧に息子を会わせた。僧は崔胤の頬を撫し、「官爵を愛されるのに、肉を召し上がらぬ法はありますまい」と言った。その日から崔胤は肉を食べ始めた。

蘭はなけなしの一着を脱いで韋莊に渡し、「いずれは父君の後を継いで宰相になるやも知れぬお方、そのお屋敷に、これほど粗末な服で訪ねた者はかつ

てありませんでしょうな。これで一度で名を覚えて頂けましょう。結構ですな」と、笑った。せめて供人を連れようと弟を同行させ、今朝、崔胤の屋敷に参上したのだった。

話に聞く以上に立派な大邸宅だった。不似合い過ぎるなりに身の縮む思いがした。『秦婦吟』を聞いていただくにはむしろこのくらいであった方がふさわしいかと勇気を奮い、案内されるがままに奥へと通った。豪華な部屋で待つことしばし、崔胤は好い香りを漂わせて静かに姿を現した。芳香に酔い、光沢のある衣服に目が眩んだが、唐の貴人がそれにふさわしい姿でいることに力強さも感じた。世の中の全てが崩れてしまったのではない。

崔胤が口を開くと、少々意外なことに、高貴な人に似つかわしい温雅な響きではなく、低くくぐもった陰気な声だった。語尾を強く切るところにある種凄みがあった。香りや輝きに慣れてくると、衣服は優美であるよりは簡素で、挙動はしなやかであるよりもきびきびとし、容貌はどちらかと言えば麗しさに欠けると見えてきた。目が細く切れ上がり、長い時間全く瞬きせずに

相手を凝視するのは、並みの身分の者にはできぬことである。それで萎縮する韋莊ではなく、己も杜陵の韋氏を背負って立つ男、我が祖も宰相であったのだと、ことさらに悠揚迫らぬ態度を見せた。

そのときの気分を思い出して一人苦笑し、

「どうやら試されたらしい」

と、弟に言う。

「何をでしょうか」

「崔殿は『秦婦吟』を聞きたいとおっしゃってくださいました。名のある崔殿に聞いていただければ、より多くの人の耳に『秦婦吟』が達するようになるうと、期待をもって伺った。しかし、あの方の真の目的は『秦婦吟』にはなかつたようだ。それに、『秦婦吟』はいささか時を失したようだ。残念なことであるが」

「熱心に聞いておれたようですが」

「それなりの興味を示してはくださった」

「その詩を書いてほしいと御所望され、紙や筆を届けてくださるとまでおっしゃったではありませんか」

「あの方の御関心は『秦婦吟』よりはこの私であったようだ。それである目でずっと吟味されておられたのだ」

「吟味とは」

「使える人間かどうか」

「使えるとは」

「七歳のときに官爵を愛すると決めて肉を召し上がるようになったお方だ。官爵のためにこの私が役立つからだ」

「蘭にいさんが言っていた話はまことなのでしょうか」

「事実ではなくても、崔殿の人となりを表すものであるのだろう」

「何やら恐ろしいです」

「そうだ、あの方は恐ろしい人だ、敵に回したなら」

「兄上はどのように見られたのでしょうか」

「そなたの抱える荷が答えだろう。可もなく不可もなく、そんなところか」  
韋莊は笑う。

「可ではないのでしょうか」

藹は、兄が人から尊重されるようであってほしいといつも願っている。可と崔胤に認めてもらうには、少々媚びておけばよかったかも知れない。食べるもの、着るものに困るいまの状況では、相手の好意を多く引き出そうと振る舞っても、非難はされまい。己は杜陵の韋氏と思う気持ちこそうさせなかつた。

「崔慎由さまの御子と伺い、劉瞻さまのことを思ってお屋敷に伺ったのだが、期待外れだった。劉瞻さまのようなお方はもう世にはおられぬ。身の処し方を私も考えなくてはならない。これからは、崔殿のような方が世の中を動かしていくのだろう。崔殿に可とされても嬉しくはない。しかし、敵と見なされるのは得策でない。崔殿が私を使おうとお考えなら、逆にそれを利用するくらいのことを考えるべきだろう。そうではないかい」

「私にはよくわかりません」

「劉瞻さまであれば、使う使われるなどと、嫌なことは考えずにすむのだが」  
かつて宰相の位にあった劉瞻に、揚州の旅から帰った直後会った。南方に流されていた劉瞻が、都の近くに虢州の知事として呼び戻され、新知事を迎える宴で詩を献じた。唐の宰相とはかくあるものかと強く心を打たれ、劉瞻が弟の書を褒めてくれたのが何よりも嬉しかった。

韋諷に『秦婦吟』を清書してもらい、崔胤に献じて、弟の字のよさはわかってもらえないだろう。そうは思っても、せっかく得たこのつながりは生かすべきだ。己のためだけでなく、秦婦のためにもだ。秦婦の訴えを多くの人に聞いてもらいたい。できれば要枢の人々に耳を傾けてほしい。今日はその第一歩として、崔胤の前で諷が朗誦した。

崔胤は聞き終わると、いかにも感銘したとの面持ちで賛辞を並べた。それはただ儀礼的に褒めているだけではないかと疑いつつ謙遜すると、崔胤は幾つかの箇所を復唱して、詳細に感想を告げてくれた。それで少々好い気分

なりかけていると、すぐにたじろがせるような質問を浴びせてきた。

「貴殿と秦婦が必ずしも同じ体験をされたと考えるものではありませんが、確か中和元（八八二）年四月であったと聞いております、王処存（おう しょそん）どのを初めとする將軍たちが、黄巢を討つべく長安に突入したはずですが、そのとき貴殿は長安におられたのでしょうか。いまの詩では官軍は長安に入っていないようですが、事実はどうであったのか、お聞かせいただけましようか」

官軍の振る舞いは意図して曖昧にしか詩には歌わなかった。

「その四月に私は都におり、官軍は確かに長安に入りました。我らは賊に虐げられ、詩で秦婦が申しておりますように、都の外の様子は無論のこと、同じ都の内でも何が起こっているのかほとんど何もわからぬ状態に置かれていました。官軍を率いていたのがどなたであったのか、今に至るまで知ることありませんでした。王処存どのがおられたとは初めて伺った次第です。王処存どのはいかにして長安に向かわれたのでしょうか」

韋莊は深く問われるのを避けようと、逆に崔胤に尋ねた。

「義武節度使の王処存どのは、黄巢が潼関を破って長安に入ったと聞かれますと、都の方角を向いて慟哭され、勅命を待たず、大軍を率いて関中へと急行されました。手勢より二千の兵を分け、成都に向かわれつつあったお上をお守り申し上げるとともに、諸将軍に呼びかけて黄巢を包囲する戦を起こされました。半年足らずで黄巢を都に封じ込め、ついには都から追い出すに至ったのはまさに王処存どのお働きがあったればこそでありました。しかし、残念至極にも、都に突入した際に將軍たちの足並みが揃わず、無用な混乱に陥り、夜に入って同士打ちをする始末、王処存どのは兵士の頭を白い布で包ませ、敵と味方の区別をはっきりさせ、事態の沈静化を図られたものの、黄巢が猛然と舞い戻ってきたために、官軍は引き上げざるを得なくなりまして。これが私の聞いている話です」

「なるほど、初めて合点が이었습니다」

弟の莠を殺したのは王処存の手の者だった。漠然と官軍とだけ思っていた



のが王処存という定かな名を持った。そのために、胸の内で漠としていたものが、憎悪の情としてはつきりとした形を持つようになる。王処存は忠義の士としていま語られた。王処存の兵士は略奪、強殺を目的として都に入ってきた。都の内であったことと、外に聞こえていることの間に大きな落差がある。ここは都の外、王処存や他の將軍たちが力を持つ場だ。憎悪を外に見せてはなるまい。

「用兵はなかなか難しいものです。一年半前のこの好機を逃したために、貴殿のように都におられた方々は、その後も長く、いまに至るまで苦しまなければならなくなつたのです。残念でなりません」

韋莊は感情を押し隠し、

「私ども長安の中にいた者は、目の前の暴虐から逃れるのに汲々とするばかり、刃の光の下をくぐり、血の海に足を滑らせ、一体何が起こっているのかわからぬままに、気がつくつと、あたりは死骸の山、都は破壊され、官軍は敗れて遠くに去つたとか、そこに望みは潰えたのでした。その思いの辛さは、

私の力ではとても言葉にできませんでした」

「詩を作る難しさは私も存じております。体験したことが辛ければ辛いほど、それを言葉にするのはより困難となりましょう。よくぞここまでの作品に仕上げられたものです。感服いたしました」

崔胤は、韋莊が都の外の事情に通じていない様子を見て、黄巢入城以降のあらましを教えてくれた。

皇帝は「お父ちゃん」の田令孜に連れられて成都に逃れた。田令孜の実の兄である陳敬瑄が待っていて、成都に置かれた臨時の朝廷の実権は田令孜、陳敬瑄の兄弟に握られた。崔胤は口を極めて田令孜を非難した。心ある人々は、皇帝が即位してから田令孜を嫌っていたが、崔胤の口舌は激烈だった。

近頃の長安の周辺の事情に及ぶと、頼りになりそうなのは王重栄（おうじゆうえい）一人だと崔胤は言った。王重栄は長安の東北東、黄河をはさんだ河中の地を鎮め、黄巢軍の侵入を防いだ。河中には有数の塩田があり、唐朝の重要な財源となっている。王重栄は黄巢軍を退けた功績によって河中節度使

に任命された。そこからの話が韋莊を驚かせた。

黄巢軍の中で最も勇猛であると官軍を恐れさせたのが朱温だった。朱温の名は伍七からも聞いていたが、崔胤が宋州碭山午溝里の朱温と言ったことから、揚州のあの裸男であるのが確かとなった。朱温は王重栄を撃ち破れぬと見るや唐側に寝返った。韋莊が長安を脱出したこの秋のことである。

「愚かなのは田令孜。黄巢第一の猛将の朱温が帰順してきて、後は賊が自壊するのを待っただけと、足を先に向けての喜びよう。朱温を優遇してやれば続々と降服してくると、お上より全忠(ぜんちゅう)の名を賜らせました。名前をくれてやれば、全忠の字の通りにお上に尽くしてくれると思っただけです。愚かな宦官どもは宮中のことしか知りません。お上の玉璽を押せば、紙に書かれています通りに天下は動くと思っただけ。その癖、何が書いてあるのか、一字たりとも奴等は読めぬのです」

崔胤は冷たく笑った。

あの裸男が全忠の名を皇帝から頂戴するとは、まさしく乱世の証しだ。

「貴殿も嘆かれるよう、宦官どもは宮中を蝕む白蟻。奴等を抹殺せねば朝廷は一向によくありません。それは誰にでもわかることであるのに、成都には宦官どもに媚びる恥知らずがうようよし、一方で、長安には、かつて朝廷に仕えながら、大盗賊から偽りの官位を嬉々として受けている大悪人どもが大勢います。聞けば、皮日休は哀れな末路を遂げたとか。あれだけの才がありながら、宦官どもに嫌われ都を出て放浪の身となったのには同情しましたが、どこで間違ったものか黄巢に仕えてしまい、あげくの果てにその黄巢に殺されたとは、身の処し方を誤ることこれに過ぎるものはありません。都におられる間に、貴殿は皮日休について何か聞いておられましたか」

韋莊はそ知らぬ顔で、都の人間なら誰でも知っているようなことを答えた。「皮日休のようになっては、いくら学問を積んでも意味がありません。その点、貴殿の詩は、かの白楽天の風諭の詩以来、数十年なかったものです。これこそが学問を修めた者の為すべきことと感服いたしました。民を思う熱き思いが伝わってまいります。私ばかりではありませんでしょう。『秦婦吟』を

聞けば、誰しもが長安でなお苦しむ民を救わんものと、きつと思ひ定めましよう」

それこそが秦婦の願うことである。『秦婦吟』が我が運命を変ると考えたのはあながち自負が過ぎるものでもなかったようだと思っていると、

「そうでした、伺っている間に一つ気になったのを思い出しました。これから大勢の人々が『秦婦吟』を耳にするようになった場合に、少々危惧されそうなことがあります、気を悪くなさらずに聞いていただけますでしょうか」  
「もとより未熟な詩、いかような御批判も有難く伺わせていただきます」  
そう言いながらも、心中穏やかでなくいると、崔胤は思いもよらぬところを指摘してきた。

内庫焼為錦繡灰

宮殿の庫は焼き尽くされて錦繡は灰となり

天街踏尽公卿骨

都大路で公卿の骨が踏まれているのです。

「私がそう思うのではありません。今後、詰まらぬ者が、天街において公卿の骨を踏みにじったのは誰なのかと、妙に勘ぐりはせぬかと、いらぬ心配を

致すのです。『秦婦吟』が優れた作であるだけに、やっかみから、愚にもつかぬあげつらいを言う者も出てきましたよ。この不穏な世の中、己の利のために人を蹴落とそうとする者は尽きませんでしょうから。そうは言っても、この程度のことですから、いやいや、お気にされるまでもありますまい」

崔胤は一段と目を細くして笑った。

黄巢は都に入ってさほど日の経たないころに、皇族および三品以上であった者を多数処刑した。梁に吊るされた貴人の死骸を思い出し、韋荘の背に冷たい汗が流れ下った。あの中に崔胤の縁者がいたのかも知れない。民衆は死骸に石を投げつけた。韋荘は投げなかったが、人々の気分もわからなくはなかった。崔胤に近い公卿の骨が、誰かによって、例えば目の前にいる韋荘によって踏まれていたと想像するのは不快であるに違いない。

「貴重な御教示まことにありがとうございます」

頭を下げ、動揺しかけた己の顔を隠した。

「世には人の才を妬む小人が多くおります。足を引つ張られないよう用心さ

れるに越したことはありません」

公卿の骨を指摘した崔胤の真意がどこにあるのか探り兼ねながらも礼を言うとうと、

「ところで、秦婦にとっては大きな朗報となりそうなこと、しかしもしかすると、黄巢以上の災禍を招き兼ねないことが近頃聞こえてまいりましたが、御存知でしょうか」

洛陽にきてから蘭がいろいろな話を聞き込んできてはいるが、崔胤の前では何も知らぬ風を決めると、蘭もまだ知っていないことを教えてくれた。さすがに大貴族だけあって世の情勢に通じている。

朱温の降服を契機に黄巢は自壊するとの田令孜の目算はずれた。長安回復の目途は立たず、朝廷は最後の秘策として、沙陀族の李克用（りこくよう）を呼ぶと決めたのだ。かつて徐州兵士の反乱が思わぬ広がりを見せたときに、朝廷は沙陀族の李国昌を呼んで鎮圧させた。李克用はその李国昌の息子である。

「この策を最初に考えたのは楊復光（よう ふくこう）。楊復光が王重栄どのに勧め、そして朝廷に献策したのです。貴殿は、楊復光を御存知でしょうか」

韋荘がこれも知らないと答えると、

「宦官です。ただ宦官にしては珍しく気骨があり、田令孜とは犬猿の仲。黄巢が長安に入ったころは、忠武節度使の周岌（しゅう きゅう）どののもとに監軍として滞在していました」

監軍は皇帝の代わりに節度使を監督するお目付け役。宦官が任命されるのが通例だ。

「そのころの黄巢は昇竜の勢い、周岌どのにはややもすると黄巢側に靡こうとする気色がありましたので、楊復光は強く諫め、背後から黄巢を撃つよう勧めました。周岌どのはぐずぐずと動こうとせず、楊復光は三千の兵をもらい受けて自ら長安救援に向かいました。三千の兵では、十万とも二十万とも言われる黄巢に適うはずはありませんから、近くの秦宗権（しん そうけん）殿に援兵を請いました。秦宗権どのも周岌どのと同じ、黄巢か唐朝かと日和見



を決め込んで色良い返事をしません。楊復光は秦宗權どのの陣営に乗り込み、いきなり指揮官を切り伏せ、六千の兵士を我がものとして連れていきました。かくて南東側の道から長安に向かい、鄧州において例の朱温と激突しました。初戦は勝ったものの、激しい反撃にあつて前進を阻まれ、そのまま膠着状態となりました。楊復光のこの奮闘を、田令孜も渋々ながら認め、周岌どのに代わつて忠武軍節度使に任せられ、王処存どのらが失敗した後、長安回復を目指す朝廷側の重要な柱となるに至りました。その楊復光が王重栄どののものとを訪れ、李克用の起用を勧めたのです。夷狄に頼る宦官の浅知恵はまことに恐ろしいもの。しかし、王重栄どのにもそれ以外の策はなく、成都の朝廷も認め、遠く李克用のところへ急使が走りました。もしかすると、いまごろ李克用は北の地を出ているかも知れません。沙陀が長安に向かえば、さしもの黄巢もひとたまりもありません。李克用はお上のために馳せ参じてひと仕事したら、さっと去っていきましようか。虎狼のような沙陀族の頭目、長安を目にすれば、それを我がものとしたくなるのは必定、黄巢に代わつて居

座ってしまふのではありませんか。沙陀を引き入れるのは愚策の中の愚策、国家に百年の禍根を残すものです。そうは思いませんか。所詮は楊復光は宦官。沙陀を呼ぶ前に為すべきことがあります。朝廷を正すことこそが肝要なのです。そもそも黄巢がなぜ反乱を起したのか、その根を絶てば、自ずと平和な世がきます。何をすればよいのか。貴殿もおわかりでしょう。宦官どもを一掃し、朝廷を本来の姿に戻すことです」

崔胤の話は熱を帯び、

「もしもお上の信任を頂けるようになったならば、何はさて置いても、宮廷に単食う宦官どもを一人残らず誅殺してみせます。それが唐を救う最も近道です。断じて沙陀を呼ぶことなどではないのです。貴殿もそうは思いませんぬか」

拳をぶるぶると震わせた。宦官の流す害毒はひどいものだ。それにしても崔胤の尋常ではない様子に、

「私などは宮廷のことまでは何も存じませんので」

あくまでも知らぬ風を通すと、

「奴等がどのようなことをしてきたのか、一つお聞かせいたしましょうか」  
崔胤は、父の崔慎由の身に降りかかったある事件を話してくれた。

それは四十年以上も昔、崔慎由が宰相になる以前、学問上のことなど皇帝の御下問に答えるのが役目の翰林学士の職にあったときのこと。不意の御用に備え、順番で宮中に泊まる当番の夜、宦官が「急ぎお越しいただきたい」と崔慎由を呼んだ。奥まった部屋に連れていかれると、宦官の仇士良(きゅうしりょう)が待っていた。当時、朝廷の実権はこの仇士良の手の内にあった。皇帝はそれを快く思わず、宰相とともに宦官を挫く策を秘かに練りつつあった。仇士良は崔慎由に筆を持たせ、「詔を書け」と言った。「この夜更けにいかなる詔でしょうか」。「国家の大事だ。お上はずっと病気である。即位されてより、政令は出鱈目、このままでは人民を苦しませるだけだ。皇太后さまにお願いし、新しい皇帝を立てることにした。その詔書だ」。崔慎由は筆を置き、「お上の御高明の徳は天下に知られております。かようなことを軽々に為

すべきでしょうか。某には親族が千人、兄弟、従兄弟だけでも二百人おりません。その一族を覆滅させる真似はできません。死を賜つても従えませぬ」。崔氏千人の言が仇士良をひるませた。崔慎由は決然と、「この上、強要されれば、この腕を折る他はありません」。「わかった、それならそれでよい」。仇士良は薄ら笑いを浮かべて立ち上がると、「よいものを見せて進ぜよう」。部屋の奥に垂れ下がる帳を引き上げた。崔慎由は驚愕した。暗がりの中に当の皇帝が座っていた。仇士良は顎でしゃくり、「あれが皇帝の位から落ちかかっている男だ」。仇士良は皇帝の過失を数え出した。一つ挙げるたびに、「その通りだな」と、皇帝に言い放った。皇帝が同意すると、次の罪を挙げた。「これでも気は変らぬか」。崔慎由は同じ返事を繰り返した。仇士良はいまいまし氣に鼻を鳴らし、皇帝を指差し、「この学士どのが書かなかったおかげで、今晚のところは命拾いしたようだ。だがな、いつまでもそこに座っていられると思うなよ」。崔慎由は追い払われ、「今夜のことを少しでも漏らしたら、一族は誰も生きていられぬと覚悟しろ」と脅された。その後、皇帝は破れかぶれの反

撃に出て、宰相以下の主だった者千余人が、宦官の率いる神策軍の手にかかって惨殺された。崔慎由はこの夜の出来事をずっと後になって幼い崔胤にだけ語った。

「宦官とはこんな連中です。天がいつまでも奴等を許しておくはずがありません。お上がお呼びくださるなら、一人残らず宦官どもを誅殺してみせます。そのときがきましたら、貴殿ももちろん力を貸してくださいませな」

韋荘は同意した。崔胤は喜び、詩を聞かせてくれた謝礼だとして、食事を振る舞い、帰り際に衣服を与えてくれた。『秦婦吟』を繰り返し読みたいから書いてほしいと所望し、紙も墨も明日のうちに一式届けようとも言ってくれた。

道をゆく韋荘には崔胤の示してくれた好意を、素直には受け止められない思いがある。己は試されたのだろう。弟が抱えている荷は確かに有難いものだ。もし崔胤のあの細い目に、己が可であると認められたならば、これくらいではなかっただろう。

人通りの絶えた道を歩む韋荘の耳に、別れ際に崔胤が言ったことがよみがえってくる。

「せっかくこうしてお近づきになりましたが、私は間もなく洛陽を離れ、金陵に帰ります。今回、洛陽にまできてみたものの、時はまだ至らぬようです。宮中に出仕するのは当分先になりましょう。ここは長く居るべき場所ではありません。沙陀の李克用が黄巢を追い出して後に、貴殿が長安で御覧になったような、あるいはそれ以上の災厄がこの洛陽に降りかかるような気がしてなりません。この屋敷が姿を保っているのもあとわずかでしよう。貴殿はやつと長安を逃れたばかりでお気の毒ですが、早くにここを去るようお勧めします。もし金陵まで御一緒に下さるお気持ちがあれば、私の方はもう喜んで。楽しい旅になることでしょう」

韋荘は返事を濁した。崔胤はやや意外な面持ちだった。大貴族の崔胤のもとに飛び込めば何かとよいこともある。それはわかっているが、崔胤に使われる身にはなりたくない。こちらにも杜陵の韋氏の自負がある。韋荘のそ

うした思いが自ずと崔胤に伝わり、可と認められなかったのだろう。

「崔胤どのは良いお方ではないのでしようか」

劉瞻と比べて崔胤に失望したと言ったので、弟は訝しげに尋ねてくる。

「悪い人ではあるまい」

宦官に対する憎しみが度を越していたが、父親の体験したことを聞けば当然と言えよう。崔胤に取り立てて妙な点があつた訳ではない。『秦婦吟』を讀えてくれたし、こうして服を与えてくれ、金陵への同行も勧めてくれた。親切で大貴族らしい鷹揚なところがあつて思つても悪くはない。

「ではなぜ、あの方は恐ろしい人だと、おっしゃるのですか」

「どうしてだろうか。こちらが乞食当然の境遇に落ちて何事にも怖気づいてゐるから、あちらが恐ろしく見えるのだろうか。情けないことだ」

「崔胤どのとて大変なのではありませんか」

弟は意外なことを言う。

「崔氏は一族千人と言われていた。あの立派なお屋敷。金陵に帰るとおっし

やっておられたからにはあちらにもお屋敷があるのだろう。羨むべき御身分ではないかい」

「我らとて三百人でした。一朝にして消え、いまにして思えば、あればあつたで保つのは大変でした」

「我らの三百人は伍の家も范の家も皆ひつくるめての数。その勘定なら崔氏の場合は何千人にもなろう。比べようがない。だが、そなたの言う通り、この乱れゆく世に、大きな家を保つのは、人にはわからぬ御苦勞がおりだろ。それで、私のような者でも使えるか吟味されたのか」

「そうでしょうか」

「金陵行きを即座に応じていれば、あの方の気持ちに適つただろうか。それよりも、あの方がほしがっていたものが掴めなかったのが、不満足の一因か。だから可もなく不可もなくの結果になったのか」

「何を掴みかけたのでしょうか」

崔胤の目を思い起こす。考え過ぎかも知れないが、あの目に探られていた。



「端的に言えば、私の弱みだ。あの方は掴みかけた。ぎゅっと握り締めるま  
では至らなかつた。握って、私を思うままに使いたかつたのだらう」

「何に使うのでしょうか」

「いつかるとき、例えば、宦官と闘うときに捨石にするとかだらう」

「恐ろしいことを」

「悪く取り過ぎているのかも知れない。そなたの言う通り、崔胤どのも大変  
なのだらう。だから、遠く深く思いを巡らしておられるのだらう。あの方の  
ようにしなければこれからの世は生きられまい。劉瞻さまのようなお方が、  
朝廷にお並びになることはもうないのだらう」

いま道を歩いていても、すぐその物陰に恐ろしい悪意が潜んでいるのか  
もわからない。弟とこのような話はしたくないが仕方がない。

角を曲がって間もなく蘭の店。商家が並ぶこの通りに、住人が戻ってきた  
のはほんのわずかだけ。外を歩くのも前方に小さな人影がたった一つ。考え  
事でもしているか、首を深く垂れて、向こうに去っていく。遠目に見て、な

よなよとした体つき、いまの洛陽を一人で大丈夫なのかと他人事ながら気にかかる。

重い荷を抱えよろよろしているこの兄弟の方が余ほど危なげかと、己の身に返って、店の前に立つ。

「どうにか無事に帰れた」

ほっと息をつく。陽はかなり傾き、影が地面に長い。

店の扉が半開きだ。無用心など、押し開ける。かつては客を迎える小者が控えていた小部屋に身を入れる。中は何もなく、暗がりには壁が立っているだけだ。

「重かったらう」

入りにくそうにしている弟の荷を持つとうとして、

「大丈夫です」

ここでも拒否される。

「これは持つから、戸をしっかき締めてくれないかい。こんな風に開いたま

までは、盗人がきても気づきやしない」

無理に取った荷はなかなか重い。よく辛抱したものだ。

荷をどこかに置こうかと、暗さに慣れぬ目で見回すと、奥に通じる扉の向こうから低く響いてくる人の声。何を言っているのかまではわからない。男の声だが蘭とは違う。扉が開いていたから客でもきているのか。楊胆の声のような気もする。普段は無口の胆も、己がいけないときには案外よくしゃべったりするのか。

藹が扉をがたがたと鳴らす。奥の声が止む。

どうやらまた間の悪いときに帰ってきてしまったらしい。韋荘は荷を抱えた足を止める。藹が扉をびったり閉ざし、小部屋は真っ暗になる。

奥から足音が近づいてきて、さっと開かれ、

「お帰りでございましたか」

窓より差しくる西日の光の中に陸氏が現れる。

「まあ大きなお荷物。あなたどうなさったのです、兄上にお持たせなどして」

「いや、藹には扉を閉めてもらっていたのです。ここに着くまでの間、ずつと持っていてくれて、幾度言っても渡してくれませんでした」

弟のために釈明をする。

「今日は従者なので、それらしくしていただきませんと」

「このようなものを頂戴するとは思っていません。藹には気の毒なことをしてしまつた。もしかして、中に誰かきているのですか」

陸氏の肩越しに見る。厨の方へと歩いていく彩霞の背がある。三人の子が後に従う。彩霞は手に鏡のようなものを握っている。

「いえ、私どもだけでございます」

陸氏は荷に手をかけると、ひよいと持ち上げ、

「何でございましょうか」

「上等な衣類を頂戴しました」

「それは有難いことでございます」

陸氏は軽々と次の間へと運び、壁一面に設けられた棚の一隅に荷を置く。

部屋の中央の卓に蘭がいて、長い髭をしごきつつ、こちらを見ている。その向かいの床に、胆が背を斜めにしたいつもの姿勢でしゃがんでいる。顔は見えない。何かあった気配だ。あの声はやはり胆だったのだろう。

「お湯でもわかしてまいりますので、どうぞそこにお座りになってください」

陸氏はさりげなく言い、厨に向かつていく。

胆がむっくり立ち、ついていこうとする。

「いましばらくそこにいてくれませんか」

蘭が声をかける。胆は身を屈め、足を止める。蘭は窓辺を指差し、胆はためらいがちにその前に立つ。陸氏は振り返ってその様子を見てから、奥に入っていく。

窓は覆いはずされたまま。沈みつつある冬の陽が射し込んで、この部屋を明るくしている。胆の足先に、見慣れぬ黒い葛籠がある。

韋荘と弟が腰を下ろすと、

「洛陽はもうだめですな」

蘭はいつも人を驚かせるようにして話を始める。

「どうしたのだい」

「一昨日もらつてきた焼餅も今夜で終わり。明日は何もありませんな。これではいつまでもいられませんでしょう」

「確かにこの家には何も無い」

ちびちび食べてきた焼餅で、この家の食物は切れる。崔胤の家で二人だけが豪華な食事でありつけたのをすまないと感じる。

棚に目をやれば、ここには店で商うさまざまな品が置かれていたのだが、いまは崔胤にもらった荷が載っただけ。この棚だけではない、この店はみごとと言つていいほどにからっぽである。

洛陽の店は建物だけが残っていた。目につくところのものがなくなつていてもやむを得ないと思つてはいたが、床下に隠した米や麦も、天井裏の隠し財産も、井戸の傍らに埋めておいた銀の蓄えも消えていた。店には誰もおら

ず、一月余り経つたいまも店の者の行方は知れない。

それでも、建物があるのは幸運である。狐潭の小屋に比べたら何倍も広い。

冬の寒さをしのげる屋根と壁がある。あちこちの壊れた家から廃材を拾い集め、楊胆が扉や窓、卓や椅子を作ってくれた。

棚の下の壁にはえぐられた痕がある。そこにも何か埋め込んであると思つたのか。蘭は何もなかったはずと首をかしげた。

「人さまからの施し物で、かろうじて命を繋いでいるだけですしな」

「あちこちから頂戴できるのはそなたの働きだ」

「今日のその崔胤どのからの頂きもの、これは兄貴のお手柄ですな。あちらはどうでしたかな」

蘭を少し驚かせてやろうと、

「崔胤どののは近く金陵に帰るおつもりらしい。洛陽はもうだめだと、ひどく不吉なことをおっしゃっておられた」

「ほう、金陵ですか。金陵の春もよろしいでしょうな。しかしですな、春は

何と言ってもここ東都の牡丹ですな。久しぶりにその牡丹に会えると期待し、淑娥ちゃんにも見せられると、風雅のためには飯がないのも我慢しようと思っていたのですが、肝心の牡丹がいけません。牡丹で知れた屋敷や寺を訪ねましたが、どこもそれどころではない。牡丹のない洛陽でこれ以上頑張っても仕方ない。崔どのも思いは同じなのでしような。で、金陵ですか。思いつきませんでしたな」

「金陵でなければどこがよいのかい」

「洛陽の牡丹がだめなら、当然次は、揚州の芍薬。芍薬に間に合うように揚州にいくのも一興ではありませんかな。揚州の芍薬を思い浮かべると、心が躍ってきませんか」

蘭はにやりと笑う。

「天下に名高い揚州の芍薬。見るのは結構だが、洛陽にはいられないと、事は決まっているのかい」

「牡丹がなければ洛陽はおしまい。長居は無用。考えるまでもありませんな」



蘭は腕組みをして、胆の方へと視線をちらりと向ける。

窓辺にうなだれて立つ胆、外からの明かりに包まれる体の輪郭だけ見ると楊爺に似ていて、胸が痛くなる。その胆に何か関わる可能性があるのか。

「もしかして留守中に誰かきたのかい」

「ほう、わかりますかな」

「黒い葛籠がそこにある」

「なるほど。これでは誰でもわかりますな。いま少し早く帰ってくれば会えましたのに。惜しかったですな」

「客は、何かい、ちよつとばかり、なよつとした男ではなかったかい」

「ほう、そこまでわかりますか」

「店に入る前に、遠くに消える後姿があった。それで言ってみた。私の知る人かい」

「もちろん知っていますとも。我らの血筋ですからな」

あの後ろ姿で思い当たる人物はない。

「いや、わからない」

「わからなくても無理はありませんかな。少なくとも会ったことはない。しかし、名は知っておりましょう。憐くんです」

「憐。一体誰だい」

「忘れてはいけませんな。いまや我が一族の貴重な生き残りの一人ですぞ。ほら、伯父上が洛陽に残した息子です」

「ああ、憐と言う名であったような気がしてきた」

韋愠の異母弟である。愠の母親が薛未亡人によっていびり出されたのに懲り、叔父はもう一人の妾を洛陽に隠し、莊園の者とは一切関わりを持たせなかった。叔父は妾の家で死に、棺に入って莊園に運ばれて帰ってきた。

「その憐くんがきましてな、出ていくだの死ぬだの、胆が大騒ぎ。それで洛陽は早く出ていくに限ると、まあ、そう言う訳ですな」

蘭が一人で合点したようにうなづく。

「どうもさっぱりわからん。憐くんがきて、どうして胆が」

胆に目を向けると、胆はするするとしゃがんで顔を膝の間に埋める。

「つまりですな、胆に父と兄のことを隠しておけなくなったと、そう言う訳なのですか」

蘭は大きくかぶりを振る。

「何だかわからぬが、都であったことなどもう関係ないだろう。胆は我らにとつて大事な人間だ。それでいいではないか」

「都で事がすんでいればまだしも、ここにも及んでいるのですな。端的に言えば、胆はですな、銀や肋とここ洛陽で会ったのです」

「本当かい」

胆はぼったり床に伏せる。

「申し訳ありません。二人の罪は、必ず、このあつしが償わせます」

「ますます何が何だかさっぱりわからない。頼むから順序立てて話してくださいかい」

胆は自分が言われたと思ったのか、いつそう身を低くひれ伏し、石のよう

に固まる。

蘭が軽く卓を叩き、

「要はですな、洛水の橋で、銀と肋が胆に切られたと、憐くんが教えてくれたのですな」

「傷を負ったのは胆だろう。銀と肋を胆が切ったとは、しかも憐くんが知らせにきてくれたとは、いよいよわからない」

「それだけわかっていて、まだ十分ではないのですかな」

蘭は床の胆を上からのぞきこむ。

蘭はやおら立ち、胆の脇に膝を付き、胆の体を抱くようにして起こし、

「父や兄を切ろうなどと考えてはならぬ。おまえの父と兄に罪はなかった。

悪かったのは、この俺とこの兄貴だ。銀と肋を苦しめた俺たちこそ、おまえに謝らなければならぬ」

韋荘も立ち、

「長安でのことは私一人に罪がある。私が間違わねば銀と肋は店を出ていか

ずにするだ。臆もあんな風には死なずにするだ。全ていけないのはこの私だ」  
「何を言われます。父と兄が悪いのでございます。あれほどの恥知らずはお  
りません」

蘭の腕から抜けて床にひれ伏そうとするのを蘭は許さず、

「まあ落ち着け。長安であったことを、兄貴の口から聞け。兄貴、すまない  
が話してやってくれませんか。憐くんがきてのことは、その後で話します  
ので」

「わかった」

韋荘は、隠していたことをありのままに話す。

胆は顔を歪める。

「やはり、父と兄、それに母が悪いのです。覆いようがございません。旦那  
さまにお悪いところはございません。父と兄を討ち漏らしたこと、返す返す  
も残念でなりません」

「おまえ、本当に二人を切ったのかい」

「刀を携えていれば、兄も父もその場で仕留めましたものを。兄より奪った刀で一太刀ずつ浴びせるのがやつとでございまして。情けないことです」

「臆もあのととき父と兄を捕らえると息巻いていましたな。親の罪を隠すのが子の務めだと、いくら説教しても聞く耳持たずで」

「臆が父と兄を成敗しておれば。何の働きもせずに無駄に死んで、臆は情けない弟です」

「臆はよく働いてくれた。店を守ろうと、最後まで戦ってくれた」

「あつしはここにいられません。父と母と兄を討って懲らしめるか、それができぬのなら、生きて甲斐ない命、絶つ他はございません」

胆は蘭の腕を振り払い、額をごっんごっんと床に叩きつける。血が飛び散る。

蘭と韋荘は左右から胆の背を抑え付ける。しばらくすると胆はぐったりと床に突つ伏す。

「どうしたことなのだい」

窓の外に人影が動く。彩霞であろうか。

蘭は胆の袖を尻の下に敷いて胡坐をかき、

「一言で言えばですな、此の度、慍くんが目出度くも鹿晏弘（ろく あんこう）の軍師に迎えられることになったと、知らせにきてくれたのですな」

蘭はまたも人を驚かせるようにものを言う。

「慍とはうちの慍のことかい。あれは、慍は、生きていたのかい」

「左様ですな」

慍に切られた足がびくりと震える。慍が死んだとは聞いていなかったから、生きていてもよい。

韋荘は冷静さを装い、ゆらりと椅子に座り、

「何かい、あの泣き虫の慍が今度は軍師なのかい。そう言えば、あれも兵法書くらいは読んでいたようだから、実際に役立つかどうかは別として、知識の持ち合わせくらいならぬものでもあるまい」

と、軽く笑う。

「愼くんはですな、馬大将（またいしょう）のところにしばらくやつかいになっていましてな、まあまあ結構な手柄を幾つか立てまして、それが鹿晏弘の耳に入ったようなのですな」

「その馬大将とか鹿晏弘とかいうのは一体誰なんだい」

話が飛び飛びで脈絡が一向に見えてこない。

「鹿晏弘とは宦官の楊復光が率いる忠武軍の八將軍の一人ですな。なかなか勇猛をもって聞こえる人物らしいですな」

「楊復光の忠武軍だったら、あの朱温が率いる賊軍と戦ったそうではないかい」

「ほう、兄貴はそんなことも御存知だったのですかな」

「裸ん坊の朱温なら縁がない訳でもない。それくらいのことには知っている」

「では、王建（おうけん）のことも聞きましたかな」

「王建とは誰なんだい」

「南山で仏蕃上人が聞かせてくださいましたでしょう、仏像を盗み損なった



「盗人、盜賊の王八ですな」

「それがどうかしたのかい」

「楊復光の忠武軍の八將軍の第一が鹿晏弘で、第二がその王建なのですな。盜賊王八の話は巷ではなかなか知られているようですな」

「朱温といい、王建といい、昨日までは名もないごろつきが、力づくでのしあがってくるのか。これが乱世というものなのだろうか」

「さればこそ、かつては宰相まで出した名家も莊園を失い、一族の主がこうして乞食当然の姿。その一方で、杖を食らわされて莊園を追い出された男が、軍師となつて出世の糸口を掴むと、まあ、話はうまくできているのですな。この上はどうですな、慍くんには諸葛孔明のような才が備わっていて、世の乱れを鎮め、韋家の名を大いに挙げてくれると期待しましょうかな。実際に、慍くん自身、憐くんに向かつてそのように豪語していたようですからな」

「あの泣き虫に何ができるものか」

「鹿晏弘に招かれるだけのものは、恐らくはあるのでしような」

「馬大将とかいう者のところで結構な手柄を立てたとは何のことなんだい。どうせろくでもないのだから」

「ごくささやかな例を挙げるとすな、虢州は韋家の莊園を滅ぼしたことでしようかな」

韋莊は両拳で卓を激しく叩いて立ち上がり、

「あれが何をしたのだ」

「まあまあ、そう興奮せずに」

「興奮せずにはいられない。慍の奴、一体何をしたのだ。あのときに杖で撃ち殺しておくべきだったか」

「順に話すとすな、馬大将というのは洛陽界限では昔から知られた盜賊、俺も一度くらいは顔を拝んでいます、まだ生きていたのが驚きのかなりの年齢のほうです。慍くんには以前から悪い遊び仲間がいましたから、どこかで関わりがあつたのでしょうか。うちの莊園を追い出され、あちこち転々とするうちに、そこどころがり込んだのでしよう。兄貴も覚えていきましょう、黄

巢が最初の洛陽攻略に失敗したとき、この店から高価な品ばかりが盗み出されたことがありますな、怪しいと感じてはいましたが、あれは愠くんが手引きしたのですな。で、憐くんですが、憐くんと愠くんはかなり前から知っていたらしく、盗賊の真似事などはやめて家にきなさい、家には父が授けてくれた財産があるから、貢奉を受ける気があるのなら援助もしようと、再三愠くんを勧めていたようです。愠くんは全く聞く耳を持たず、必ず莊園を滅ぼしてみせると息巻くばかりであったとか」

「あれは何かい、そこまで恨んでいたのかい」

「とりわけ叔母上と兄貴をでしょうな」

韋莊は嘆息する。

「どのような経緯があったのか、楊銀親子と愠くんがどこかで出会い、莊園を奪い取ることを計画し、馬大將に勧めたのですな。馬大將はなかなか男気のある親分で、愠くんが莊園を追い出された事情をかねてから聞いていましたからな、極悪の莊園主に鉄槌を下し、不義によって貯め込んだ財を貧民に

分け与えようと、その策に乗ったのですな」

「何かい、憐くんがそのような事情を教えてくださいましたのかい」

「元は慍くんが憐くんに告げたのですな。ともあれ、慍くんは不義といって嘘でない我が莊園の事情をよく知っていましたからな。役人どもに賄賂を贈って法を逃れ、お上に差し出すべき税を誤魔化してと、我等がしていたことは、必ずしも胸を張って世間に誇れることではありませんな」

蘭はにやりと笑う。

「それにしても、慍と楊銀たちが一緒になったとは」

「憐くんによれば、慍くんは叔母上のところの二人のぼんくら息子を、楊銀たちは楊爺を仲間にしようとしたらしいですな」

「楊爺も。まさかそんなことが」

「楊爺が悪巧みに乗るはずはありませんが、そここの詳細は憐くんも聞いておらず、とにかく一族同士の殺し合いの末に、慍くんは宿願を果たし、馬大將は莊園の財産をぶん取り、意気揚々と引き揚げていったのですな。で、

馬大将が皆に分け前を取らせる段になって、楊銀と肋が実は長安の店の使用人であると馬大将に耳打ちした者がいてすな、主人を裏切るとはとんでもないと、馬大将は烈火のごとくに怒り、褒美を与えるどころか、二人を咎で打って追い出してしまった。馬大将は、楊銀たちは慍くに仕える使用人で、その主人のために働いていると思っていたのですな。楊銀と肋は再び莊園に戻って残り物を漁ったがろくなものがないので、腹立ちまぎれに火を付け回って莊園を徹底的に破壊した。それから洛陽の店にもきて残っていたものを奪った。慍くんは、時々は二人に金を恵んでやったりしていたようですが、楊銀たちはどこで知ったのですかな、胆を仲間に引き入れて、洛陽にきている俺たちを襲うことを考えたのですな。この通り、俺たちが何も持っていないことまでは知らずにです。それで十日ほど前に、洛水の橋で胆を掴まえ、胆が言うことが聞かぬものだから斬り合いになってと、そう言う次第ですな」

「それはまことのことなのかい」

窓に射していた日は疾うに沈み、暗くなった部屋の床に、胆の背が動かぬ

しみのようだ。胆は何も言わず、蘭が、

「肋の方がかなりの大怪我をしましてな、銀が愠くんのところに薬代をせびりにいった。愠くんは軍師として迎えられるに当たってよい金をもらっていて、銀にいくらか恵んでやっただけでなく、愠くんのところへもこれまでの謝礼にと金を持っていった。愠くんに向かつて愠くんが得々と我が身の出世を話すうちに、それからそれへといまのような事情がわかったのです。愠くんは、『莊園の連中は一族同士、親兄弟同士、殺し合って死んでいくのだ』と、小気味よさそうに笑ったとか。銀に薬代をくれてやったときには、俺たちを仕留めたらもつと金を出すと、愠くんは言ったららしいですな。それを聞いて、愠くんはぞつとし、それでわざわざここにきて、危ないからすぐ店を出るようにと忠告してくれたのです。有難いことではありませんかな」

「そうなのか。愠くんは我々を救ってくれようとしたのか。愠くんはどのような人だったのかい」

「品の良い穏やかな人でしたな。我ら従兄弟の中で言うくと、莠くんにも最も似

ていますかな。その黒い葛籠は、慍くんが憐くんに渡したもので、中は莊園から持ち出されたとおぼしきもの。慍くんが謝礼と行って渡した金と合わせて、自分が受け取る訳にはいかないからと、そっくり持ってきてくれましたな。金の方は、俺だって受け取るいわれがありませんから、無理やり返しましたが、葛籠は叔母上や兄貴の父君を偲ぶ品々があったので、受け取ることにしました」

蘭は胆がじっと動かぬのを見定めてから、中腰になって葛籠を開き、

「暗くて見えませんが、兄貴が一番喜ぶのはたぶんこれでしょうな」

「ごそこそと中から取り出して韋莊の前の卓に置いたのは一冊の書物。手に取るが、窓の外もすでに暗く、文字は読み取れない。」

「わかりますかな。楮胤の棋譜の註解ですな」

そうと聞くと手の感触に覚えがある。

遠い昔の碁の名人の棋譜に莠が註を付けたものだ。これが原本で、長安にもう一冊あった写しは武大人に渡してそのままになっている。

「こればかりは記憶できず、残念に思っていました」

ずっと黙っていた藹が韋荘の脇に立っている。

韋荘は掌で書を撫ぜ、この紙の上を弟が筆を走らせたのかと思うと、涙が自然とこみ上げてくる。

「すまない」

藹と、死んだ莠に向かってつぶやく。

書を置き、伏したままの胆の前にひざまずき、

「すまない。この私が全ていけなかったのだ。慍をむごく扱っていなければ、莊園はこうはならなかった。謝ったところでどうにもならないのはわかっている」

莊園を滅ぼしたのが慍だと聞いたとき、激しい憎しみが湧いた。しかし、もとはと言えば、己が慍に憎しみを植えたのだ。莊園の主となる己の力を見せ付ける格好の標的として慍を選んだ。憎悪は悔恨に変わる。

胆が音もなく立ち上がる。黒い影がさっと動き、椅子が蹴飛ばされる。



「待て」

蘭が走る。二人が揉み合う。そのまま部屋を出て、人が転がり、蘭の呻き声が入り、外に通じる扉ががたと揺すられる。

奥より足音高く駆け、びしりと頬を撃つ音。

「春琴を悲しませて、どうするのですか」

陸氏の声に、

「お放しください。あつしはここにはいられません」

胆が張り上げる声に、

「お戻りなさい」

胆は陸氏と蘭に挟まれて連れ戻される。そのまま陸氏を先頭に皆で厨にく。

竈に火が燃え、その上で湯が湧き、綜と淑娥と春琴が怯えた顔で立っている。彩霞が外から入ってくる。

陸氏は楊胆を床に座らせる。その回りに他の者も座るように促し、

「湯を配っておくれでないかい」

陸氏は胆の腕を押さえたまま彩霞に言う。

「おまえも飲みなさい。少しは落ち着きましようから」

うなだれる胆の口元に腕を添え、陸氏が湯をすすらせる。

韋荘も湯を口に含む。熱いものが腹に入ると、陸氏の言う通り、気持ちの高ぶりがやや静まる。

「私から話をしたいことがあるのだが、よいでしょうか」

陸氏に尋ねる。

「胆は皆にとって大切な人間。春琴も含め、誰もが思うところを言うのでよろしかろうと思います。順番は兄上からでも、どなたからでも」

「ならば、あつしに言わせてください。臆はよい死に場所を得ました。恥ずかしいこの身をおめおめといつまでも生かしてはおけません。兄と父を討つて死ぬ他はないのでございます。ここにはいられません」

また立ち上がろうとするのを、陸氏が押さえつける。

「他の人が言うのを聞きなさい。それまでじっとしているのです」

胆はうずくまる。

「愠が莊園を滅ぼそうとするほどの深い恨みをどうして抱くようになったのか、それを知っておいてもらいたい。全てはこの私故だとわかるはずだ」

誰の応答も待たずに、韋莊は、愠を最初に杖で撃つたいききつから話し出す。そのころの莊園を知るのは、ここでは蘭と藹と彩霞だ。その後の莊園の変化から、愠を再び撃つに至ったことまでを言うには、彩霞の前では辛いが、その母についても話さなければならぬ。そして、楊銀と肋が長安の店の銀を持って出ていったことに及べば、洛陽に入る前の晩に壊れた寺の本堂で話したことにつながる。

「巡り巡って結局のところ、私のために莊園が滅んだとわかっただろう。胆をこのように苦しめているのは私だ。愠のことをよく考えてやり、長安で時期を誤らなければ、莊園はいまもかつてのままであつただろう。多くの者を死なせ、現在の辛い日々を皆に強いているのは、この私だ。皆に謝らねばな

らない」

蘭は韋莊の腕を掴み、

「兄貴ばかりに謝らせる訳にはいきませんな。慍くんを杖で撃つと決めたのは俺も一緒。伍武の爺さんと范執事と、もう一人、慍くんも入れた方が示しがつくと、俺が兄貴に勧めたのではなかったですか。楊銀と肋だって、胆を目の前にして言うのは悪いが、気を付けるようにと、楊爺には最初から注意されていた。俺がうかつすぎたのですな。長安から逃げる機会を失い、楊銀と肋にあのようなことをさせたのは、要するに俺の失敗。謝らねばならぬのは俺の方ですな」

胆がもぞもぞと動き、

「旦那さまお二人がお下げになる頭の先にこの身を置けるあつしではありません。皆さまをお守りするようにと、義父から申し付かったことは、ほぼ果たし終わりました。洛陽に着きましてもう役目はなく、いつでも出ていかねばと思っていました。父と兄のことが知れた以上、ここにはどうあつてもい

られません」

立とうとする胆の腕を陸氏は離さず、

「春琴を置き去りにするのですか」

「置いていくのがまずければ、連れていき、恥知らずの男の娘、川へなりとも投げ捨てましょう」

「春琴は楊爺の生まれ変わりです。そなたの勝手は許されません。まして、いまは彩霞さんが我が子のように可愛がっているのです。彩霞さんまで悲しませるおつもりですか」

「しかし」

胆は言葉に詰まる。

「まあ、座るのですな」

蘭は胆の肩を抑える。

「兄貴、これでわかりましたかな、洛陽はだめだと俺が言ったのが。揚州の芍薬を見にいくしかありませんでしょう」

「そのようだ。ここを去るのが一番なのだろう」

「しかしですな、兄貴も俺も、間違った、失敗したといま謝ったばかり。その二人がよいと思っても、また間違えるだけでしょ。ここはどうですか、姐さんも皆が思うことを言うのがよいとお考えですから、春琴ちゃんと淑娥ちゃんと綜くんの三人に、どう思うかを聞いてみてはいかがですか」

「愚かな私どもの子にそのような判断ができませんか」

「子どもの純真な心こそが正しい道を見分けましょう。淑娥ちゃんは今度の正月がくると幾つになるのですか」

「九歳です」

「それなら十分。淑娥ちゃんに最初にお尋ねするとしましょうか」

淑娥は身を引いて緊張した顔になる。

「難しく考えずにですな、この胆に、これからも一緒にいてもらいたいかどうか、それを正直に言ってもらえませんか」

淑娥は父と母を交互に見る。

「自分の思ったことをお言いなさい」

陸氏の声に、

「ずっと一緒にいてほしいです。あたしは胆おじさんが大好きですから」

すかさず綜も、

「僕も妹と同じです。胆おじさんとは、一年半の間、あの小屋ですっと一緒でした。おじさんがいなかったら、僕ら家族だけでは生きていられなかったと思います。もしもここからおじさんがどうしても出ていくと言うのなら、僕はついていきます。母も妹も連れていきます。胆おじさんがいてくれたからこれまで安心して暮らしていられました。僕は男ですが、母や妹を、いまの僕はまだ守ることができません。父上はおじさんほど強くありません。伯父上や蘭のおじさんは、頼りにしてよいものやらまだ良くわかりません。だから、胆おじさんをお願いするのです、ここに一緒にいて母と妹を守ってください」と

綜は飛び出して胆の膝にしがみつく。胆は、体を揺する綜を見ないように

頭を斜めに曲げる。

蘭が韋荘の耳元でささやく。

「前にも似たようなことがありましたな。俺たちはいつも信用されないようですな」

楊臆に向かって羨の息子が同じようなことを言った。

陸氏が静かに言う。

「これでよろしいでしょう」

「そうですね。淑娥ちゃんと綜くんの二人に異論を唱える者はいませんでしような」

蘭がぐるっと皆を顔を見ていくと、春琴がこつくりとうなずく。

「では決まりですな」

「我々は全員でできるだけ早くにここを発って揚州に向かう」

韋荘が言うのと、胆は、

「あつしは残ります。父と兄を討たねば、この心がすみません」



「もう忘れるのですな。そのためにも洛陽を出るのがよい」

「忘れられるものではありません。義父への申し訳も立ちません」

「楊爺に言われたことは果たし終わりたいまお言いではありませんか」

陸氏が言う。

「これからのことを考えるのですな。春琴は楊爺の生まれ変わりだ。楊爺のことを思うのなら、春琴の父親として、これから何ができるのかを考えた方がよくはありませんかな。うまい結着を付けるなど、楊爺でさえできないことだった。そなたには無理ですな」

韋荘は驚き、

「楊爺でさえ付けられなかった結着とは何のことだい」

「おっと、そう言いましたかな。思い付きが口から出たまで。何だかふとそのような気がしたのですかな。つまり、莊園の滅んだ日に、楊爺はけりを付けようとしたのではないかと」

「けりをかい」

韋莊がつぶやくと、陸氏は胆の膝を叩き、

「あの日のことで、まだ話していかないことがあるのではないのかい。楊駁があの日、何をしようとしていたのか、知りたいとずっと思っていました」

「あつしには隠していることなどございませぬ」

「そう。疑ったりしてすまなかつた」

陸氏にはわかになさな声になる。

「いや、俺が余計なことを言ってしまったな。すでに結着はついたのです。莊園から離れてここ洛陽にきて、今度は洛陽を出て揚州に行く。それでもう過去は振り返らぬことにしませんかな。兄貴、それでよいですか」

「しかし、元はと言えば悪いのはこの私。昔のことだからと知らん顔はできない」

「いつまでも同じことを。もうお止めください」

彩霞の低い声が響き、皆が凍り付く。

しばしの沈黙を破って、蘭はやおら立ち上がり、

「さあさあ、明日からは次の旅の用意を始めねばなりません。古い話はこれで終わりです。お食事といたしましょう。よろしいですか」

厨の棚をのぞき、

「焼餅の最後の残りがありません」

陸氏は胆の腕を軽く叩き、これでよしと確かめてから立ち、焼餅を遠火であぶり始める。

「私と藹は、崔胤どのお屋敷で御馳走を頂戴してきました。湯があれば十分です」

「兄上と二人だけで、皆には悪いと思ったのですが、ひと月分くらいも食べてきてしまいました」

「うらやましいですな。袂に肉切れの一枚くらい、忍ばせてきてくれなかったのですかな。それにしても気がききませんな。衣などではなく、米をもらってきてほしかったですな。絹をしゃぶつても腹は膨れません。今夜のところは、兄貴と藹くんが遠慮してくれて、一人の分け前がいくらか増えるので

よしとしますかな。焼餅の焼き直しでも、食べるのは有難い。かつて鶯鳥一羽で五十万緡を稼いでいたころの俺は、食べ物の本当の有難さがわかっていますませんでしたな。あのときの鳥を売らずに持っていけば、いまなら喜んで食ってやるのに、惜しいことをしましたな。五十万緡では安すぎましたな」

蘭は笑いながら、鶯鳥の値が跳ね上がった騒動の顛末を皆に聞かせる。最後に売り逃げした値は五十万緡には至らなかつたものの、そのころの都では、今から思うととんでもなくおかしいことが平気で行われていたのだ。

温め直された焼餅が配られる。小さく切って食べ延ばしてきたものもこれで終わりだ。

「隣くんがどこに住んでいるのか、訊いたのかい。会ってみたいものだ」

「尋ねましたが、教えてくれませんでしたな。母君がおられ、莊園の者とは接触しないとの伯父上の言いつけを守っておられるのでしょうか」

「羨に似ているという隣くん、顔を見ておきたかった」

「母君を連れてじきに洛陽を出て、遠い山中に隠れ、静かに孝養を尽くすつ

もりであると言っていましたな」

「ますますゆかしい人ではないかい」

「俺たちには孝養を尽くすべき人がもうおりませんな。どこへなりとも、風のままに流れていくだけ」

「風は揚州へと吹いているのかい」

「どうですか。金陵へかも知れません。姐さんは、陸の家に帰りたいたとは思いませんですか」

「虢州に参りましたときから心を決めております。祖父の所縁の寺にたどり着けましたのは、韋家に尽くせとの祖父の教えでありましょう。もしも他に行くあてがないのでしたら、陸の家にも喜んで御案内させていただきますが、揚州という立派な行き先があるので、夫につき従うだけでございます」

「揚州が果たして立派な行き先かどうか。聞くところでは、いまのところは洛陽よりはましのようにすな」

揚州にいくと決まりはしたが、いまここで食べるものもない状態なのに、

揚州にまでいけるのか。長安を出たときは、ともかく楊爺のもとで休みたいと考えていた。洛陽に入る前には、ささやかな希望を抱いた。店が元のままであるのなら、落ち着いた暮らしを取り戻せ、『秦婦吟』を人々に聞いてもらうことで、唐の再興にも何かしら貢献できるようにするのはと思った。店は駄目だったが、崔胤の招きを受けたことで、『秦婦吟』が役立ちそうに思えた。それも束の間、世の中の動きは早く、我が身が引き起こした難しさもあって、洛陽にいられなくなった。

揚州にいくよりも、あるいは崔胤の誘いに乗った方がよくはないか。食べ物への心配はなく、道中の安全も確保できるだろう。崔胤は元の宰相の息子だ。崔胤に目をかけてもらえるのは名誉と思つていい。崔胤が偉くなれば、己にも朝廷に並び立つ日がくるかも知れない。揚州は嫋嫋の思い出が残る地だ。そこにいけば悔恨に責められるようになるのではないか。崔胤にいいように使われる身にはなりたくない。

慍は復讐を遂げ、出世の糸口をつかんだと言う。あれは優れた男だったの

か。卑劣だがうまく時流に乗っただけなのか。愠はどれほどの者なのか。愠への憎しみは消えていない。あれに受けた傷跡がある。杖の下でひいひい泣いていた弱虫に引けを取るはずがない。

そのように考えている己に気づき、慄然とする。

憎しみに身を焦がすのはおぞましい。今日は二つの憎しみが形をなした。莠たちを殺した王処存と、莊園を滅ぼした愠。二つとも封じ込めるべきだ。

ささやかな食事を終え、夜の冷え込みとともに、自ずと竈の火へと近づいていく。蘭が木切れをくべる。ここでの救いは薪となるものが簡単に集められることだ。無人の廢屋から失敬してくればよい。

「やはり藹くんに頼みましようかな。さつきから思い出そうとしているのですが、どうしても思い出せなくて。ほれ、『孟子』のどこかに、『此れをこれ大丈夫と謂う』そんな句がなかったですか。あそここのところ、いま聞いてみたい気がしていますな、一つ思い出してくれませんか」

首をかしげる藹よりも先に莊が思い出す。

「さすがは兄貴、貢奉を受ける人だけのことはありますな」

「居天下之広居、そこらあたりからでよいのかい」

韋荘が出だしの部分を言うと、藹はうなずき、いつも通り暢びやかに朗誦する。

居天下之広居 広々とした天下において

立天下之正位 天下の正しい位置に立って

行天下之大道 天下の大いなる道を実践する。

得志与民由之 志を得れば民とともに居て

不得志独行其道 志を得なければ一人その道を守る。

富貴不能淫 富貴にも乱されず

貧賤不能移 貧賤にも変らず

威武不能屈 威武にも曲げられない。

此之謂大丈夫 これこそを立派な人間と言う。

「こうでした、こうでしたな。富貴にも乱されず、貧賤にも変らず」



蘭はしきりにうなずき、自身で初めから朗誦する。

蘭は何を考えているのか。南山の誓い以来、己のために多くをしてくれた。

蘭がいたからいまここに生きている己がある。揚州には蘭の店がある。いまも残っていれば、そこから蘭は新たなことを始めるだろう。蘭には好きなことをやってもらいたい。蘭に頼らずに生きていけるようにならなければいけない。

炎が霞んでくる。

蘭は立ち、足を強く踏んで、詠いおさめ、

「綜くと淑娥ちゃんは、この意味がわかりますかな。俺の生半可な知識で解説するよりは、兄貴にきちんと話していただくのがよいのですが、やっていただけませんか」

「私にはこれを説く資格はない」

この前、光武帝について説いた。今度は孟子だ。富貴に淫され、貧賤に移され、威武に屈する己は、孟子の言う「大丈夫」から程遠い。

「俺も資格はない。ここにいる面々で、どうですか、大丈夫と言えそうなのは、まずは姐さんですか。それに彩霞ちゃん。男では、胆だけですか」

一人火から遠い暗がりにいる胆は、

「あつしは、大悪人の倅であり弟です」

「それは止めですな。兄貴も、いままでのことはよしにしてすな、ここは一つ、威勢よく孟子の話をしていただけませんか」

「蘭くんは許してくれぬようだ」

いまから千年以上も昔だ。長い戦乱の時代だった。それはいまと比べてどうだったのだろう。諸侯間の争いはいつ終わるとも知れなかった。孟子は、何百年か昔にはあったと伝えられる平和な世を、どうすれば取り戻せるかと考え、評判のよい王の名を聞くと、正しい政治のあり方を説きに行った。多くの王は会ってくれず、稀に耳を傾けてくれる王がいても、ただ聞くだけで終わり、実践は別だった。孟子が説くのは迂遠過ぎて、当時の世において行

われ得るものとして受け止めてもらえなかつた。

ある者が、「公孫衍（こうそん げん）、張儀（ちやう ぎ）のような者こそが、天下を動かす大丈夫なのではありませんか」と、孟子に言った。役に立たないぬことしか言わぬ孟子など大丈夫に入らないと言う訳だ。公孫衍も張儀も諸国を巡り歩く遊説家で、説くところは孟子と全く異なり、諸侯の間に策謀を張り巡らして、同盟關係を作ったり、あるいは壊したりしていた。二人の言動によつては諸侯間の戦争にもなつた。たつた一声で天下の諸侯を驚かせる公孫衍、張儀こそが大丈夫なのではないかと言われて、孟子はそんな連中は語るに足りぬと退けた。「では、真の大丈夫とは何であるのか」との問いに、いま藹が朗誦したように高らかに謳つた。裏でこせこせと画策せず、広々とした天下の、誰からも見える正しい位置に立ち、天下の大きいなる道を実践し、志を得て政治の要枢に立つたときには民衆と一緒に道を行い、もし志を得ないときには一人でその道を守る。富貴にも乱されず、貧賤にも変らず、威武にも曲げられない、これこそが立派な人間、大丈夫である。

「孟子のこの言葉を唱えると、気持ち晴れ晴れとしていきませんか。さあ、藹くんとともに、皆も声を合わせませんか」

綜と淑娥、それに蘭と陸氏、とまどいながらも彩霞と胆、口を合わせるだけの春琴とともに、韋荘は孟子の言葉を唱える。

「おまえたちは幸せ者ですな。ここに立派な父親と伯父がいる。このような父親と伯父がいることがどれほどの幸せであるのか、おまえたちはまだ十分にはわかっておらぬのでしょうか。この広い天下に、おまえたち二人だけあるかも知れない。そうは思いませんか」

蘭は綜と淑娥の肩に手を置く。

「そうだと思います」

綜は答える。淑娥もうなずく。

韋荘はその後ろに立ち、

「私はともかく、藹は天下にまたとない人間だ。かつて宰相をされた劉瞻さまは藹の書をひと目見て全てわかってくださった。そなたたちの父の純朴

さは、富貴も淫すあたわず、貧賤も移すあたわず、威武も屈するあたわず、決して変ることがないものだ」

「私の字など子どもが悪戯書きです。兄上の名が世に現れ出ぬのをいつも残念に思っています。都があんなことになってしまつて、貢拳で兄上を落とした者たちは後悔しているに違いありません」

昔も藹はそのようなことを言っていた。二十年も前に韋莊という人物が落第したことなど世間に覚えている人はいない。

蘭は笑い、

「この兄弟の仲のよさはまことに羨むべきですな。ともかくですな、この仲のよい兄弟とともに、芍薬の咲き乱れる揚州の晩春に会いにいくとしますかな。あちらでは佳き春が待つておりましようからな」

秦婦が『秦婦吟』を歌った中和三年の春が間もなくくる。己の名はどうでも良い。『秦婦吟』だけは人々に知られるようになってほしい。

願君挙棹東復東

あなたにお願いするのは、棹を挙げて東へ東へと向

かい、

詠此長歌献相公　この長い歌を詠じて、お偉い方に献じることです。

『秦婦吟』の結びをこのようにした。長安奪回のために朝廷は李克用を呼んだ。それで唐に平和が戻るものではないと崔胤は言った。

ならば、『秦婦吟』の役目がまだあるのではないか。揚州で誰かに献じ、それが何かの希望を繋ぐことになりはしないか。孟子の言う大丈夫には到底なれるものではない。しかし、ささやかな希望を『秦婦吟』のうちに見出した  
いと考える。

**中**和三（八八三）年の初夏、窓の外には溢れる緑。

揺れる柳の枝の下より燕が去り、また枝の下へと飛んでくる。時折軟らかな風が、頬のあたりにまで、水辺の香りを運んでくる。

ふと気づいて、目の縁の涙を拭う。いつの間にか泣いていたようだ。はか

ない思いは、その跡を辿れないところへと姿を消す。

卓の上にあるのは酒とちよつとした料理。先ほどから一人、飲むのでもなく、食べるのでもなく、何をすることもなくここにいます。身を起こし、窓の外の陽光の眩しさに目を細める。このような時をここで過ごしているのが信じ難い。

ここは揚州。いま消えた思いはどこにあったのか。長安か虢州か洛陽か。半年ほど前の秋には、長安で土にまみれて穴を掘っていた。秋の終わりに、焼き尽くされた莊園の跡に立った。荒涼とした冬の道を洛陽へとたどり、何もかもなくなった店で、人様が恵んでくれる物だけが頼りの日々を送った。最も高価なものを贈ってくれたのが崔胤だった。上等の衣類の次に筆や墨や紙を届けてくれ、韋諷が『秦婦吟』を書いて渡すと、銀子までくれた。韋憐は二度と訪ねてこなかったが、後で人を使って麦や粟を届けてくれた。黒葛箆に入っていた銀子を蘭が返した換わりであるらしかった。二人から頂戴したものは旅に出るのに大いに役立った。

洛陽からの道のりは容易ならざるものと覚悟はしていた。かつて蘭とともに旅をした頃とまるで様子が違っていた。当ても徐州兵士の反乱がおさまったばかり、各所に戦乱の爪痕が顕わだった。今回目にしたものと比べると、あれなどはまだ何でもなかった。あのときには、人々の平穏な暮らしが昨日までであったことが見え、だからこそ爪痕が顕わだった。今回は、爪痕は探し求めなければ目に入ってこなかった。

崔胤の銀子で驢馬を手に入れて洛陽を発ち、黄河のつくる広大な平野に出ると、見渡す限りどこにも人煙は立ち昇らず、ここをこれから旅するのかと足が竦んだ。原野をゆく人の姿が稀にあれば、人の命を狙っていると思わねばならなかった。命を奪われないためには、先に相手を殺すか、遠く避けるしかない。風任せの旅ではなく、風さえもこないところに身を隠して移動した。

かつて黄巢が洛陽から華々しく長安へと進撃していった頃、各地の有力者は続々と黄巢に靡き、唐への忠節を守ろうとした人々や町が襲撃された。黄



巢が長安に入って行き詰りを見せると、唐側に戻る者が出て争いが複雑化し、そのうち黄巢だろうが唐だろうがお構いなしに、力のある者がいない者から奪い取るだけとなった。生きるために奪い、奪うために殺した。殺戮の嵐は幾度も行き来し、村も町も消え、代わって自然が旺盛な活力を誇った。韋荘たちの旅はあたかも春が深まりゆく時期へとさしかかり、澎湃として草や虫が大地に湧き出てきていた。

唯一ほっとできたのが汴州（べんしゅう）だった。人々の信仰を集める相国寺は元の姿を保ち、貫休と出会った境内にあのころに似た市が立っていた。むろん昔の賑やかさはなかった。それでも普通の暮らしが一応はそこにあり、屋台で温かく旨いものが食えた。

その先が悲惨だった。見晴らしのきく官道、あるいは運河をいこうものなら、一日だって無事でいられない。群盗が横行し、いつ戦に巻き込まれるかわからない。蘭の直観に頼って、西がましと見れば西にいき、軍馬の響きが聞こえれば東に逃げ、北に戻ってはまた南に進み、野や沼を彷徨い、どうに

かこうにか揚州に到着したときには、この旅の目的としていた芍薬の盛りにかろうじて間に合う晩春になっていた。

揚州城の門をくぐったとき、我が身が本当にここにあるのが疑われた。門より内側は昔と変わっていなかった。そのようなはずはないと思えた。己は疾うに死んで、死者として、遠い昔の揚州か、黄泉の世界の揚州にきているのではないかと、妙なことを考えた。現実には生きている己が、何も変らぬ揚州にいるのが、言いようもなく異様に感じられた。

そのときと同じ感覚が、窓の外を眺めているいまもある。これがあり得ることなのか。己は確かに長安で穴を掘っていた。己は確かに雨に打たれつつ冬の坂道で車を押していた。己は確かに沼地に伏せて賊が去り行くのを待っていた。しかし、ここで初夏の気だるい午後を過ごしているのは確かに己なのだろうか。己はあの穴で、あの坂で、あるいはあの沼で死んでいて、ここにいると思っているのは実は死者の夢ではないのか。

揚州は元のままだ。揚州の初夏は昔からこの通りだ。これが当たり前の揚

州である。酒を注いで呑めば喉がごくりと鳴り、味もする。己は生きているに違いない。これが普通のこととしてここにある。それが異様と思える。

揚州に到着した日に、街に入ると、理不尽であるとも思え、怒りさえ湧いた。なぜ揚州は元のままなのか。そのようなはずはない。どうして往来の人々は昔と同じなのか。そうであってよいはずがない。己が怒っていることに気づき、戦慄が走った。揚州も他の町と同じだったならば、それをごく普通と見て、怒ったりはしなかっただろう。そう思っている己を嫌悪した。

いまも同じだ。長安には、穴を掘っていた己のような人々がいまもいる。それなのに、己はこうして初夏の陽を眺めている。酒も料理もある。あえて飲まずとも、あえて食わずとも、飢えも渴きもない。このようなことが許されるのか。怒りは己自身に向かう。

己も少しばかり休ませてもらってよいのではないか。そう思って、己の怒りを静めようとする。あれだけの苦勞をしたのだ、ほんのひとときの安らぎなら、許されるのではないか。

異様と感じられるのは、あるいは、これが長く続かぬものであるからなのか。今日はあつても明日にはない、だから、今日がすでに異様と感じられるのか。

この安らぎも、この揚州も、このままであつてほしい。ここだけではない、世の中に、これ以上のことは何もあつてほしくない。来ては去る燕は、世の乱れと関わりなく生きている。人の暮らしはなぜそうではないのか。揚州も間もなく他所と同じになるのか。

揚州の店は元のままだった。蘭を先頭に、夕陽の差し込む店にぬつと入っていった。范完と伍伝が床から跳ねるように立ち、互いにものを言うこともできぬまま、顔と顔を見合わせた。蘭が中へと歩み、范完の脇にあった帳簿を手に取り、ぱらぱらと繰って、「手堅くやっていますな」と言った。帳簿の何箇所かを指差して尋ね、范完は答えるうちに声を上げて泣き出した。

范完と伍伝は店をよく守っていた。黄巢が長江を北に渡ったとき、大軍を擁する高駢は揚州周辺の防備をひたすら固め、黄巢が北上するのを静観した。

揚州は安泰でも、洛陽、長安からは悪い報せが聞こえ、周辺各地はどこも戦乱に見舞われた。一年ばかり前、伍伝は思い切って洛陽の様子を見にいった。命の危険をかくぐって店にまでたどり着くと、誰もおらず、何もなかった。揚州の店は無事である旨を壁に大書して引き上げた。洛陽から西の道は完全に塞がっていた。伍伝が書いたのは棚の下、その文字を削るためにそこが抉られていたのだった。世の中が少しでも落ち着いてきたら、再び洛陽にいき、可能なら虢州へも、さらには長安へもいこうと時を待っていたところに、蘭らが店に入ってきたのだった。

伍伝と范完に莊園の滅亡を告げ、伍家も范家も生きているとわかる者は一人もいないと告げるのは辛かった。二人は悲しむよりもむしろ、家の者たちが莊園を守る力になれなかったのを詫びた。伍伝の息子の伍七に話が及ぶと、「賊の手下にされた倅が生きていると願うのはきつと間違っていますよ」と、悲しげに言った。「あの裸の暴れん坊の朱温の部下になっていたようだから、朱温はいまや官軍の立派な大將軍、伍七も大した出世を遂げているかも

知れませんか」と蘭は慰めた。范完は驚き、「あの裸の朱温は、いえ朱全忠さまは、節度使になられて、近々汴州にこられると聞いております。ひよっとしたら伍七も一緒だろうか」。伍伝はやや嬉しそうな顔に変わった。

朱全忠のことは実際に揚州でちよつとした評判になっていた。朱全忠は、近頃、宣武節度使に任命され、沙陀族の李克用が長安を回復させた後に、汴州に赴くことになっていると、町で噂されていた。「あの暴れん坊が節度使とは、恐れ入った大出世ですな。ただどうですか、汴州にきてから苦勞するでしょうな」。蘭がそのように言ったのは、汴州の相国寺は以前のままで、周囲は手の施しようのない混乱状態にあるからだ。

揚州は今日も平穩無事。朱全忠を初めて見た橋の袂の賑わいも変わらず、今朝、蘭と二人でそこを通った。橋の先の仏蕃の寺を訪ねたのだ。寺僧に、潼関で仏蕃と出会ったあらましを告げると、皆、驚きの声を上げた。一年ほど前、仏蕃は広州から帰り、数日間寺に滞在しただけでふらりと出ていき、以来何の消息もないと言う。仏蕃が不在でも、寺を訪れる人の流れは絶えず、

とくに女性の姿が目につくのは、他の多くの寺と違って女人禁制ではなく、「女人往生」の大きな扁額があるからだ。と寺僧から聞き、韋荘は深い感慨を覚えた。仏蕃の寺を訪ねたのは、何よりもその扁額を仰ぎ見るためだった。これは、號州の莊園で金剛經の教えを授けてくれた謝礼として、薛未亡人が寄進した金子によって制作されたものなのである。

扁額の下に立ち、薛未亡人を思った。どのような最期だったのかわからない。炎上する屋敷の中で怒りに燃えつつ死んでいったとは思いたくない。心静かに金剛經を唱え、その功德によって、極楽に迎えられたと思いたい。「女人往生」が実現したに違いない。

寺を出ると、蘭は、用事を済ませてすぐに後を追うからと、韋荘をこの酒樓に向かわせた。水辺に面した小部屋を所望し、この店ではなかったが、似たような場所で朱全忠と酒を呑んだのを思った。数えれば十三年だ。もう一つの記憶も甦ってくる。心の奥底に沈めたまま触れずにおきたいものだ。始まりは、芍薬が終わっていまいし季節が進んだ頃だった。間もなくそれと同

じ時期が巡りくる。日の光がもう少し強くなり、風に熱さが籠る頃、嫋嫋とこの揚州で出会った。

さきほどの涙は、嫋嫋を、そして、まだ幼さの残る少女として桂児と呼ばれていた銀犁を想つてのものだったのか。

窓の外の空に目をやる。この腕に抱き、愛した女を、二人ながら不幸にした。嫋嫋はここ揚州で死に、銀犁の行方は知れない。銀犁がいまも生きていると思うのはかえって酷だろうか。二人に女人往生を祈るは己の身勝手か。己ばかりが晩春の好天のもと、この穏やかな風に吹かれ、ゆつたりと酒を呑んでいる。

幼い泣き声が入ってくる。

「ほら、急いで駆けるからです」

続く女の声に注意が向けられる。

「まあ、血だらけ。いま拭きましようから、泣いてはいけません」

転んだらしい幼児への厳しい声。まさかと思うが、彩霞のようだ。どうし



てここに。

泣きじゃくっていた声がおとなしくなる。

「水でしぼってきたから」

確かに彩霞だ。

そつと窓辺に身を寄せる。酒楼の外には柳と榎が交互に並び、その下に小径が通じる。しゃがんだ女の髻が見える。少し身を乗り出すと、幼女の背中が見えてくる。間違いない、春琴だ。すぐに身を潜める。

「転んだくらいで、そこらの女のように、泣くものではありません」

春琴はむぐむぐと何やら答える。

「少しここで休みましょう」

二人は窓のすぐ下に腰を下ろしたようだ。

「血がちよつと出たくらいで、そこらの女のように泣いて、悔しくないのかい。おまえの父は何箇所もの傷を負っても、痛いとも何とも言いませんでした。その娘ではないか」

春琴はまたむぐむぐと言う。

「可哀想に、おまえも人の娘か。どうしておまえも女に生まれてきたのかい。楊爺の生まれ変わりなら、男に生まれてきそうなものなのに、どうしてなんだろうねえ。そんなことを言っても、おまえは困るだけで、仕方のないことなのだけど、女なんか生まれて、つまらないことくらいわかっていただろうに。」

あたしも女に生まれてしまった。女として二十七年も過ごしました。おまえも三歳か。いまさらやり直しはできないけれど、どうせだったら男に生まれてくるのでしたよ。男なら、おまえだってこれしきりの傷で泣いたりしない。これから生きて、よいと思うことだって少しはあるでしょうけど、女では何もない。それなのに女に生まれてくるなんて、どこで間違っただろう。楊爺の生まれ変わりなのに、これはひどいではないかい」

彩霞がこれほど多くを言うのを初めて聞く。

「女として生まれてきて、これからどうするつもりなんだい。楊爺はどうし

ておまえに息を吹き込んだのだろう。女だとわかっていたのに。息をしないのなら、そのままにしておけばよかった。あたしがおまえだったら、それを望みます。これまで生きてきて何ひとつよいことはなかったし、これからもない。あたしの母がそうでした。

それくらいのは、楊爺だつてわかっていたのに、どうしておまえに息を吹き込んだのでしょうか。楊爺の生まれ変わりと言うけれど、女では楊爺の代わりにならない。悲しいことだけど。これはおまえのせいではない。楊爺がいけないのだ。おまえを責めて言うのではありません。

もしかしたら、おまえにとつては、揚州にいるいまのこのときが、一生のうちで最良のときなのかも知れないよ。毎日、おなかいっぱい食べられ、温かい布団で眠れるなんて、おまえは生まれてから初めてだ。このあたしにも、あんなときがあったと思ひ出すことがあります。少しだけだけどね。そのときはおまえと同じで、幼くて、たくさんを思ひ出すことができない。悲しいことです」

韋荘の背中に冷たいものが走る。彩霞が生まれ、純が生まれてしばらくの間は、まだ父親らしいこともしていた。

「おまえは生んでくれた母の顔を知らない。おまえの母はどんな人だったのでしょうか。残念ながらあたしは会っていません。世の女と同じく不幸だったて、おまえの父と一緒になれたのだからね。それは、他のありとあらゆる不幸と十分に釣り合うくらいに幸福だったはずです。

あたしは母を知っている。その点は幸せだった。しばらくの間はね。けど、あたしの母には、おまえの母には恵まれた幸福がなかった。あたしの母が特別だったのではない。ほとんどの女がそうだもの。あたし自身もね。女は本当につまらない。男のために女はどれほどまで不幸にさせられるのか。これからの時代、女はどうやって生きていったらよいのでしょうか。よりによってこんなときに、どうしておまえは女として生まれてきたんだい。生まれ何をしようと言うんだい」

彩霞は、幼い娘に対しても、壁の裏にいる父に対しても、容赦しない。

「いいかい、おまえを責めているのではないのですよ。悲しんでいるのだよ。母とあたしとおまえと、同じことが繰り返されるのが辛いから言うのだよ。

あたしの母のことを聞かせてあげようか。あの人がもしも男だったら、それはまるで違う一生があったのでしよう。貢挙なんか簡単に合格していたに違いありません。母はいつもそう言っていた、自分が男なら、夫なんかあてにせず、貢挙を受けたのにつて。女に生まれて、仕方なく、その夢を夫に託したのです。それで韋家にきたのだけど、それが母の大きな間違いでした。韋家には立派な跡取りがいて、すぐにも貢挙に合格すると聞かされていた。ほら見てごらん、この鏡、これは嫁にきたときに母が持ってきたものです。祖母がここ揚州の職人に注文したものです。綺麗な鴛鴦の透かし彫りがあるでしょう。これは揚州でしか作れないものです。鴛鴦のように夫婦仲良く、願いを込めて持たされたのに、それは全く叶わなかったのです」

韋荘は身を刺す痛みを、声を出さずにこらえる。

洛陽の店で、彩霞が手にしていると見えたのは母の鏡だったのか。彩霞はいつからそれを持つていたのだろうか。

「母が不幸で、その娘が幸せであるはずがない。おまえの母は幸せ者だった。だったら、おまえは幸せになれるのか。女でも可能なのか。おまえのためにそう願いたい。」

気の毒なことに、おまえの父はずっと苦しんでいます。その苦しみの始まりは、楊耶のようになろうとしていることにあるのです。楊耶は立派過ぎた。おまえが楊耶の生まれ変わりで、おまえが男なら、父の苦しみを代わって背負ってもあげられるのに、どうして女に生まれてしまったのかい。おまえを責めるのではないけれど、そう思わずにはいられない」

彩霞は大きく嘆息する。

韋荘も音を立てずに嘆息する。彩霞は春琴によりも自分自身に言っているのだろう。

「でもね、同じ女でも違う人がいます。薛の大叔母さまは御立派でした。あ

の方も結婚は不幸でした。その後が違います。御自身の生き方を貫かれまして。ああ、悲しいことに、大叔母さまの御立派さが、あたしの母にとつては不幸のもとになりました。大叔母さまと母とは相容れなかった。そのようなことが、世の中にはどうしてもあるのでしょうか。慍おじさまとあたしの父もそうです。母はいけないとわかつていながら、慍おじさまを愛しておしまいにまりました。そうすることで自分の生き方が貫けると思い込んでしまわれたのです。まことに悲しいことに」

韋莊は目を閉じる。耳も塞ぎたい。

「あれほど聡明な母が、どうしてあれほど愚かになってしまったのでしょうか。幼いおまえにこんな話を聞かせるべきではないとわかっています。でも、あたしには他に言える相手がいません。どうか聞いておくれでないかい。慍おじさまは本当は良い方なのです。そうでなかったら母が愛するはずがありません。だけど、大叔母さまとあたしの父のために、おじさまはねじくられてしまった。母は元に戻ってほしいと願っていたのでしようけれど、可哀想に、

それが叶わぬとわかって、自ら命を絶ってしまわれたのです。この鏡だけを  
残してね」

娘の声が途切れる。

韋荘の身が崩れる。妻は自殺したのか。

再び彩霞が話し出す。

「女でも六道輪廻から解脱できると仏蕃さまは教えておられます。薛の大叔  
母さまはそのことを信じておられました。大叔母さまは、最後に莊園の滅亡  
を御覧になっても、きつと仏蕃さまの教えに導かれて成仏なさったに違いあ  
りません。大叔母さまはすばらしいお方です。母はあの方のために不幸にな  
ったけれども、あたしは恨んだりしません。大叔母さまのような方がいらし  
たのは、女にとって光明となります。

陸の叔母さまもすばらしい方です。藹の叔父さまがこの上なくすばらしい  
お方なので、陸の叔母さまも素敵でいられるのです。死んだ純が言っていま  
した、綜くんと同じに、藹の叔父さまの子として生まれたかったと」



韋莊は唇を嚙む。

純は綜に向かつてそう言っていたと、蘭からも聞かされた。息子はどれほど苦しい思いを抱えていたのか。

「でも、ここで言っておかないと、おまえが考え違いをしてしまいそうなので、付け加えておきましょう。これはよく聞いておくれ。本当かどうかはあたしにはわかりませんが、おまえは楊爺の生まれ変わりと言うことになっています。だったら、楊爺が一生をかけて何をしてきたのか、おまえも知っておかねばなりません。楊爺は、いつでも私の父、韋莊という人に尽くすことだけを考えていました。楊爺はこの上なく立派な人でした。おまえの父、楊胆さんもすばらしい人です。しかし楊爺にはかきません。その楊爺が一生尽くし続けた韋莊という人に、何の取り得もないとは、娘であるあたしは言いません。純だって、藹の叔父さまの子として生まれたかっただけいながら、父の後を継ぐと懸命でした。韋莊という人には何かがあるのでしよう。それをあたしは言いません。おまえは自分の目であの人を見て、楊爺と同じ

ようにするのがよいのか、よく考えるのです」

韋荘の目にまたうつつすらと涙が浮かぶ。

「できることなら陸の叔母さまのようになりたい。あたしはそう思います。あのような夫婦は、恐らくこの地上にお二人しかいらっしやらないのでしよう。だって、他に見たことありませんもの。おまえにも叔母さまを見習いなさいと思っても、無理なことですね。女はつまらない。女に生まれたのがいけない。自分ではそれはどうにもならないこと。もう女に生まれてしまったのですから」

「なら、男になります」

春琴の声がはつきりと聞こえる。

「男にかい」

「ええ」

「それもよいかも知れないね。男になれるものなら。どうやってなれるのか、あたしにはわからないけれど」

彩霞は苦しげに笑う。

「そうだ、少し楽しい話をしましょう。この揚州にきて、ひとつ面白いことを聞きました。女でもそんな生き方ができるのだと、嬉しくなりました。お名前は荆十三娘（けいじゅうさんじょう）とおっしゃるお方。大きな商人の妻でしたが、夫が亡くなり、何回忌かを蘇州の支山禪寺で行いました。たまたまその寺に趙中行（ちよう ちゅうこう）という人が宿を求めました。貢奉を受ける資格を持ち、豪侠との交わりを好んで諸国を巡る人、その趙中行と荆十三娘さんの目と目が遠くから合い、たちまち双方が一目惚れ。夫の年忌が無事に済み、いつまでも独り身でいることはない、荆十三娘さんは趙中行を舟に招き、一緒に揚州へとやってきました。荆十三娘さんには先の夫が残した財産がたくさんあり、趙中行が揚州に集まりくる義侠の徒と交わりを結ぶのに、好きなだけお金を使わせてさしあげました。趙中行の友人に李生郎（り せいろう）と申す人がいて、その弟の三十九郎が揚州のある妓女と深い仲となっていました。ところが、妓女の養父と養母は酷い人で、三十九郎から妓女を引

き剥がし、諸葛殷（しょかついん）に献じてしまいました。諸葛殷は呂用之（ろようし）の友人、揚州においていまや飛ぶ鳥を落とす勢いの人です。三十九郎が養父、養母を恨んでも、諸葛殷のところに行ってしまつては手も足も出ません。兄の李生郎が三十九郎の苦しみを趙中行に話し、趙中行は『何とかしてやれぬものか』と荆十三娘さんに相談しました。『それしきのことならお任せください』と、三十九郎に、六月六日の正午、長江の向う岸の潤州は北固山のもとで待つようにと言いました。三十九郎が言われた通りにすると、荆十三娘さんの乗る舟が現れ、中には美しく着飾った想いの妓女。荆十三娘さんは妓女を三十九郎に渡し、妓女の養父、養母の首を地面に投げ捨てると、そのまま消え去つたのです。趙中行ともども荆十三娘さんの行方はいまでも知れません。

ああ、あたしもできることなら、荆十三娘さんのように生きてみたいものです

でもそれは無理なこと。夫が首を吊り、妖婦と罵られ、石つぶてで追い出

された女ですもの。あたしは天下に恥をさらすだけ、生きて何の甲斐もありません。

気がついたら、長々と、妙な話をしてしまった。どうだい、傷の痛みはもう引いたかい。歩けるようになりましたか」

「痛くなんかありません。男になったのですから」  
春琴が力を込めて地面を踏む音が響く。

「楊爺の生まれ変わり。強い子ですこと」  
彩霞と春琴が遠のいていく後姿を、窓辺に寄って見送る。

二人の背中が消え、元の卓へと戻り、所在なく盃を口に運ぶ。

降り注ぐ陽光が心を苛むのが耐え難く、体を斜めに、旨くもない酒を飲み下す。

壁を見つめ、まとまりのない思案に沈んでいると、店の者の声が近くで響き、蘭が姿を現す。

「兄貴、芍薬も散り、揚州も用が済みましたな。次は北固山でも見にいきま

せんかな。兄貴はまだ長江を南に渡ったことがありませんでしたな。この機会にどうですかな」

蘭は給仕に酒やら料理やらを注文し、韋荘の顔を覗き込みつつ腰を下ろす。「また難しいことを考えていたのですかな。一人にすると、すぐにあれこれ考える。悪い癖ですな」

「ぼんやり外を見ていただけだ。考えてなどいない」

「眉間に皺が寄っています。料理も手付かずのよう。何を考えていたのですかな」

「そなたを待っていただけだ。それより、北固山とは何のことだい」

「潤州の有名な山を知りませんか。『客路 青山の下、行舟 緑水の前』」

王湾（おう わん）の詩は子どもでも諳んじていきましょう」

「北固山は知っている。なぜいこうと言うのかい」

「名所を兄貴に見せたいと思ひましてな。そのついでに、可哀想な妓女を助け、待ち焦がれる男に届けてやろうかと」

蘭は笑う。

「荆十三娘の話かい」

「ほう兄貴も知っていましたか。案外の早耳ですな。いつの間にか色里あたりについて、聞いてきたのですかな」

「あるはずもない」

嫋嫋や銀犁の記憶が残る九里三十歩街には足を踏み入れていない。

大皿がどすんと置かれる。丸ごと煮た魚から湯気が立ち昇る。

「これは旨そうですな」

蘭は魚の身を崩し、すぐに食べ始め、新しくきた温かい酒をあおる。いつもながらの食っぷりだ。

「用事は何だったのかい」

「いや、なに、店の商売の足しになるかと思いましたが」

蘭につられて箸を手にとると、さすが揚州の魚料理、結ばれた気持ちが少しほぐれ、温かい酒が心を和らげてくれる。

蘭が魚を食べるのに忙しくしていて、いつもの多弁が戻る前にと、思い切つて、窓の下に彩霞がいたことを話してみる気になる。

蘭はねぶつっていた尾鰭を吐き出し、

「姉さんのこと、聞いてしまいましたか。いつか話さずにはおられまいと思つてはいましたが、落ち着くまではと、兄貴には悪いが、皆で隠しておくことに決めましてな」

「皆でとは、彩霞もかい」

「彩霞ちゃんが言い出したのですな」

「どうして」

「兄貴を苦しめたくないからでしょうな。ただでさえ大変なときに、何も急いで聞かせることはないよ、そういうことなのでしょうな」

「彩霞が一番辛いだろうに」

「だからこそ兄貴に内緒にしておこうと思つたのでしょやうな」

「で、どうして死んだとわかつたんだい。それはいつなんだい」



「憐くんが知らせてくれたのですな」

「憐くんが。あのときにかい。だって、そなたは何も言わなかったではないか」

「だから皆で隠すと決めたので」

「憐くんが帰って、さほど間を置かずに、私は帰ってきたではないか。いつ相談したのだい」

「憐くんを俺が見送る間に、彩霞ちゃんや姉さんに頼み、姉さんが俺に言った。姉さんに言われたら、はいと答えるしかありませんからな」

「私が帰ったときには、胆が何か言っていたようだが」

「姐さんと俺と話している最中に、出ていくと胆が騒ぎ出し、ひと悶着あつて、その間に兄貴が帰ってきたのですな」

「で、憐くんは、あれについてどのような話をしたのかい」

「実はですな、憐くんが洛陽の店にきてくれたのは、楊銀たちに気をつけるようにとか、莊園から奪われた品を届けるとか、そんな理由でと兄貴には言

いましたが、それは二の次、三の次で、第一には、姉さんの最後の頼みを果たすためでした」

「あれは何かい、憐くと会っていたのかい」

「会うも何も、姉さんはずっと憐くんのところにいたのです。慍くんは莊園を出てから、姉さんをあちこち連れ回し、持ち金を使い果たしてしまおうと、かねてから知っていた憐くんの家にころがりこんだ。憐くんが、慍くんに対して親切にし、貢奉の勉強の援助をしようと言ったとか、そのあたりのことは兄貴にも話しましたな。姉さんも一緒だったのです。慍くんは昔の悪い仲間と交わり、洛陽の店のものを盗むなどして、姉さんと諍いが絶えず、果ては大喧嘩となって、慍くんは憐くんのところから出ていかざるを得なくなりました。范執事の家に慍くんが姿を現したのはそのころだったのですな。その後、鹿晏行の軍師に招かれると、慍くんには慍くんなりの情があったのでしょうか。姉さんを迎えようと憐くんを訪れた。晴れて出世する身を見せれば、姉さんの心も変わるだろうと、立派な身なりで、金やら高価な品やらを携えて

いった。姉さんも半信半疑ながらも軍師に迎えられたのを喜ぶように聞いていたらしいのですが、愠くんは、姉さんをもっと喜ばせようと、黒葛籠を出し、莊園を滅ぼしたことを得々と語ったのですな。姉さんは薛の叔母に酷い目にあわされ、兄貴を恨んでいましたから、長年の溜飲を下げてくれると思っただけでしょう。ところが、姉さんは激高し、懐劍を抜いて愠くんに切りつけた。愠くんはほうほうの体で逃げていった。その日の夜のうちに、姉さんは喉を突いてしまわれたのですな。亡骸の脇に鏡が置かれ、娘に渡してほしいと書き置きがあった。それで憐くんは店にきてくれた。そう言う訳ですな」

なぜ喉を突いたのか。彩霞が言っていた通りだったのか。

韋荘は大杯をあおって咳き込む。

「彩霞ちゃんに鏡を遺したが、他に言葉は何もなかったと、憐くんは言っていましたな。どうして鏡を遺そうとしたのでしょうかかな」

「母のようにはなつてはならぬと言いたかったのだろう」

「でしょうかな」

韋莊は盃を酒で満たし、手にとって眺め、そのまま置いて遠く押しやる。

「で、北固山がそのままになっていた。どうしていこうと考えているんだい」

「そのことでしたら、荆十三娘の真似をしたいと、ちよいと思ひましてな」

蘭は立ち上がって窓から首を出し、

「兄貴のように、人の話を立ち聞きする輩がいては困りますからな」

部屋の扉の方も見て回り、椅子を寄せて、声低く、

「荆十三娘が助け出したのは李三十九郎と恋仲の妓女。養父、養母が諸葛殷のところへ売ったと兄貴も聞きましたでしょう。諸葛殷は呂用之の無二の親友。俺もここにくるまでは、揚州と言えば、高駢どのがどつかと構え、黄巢も敬遠したとばかり思っていました。揚州の町では誰も高駢どこのことを言わず、もっぱら呂用之が今日はどうした、誰と会って何を話したと、そればかりを言いますな。兄貴の『秦婦吟』を高駢どのに献じる機会を得られぬかと、今日も知人に尋ねてみましたが、返事は同じでしたな。高駢どのが外の人と会うことはない。揚州では呂用之の御機嫌を取り結ばねば何事も始

まらず、呂用之は高駢どのには極力自分以外の者を会わせないようにしているのですな」

「呂用之の名は良く聞くが一体何者なんだい」

蘭は左右に目を配り、

「もとは鄱陽の茶商の倅。丹砂を金銀に変じる術に長じ、公の事であれ、私の事であれ、尋ねられればこれから何が起るのかぴたりと当てるとの評判。神仙の道を好む高駢どのに呼ばれてたちまち寵愛を得、何であれ真つ先に尋ねられるようになった。高駢どのが呂用之の答える通りに事を決め、いまではすっかり呂用之の言いなりなのですな。呂用之は高駢どのに昔から仕えてきた人々を遠ざけ、不老長生の術を得るには、不浄の俗人と会うが最も妨げと、高駢どのを宮殿の奥に移し、どうしても会う必要のある者には、何日間も沐浴齋戒させ、会えてもごく短時間、直接言葉を交わすのも禁じているようですな。」

諸葛殷は鄱陽にいたところからの友人。かなり風貌が変わっているところか

ら、これは使えりと呂用之が呼び寄せ、これこそまことの神人と偽って高駢どのに会わせた。諸葛殷はうまいこと振る舞い、奇怪な仕草と支離滅裂な言辞で高駢どの目を眩ませた。呂用之は、修行の成果があつて神人と会えるようになったのですと高駢どのに祝いを言い、さらに修行を積めば、自身も神人になれるとその気にさせた。神人は空を自在に飛び、高い楼閣を好むと、楼閣の建設を勧め、それでいま揚州に聳える高さ八丈の延和閣が十五万緡を費やして建てられたのですな。

このような呂用之の出鱈目に人々は怒り、荆十三娘の話も語られるようになった。呂用之は民衆の悪口を気にし、小狡い男ばかり数百人を巷に放ち、良からぬことを言う者を片っ端から捕らえさせていますな。泣く子も黙る察子どもがそこらをうようよしている。察子のために破滅した家は数百に及ぶとか。裕福な家を狙って財産を掠め取り、見目麗しい妻や妾がいれば、諸葛殷や仲間たちと分け合う始末。呂用之の一家の家には、どこも百人以上妾がいるらしいですな。こんな話をしているのが察子に見つかれば、俺の店もた

ちまち破滅。恐ろしいことですな」

蘭はわざとらしく身を震わせる。

「高駢どのは呂用之の悪事を何も知らないのかい」

「いまや不老不死の術を得ることしか関心がないようですな。兄貴も『秦婦吟』を献じようと考えるのなら、呂用之に取り入り、その上で、神人の真似でもしてみせないことには、難しいでしょうな」

「高駢どのがそのようなことになっているとは」

「それで北固山にいくしかあるまいと考えましてな」

「高駢どのがだめなら周宝（しゅうほう）どのなのかい」

「簡単に言えばそうなりますか。周宝どのは高駢どのと競い合ってきた間柄。高駢どのが長江の北岸でこの体たらくなら、長江の南岸で周宝どのはきつと別のことを考えておられましょう。高駢どのが神人狂いの一方で、周宝どなのもとは長安や洛陽から落ち延びた人々が大勢集まっているとか」

「周宝どのは皇室とも縁故のあるお方。都の現状に心を痛めておられるのだ

ろう」

「高駢どのが神仙の道に溺れている間に、うまいことやってやろうと野望を温めているかも知れませんか」

「どう言うことだい」

「沙陀族の李克用が都から近々黄巢を追い出して、それからどうなるかですな。もしも李克用が黄巢を真似て皇帝を名乗ったりしたら、兄貴はどうなると思いますかな」

「沙陀が皇帝になるなど考えたくない」

「李克用がどのような皇帝になるのか見たい気がしませんかな」

「夷狄の皇帝をそなたは歓迎するのかい」

「いまの唐の皇帝よりはましでしょうからな」

「黄巢が都に入ってきたときにも、似たようなことを言っていたではないかい。仁も礼も知らぬ夷狄だ、黄巢よりひどいことになるのは必定だ」

「もし残虐無道の夷狄の皇帝が唐土を支配するようになったら、兄貴はどう



しますかな。命がけで戦いますかな。それとも逃げますかな」

「逃げるとは、どこに逃げるのかい」

「西なら天竺、東なら蓬萊島ですか。天竺は仏蕃の故郷、蓬萊島は綜くと鯨を釣ろうと約束したところ。蓬萊島が遠すぎるのなら、日本はどうですか。兄貴も覚えていきましょう、昔、ここ揚州で、日本からきた敬童とか言う僧を助けてやったのを。首尾良く敬童が日本に帰り着いていけば、俺たちは大恩人、日本で評判になっているやも知れませんが。日本にいれば、恩返しにと、敬童がうまいこと世話してくれるのではありませんかな」

「そう言えばそんな僧がいたが、夢みたいな話をしてもどうにもならんだらう」

日本に帰る敬童を揚州の色街で見送った。桂児の銀犁が日本の歌を教わった。思い出すと辛くなる。

「李克用がすばらしい皇帝になってくれれば一件落着、話は早い。そうでないときは、唐土の民としてはお上を盛り立て、沙陀と戦うのでしょうか。」

そのとき唐朝側の中心に誰がなるのかと考えると、お父ちゃんの田令孜には出てきていただけたくない。豊かな長江下流域に睨みをきかせている高駢どのか周宝どのかどちらかになるのが自然でしようかな。神仙の道に狂っている高駢どのは、周宝どのがその気になれば簡単に蹴落とされましよう。それで周宝どのは野望を温めているのではないかと、当たるや当たらずや、俺の予想なのですな。こゝ揚州も周宝どこの手に落ちることになりましようかな」

蘭は微かに笑い、立ち上がってまた部屋の入り口と窓のあたりを見る。

「そんなにびくつくくらいなら、妙な話をしなければよいのに」

「この口から出たことで、俺が察子に睨まれるのなら、それはそれで覚悟もしましようが、店に狙いを付けられるとやっかいですから。あの店もそこそこに財産がある。范完と伍伝がせつかく守ってくれ、呂用之の仲間ともよろしくやってくれているのに、俺の軽口で駄目にしては申し訳が立たない。そのようなことになる前に、俺はさっさと出ていくべきでしょうな。店とは関わりのない人間になって、北固山にいくのがよしと。大体がそのような訳

なのですか」

「それは何かい、店を二人にやると言うことなのかい」

「やるも何も、あの店はすでに二人のもの。范完と伍伝は義理堅く、俺をまだ主人だと思ってくれているようですが、俺たちが長安で死んでいけば店はずっと二人のもの。二人の邪魔をせぬようここを去るのがよいのですな」

「あの二人がいてこそその揚州の店だから、それはそれでよいとして、店を二人に渡してからは、どうするつもりなのかい」

その問は韋莊自身の問題でもある。

「揚州には芍薬を見るためにきたと言っても、やはり店があるからきたので、店がなければ、真実、風に任せてどこへでもいけましょう。これ以上に楽しいことはないではありませんかな。北固山にいき、それから、蓬萊島でも、日本でも、自由にいけましょう。唐の外にも、もつともつと麗しい国がありますよ。それを見られると思うと、心躍りませんか」

蘭は盃を挙げ、嬉しそうな顔で酒をあおる。

「風任せに生きられたらそうしたい。彩霞は、荆十三娘のように生きたいと言っていた。そのように思っても、実際にはなかなかできるものではない。荆十三娘には死んだ夫が残した莫大な財産がある。だから、自由に動け、自在に人助けもできる。我らには荆十三娘の財はない」

「金の心配ですか。下手に財があるから、察子の目を恐れておどおどするのですな。俺には荆十三娘のような財もなく、義侠心の持ち合わせもない。どちらにも俺には重石ですな。身も軽やかに潤州か蘇州か杭州か、そこらを気ままに巡ってあくどい商売をし、汚く儲けて、揚州で万一のことがあったら、范完と伍伝を呼んでやる。そうなれば万々歳と、もっぱら考えるのは己の利ばかりですな」

蘭はひどく気楽そうに言う。

考えてみれば、自分たちが蘭の一番の重石ではないのだろうか。蘭一人なら、天竺でも蓬萊島でも自在にいけるだろう。蘭は風任せと言いつつ、本当にはそうはしておらず、己や藹たち、引いては揚州の店を守ることも考えて

いる。この従弟に頼るだけでよいのか。

「ふと思ったのだが、最初の貢挙で合格していたら、いまごろはどうなっていたらどうか」

「何を言い出すのですかな。酔いましたかな」

「何もかも違っていたのではないかい」

「それはそうでしょうな。あのとき兄貴が合格していたら、脂粉の香の染み込んだ手巾を恵んでもらうこともなかったし、一緒に旅に出ることもなかった。立派な官人になった兄貴のお蔭で莊園は大いに繁栄して、俺は兄貴の名を汚さぬように遠く離れたところにいてですな、それこそ天竺に向かつて歩いていったか、蓬萊島に渡る船に乗っていたか、そんなところでしょうか。」

兄貴が落第してくれたお蔭で、こうして、俺はまだこの結構な唐土にいられ、全うに生きていられるのですな。兄貴に感謝をしないとイケませんな」

「そなたの生き方を曲げてしまったのではないのかい。私はずっと助けらればかりだ。いまだってそなたがいなければここで生きていられない」

「何を言いますかな、俺がいたために、兄貴を誤らせてしまったと俺は思っています。申し訳ないことばかりですな。その一つが揚州から無理に連れて帰った。荊十三娘とは正反対に、恋仲を引き裂く役をしてしまった。兄貴はそれでいまでも辛い思いをしている。申し訳ない」

「私が情けない男であるだけだ。私が駄目なのだ。駄目な男だから貢挙にも落ちた。貢挙に受かっていれば、あのとき揚州にきたりしなかった。落ちたのが全ての間違いのもとだ」

「本気でそのように思っているのですかな」

「半ばは本気だ。しかし、そもそもの間違いは何かと遡って考えると、貢挙を受けようとしたことにあるのだろう。初めから考えていなければ、それが最もよかったのだ。父上も貢挙で一生苦しんだ。それがわかっていながら、どうして貢挙を受けようなどと思ったのか。生まれてから、そうすることに疑いを持たなかった。そなたの父上のように、貢挙に背を向けた人が間近にいなから、どうして気付かなかったのか。貢挙を受けようと思わねば、彩霞

の母が私のところにくることもなかった。無残な死に方をさせることもなかった」

「それはどうですか。親父どのも俺も、勝手にやらせてもらって、兄貴や伯父上を苦しめるだけだった。だから、ものの言える立場ではありませんが、韋の一族としてそのときそのときでそれぞれに為すことがあったのではありませんかな。後になって、元へ遡ってみても仕方がありませんでしょう」

「叔父上は御立派だった。それがよくわかっていなかった。そなたもそうだ。莊園のことを、そなたは真剣に考えてくれていた」

「俺は何もしてやしません」

「それに引き換え、私は駄目だった」

「違つと、俺は思います」

「どうであれ、直しようのない昔を言っても始まらない。それくらいの道理は私でもわかる」

「まあ、そうですね」

「ならば、貢挙のことなどこれ切りにして、長江を渡るついでに川の底の底に沈め、それこそ重石のない身となつて、北固山にいつてみるとするか」

蘭は韋荘の顔をじっと見つめる。

「兄貴がそう望むのなら結構ですな」

「王湾のように『郷書 いずれのところへ達せん、帰雁 洛陽の辺』などと、故郷の方を顧みたりもしない」

「顧みても、故郷には何もありませんしな」

「その通りだ」

一人で待っている間に泣いたようなことはもうよそう。わずか半年余りの間に、遠く流れゆくばかり、揚州も落ち着く場所ではなかった。ともに都を出た東呉くんや東周のような忠義の志を持たず、成り行きでここまできた。振り返るのはよそう。長安であったことは『秦婦吟』に筆めた。顧みずに、これからの先を見よう。

しかしながら、己の運命を変え、人々のためにもなると、期待もしていた



『秦婦吟』は、洛陽でも揚州でも、報われることはなかった。今度は周宝に献じようとするのか。己にはこれ以上のもは書けないと思える『秦婦吟』も、人々に聞かれぬ虚しい歌声として終わってしまうのか。己が拙いたために、秦婦の悲痛の叫びを人々の胸に響かせることができないのか。

かつて狐潭で阿枉と伍七を見て、二人の小さな幸せを守ってやりたいと考えた。その思いがありながら、己は最も身近な人々を不幸に陥れてばかりだった。全てが誤りの人生だったようだ。過去を顧みないと言って、この過ちがなかったようにしてよいのか。そうしようとする卑劣な己であるから、詰まらぬ詩しか作れないだろう。杜甫や韋応物に己をなぞらえようとしたのは何ともおぞましい限りだ。秦婦のために、己の卑小さを謝らねばならない。蘭は再び勢いよく食べて吞んでいる。

「いまも長安では飢えて苦しんでいる者がいると思うと、この料理、平らげてしまわねば、勿体なさすぎますな。兄貴も、ほら、どんどん食べて」  
 「このような贅沢が許されるものだろうか」

「世の中がよくなれば、いくらだって食べるようになりましょう。ちよっと前まではそうでしたからな」

「世の中はまたよくなるのかい。そなたは、唐の世の次の世がくるまでには長い時間がかかると、いつしか言っていたではないか」

「それはその通りといまも思っています。しかし、長安からここまでの間にいろいろと見て、もううんざりですな。これ以上のことは起こってほしくない。早く戦乱がおさまってほしいと、心から願っております。だから、世の中、よくなるはずと言っておきたいのですな」

「気休めかい」

「気休めだけで終わってしまうか、そうでないかは、兄貴の『秦婦吟』次第でしようかな」

「何を言う」

「兄貴の作で、兄貴が目の前にいるから言うのではなく、あれは立派な詩です。だから俺も真剣になって、高駢どのに献じる手立てを探した。しかし、

揚州の状況は絶望的です。気休めでもよくなると言っておきたいと言った舌が乾かないうちに何ですが、揚州の町ももう長いことないでしょうな。唐土全体が長安によってしまいかも知れない。それを防ぐにはどうしたら良いのか。『秦婦吟』を広めることです。秦婦の叫びを聞かぬから平気で戦ができるのです。勝つことのみ、利を得ることのみを考え、民衆にいかなる災禍が及ぶか念頭がないから戦が起こせる。だから『秦婦吟』が重要なのです。唐土の民の誰も『秦婦吟』を歌うようになれば、戦は自ずとなくなりましょう」

「荒唐無稽な話だ。あり得ない」

「あり得ると信じた方が楽しくありませんかな。兄貴ではなかったですか、死んでしまった者のために、生きていられるのが幸運であると思うように生きねばならぬと言ったのは。兄貴は生き延びて『秦婦吟』を作った。それ以上の幸運はなかったと思いたいですな」

「あれとて所詮は寢床にいて書けるような詩だ」

「でしようかな。兄貴はこれからは『秦婦吟』とともに生きていくことになるのではないですか」

蘭は励ますために敢えて言ってくれているのだろう。それに応えて、力強い返事をしたいところだが、口から漏れるのは溜息である。

多くの者の人生を踏みにじるようにして生きてきた。このような己のところに蘭をいつまでもいさせてはいけない。蘭を自由にしたい。蘭には蘭の道筋があるはずだ。己は独り立ちしなければならぬ。五十に近くなった男がいまさら独り立ちとは情けない話だが、その目途は立ちそうにない

過去は変えられない。同じ過ちを、せめていま身近にいる人々に対してはしてはならない。いまからでは遅すぎようが、彩霞にも望むような生き方をさせたい。弟夫婦にはこれ以上の労苦を負わせぬ穏やかな暮らしを与えたい。綜には息子の苦しみを、淑娥と春琴には彩霞の不幸を、決して味あわせない。楊胆を苦しみから解放させたい。

そのような願いのどれ一つとしてできそうなものがない。それなのに揚州

の初夏の陽射しは麗しい。卓の上に酒と料理がなおふんだんにある。これはあつてはならぬ異様なことではなからうか。